中京大学博士審査学位論文
大学院文学研究科

中上健次作品論―〈秋幸サーガ〉から見る〝父殺し〟と天皇制批判―

二〇二二年三月十九日学位授与

中京大学大学院文学研究科日本文学・日本語文化専攻博士後期課程
佐藤綾佳

目
次

序　1
第一章〈秋幸サーガ〉の生成過程　6
はじめに　7
一、初期作品に描かれる兄の自死　7
二、初期作品における〝海〟と兄の自死　9
三、詩から小説へ　13
四、主人公の成熟と兄の自死　15
五、母系一族の黄金期と罪　17
六、竹原秋幸の生成　18
七、実父との関係と自然への同化　19
八、初期作品に描かれた佐倉　21
おわりに　22
第二章『岬』論―秋幸が自己を確立するまで―　26
はじめに　27
一、『岬』の人物関係　27
二、姉による父の法事の妨害と母系のしがらみ　29
三、兄との相似を強いられる秋幸　30
四、『岬』におけるにおい　34
五、近親相姦と秋幸の自己の確立　36
おわりに　39
【主要人物　関係図】　42

表　「足音」と「におい」　43
第三章―一節　『枯木灘』論―秋幸の死と再生―　44
はじめに　45
一、秋幸が〈反復〉を行う理由　45
二、帰属する場所を持たない秋幸　49
三、秋幸に流れる浜村の血と暴力性　55
四、特別な女性「紀子」　58
五、秋幸の死と再生　60
おわりに　63
【主要人物　関係図】　65
第三章―二節　『枯木灘』論―土方作業から見る秋幸の暴力性の開花―　66
はじめに　67
一、秋幸にとっての土方作業　68
二、「染まる」＝主体の放棄　70
三、「ふと」思う秋幸の変化　72
四、秋幸の暴力性の開花　75
四―i、オートバイと父系　75
四―ii、カルピスと母系　76
四―iii、白痴の少女と近親相姦と龍造　76
おわりに　77
第三章―三節　『枯木灘』論―〈秋幸サーガ〉と神話―　80

はじめに　81
一、〈秋幸サーガ〉と神話構造　81
二、秋幸とスサノオ　84
三、土地との性行為　86
おわりに　89
第四章―一節　『地の果て　至上の時』論―〝父殺し〟に向かう秋幸―　91
はじめに　92
一、「新宮」という聖なるトポスの消滅　92
一―i、聖なる六さんと俗化した秋幸　92
一―ii、神聖なる「土方」の消滅　93
二、「影」を見つけた秋幸　94
三、龍造を追い詰める秋幸　96
四、〝父殺し〟の成功　98
四―i、秋幸を〝父殺し〟へと向かわせる「水の信心」　99
四―ii、シシ狩り＝〝父殺し〟の象徴　99
五、邪悪な存在となったことを認めた秋幸　105
おわりに　106
第四章―一節補説　『地の果て　至上の時』論補説―「水の信心」から読み解く〝父殺し〟の成功―　108
はじめに　109
一、「水の信心」について　109
二、秋幸と龍造にとっての「水」を飲む行為　111

三、新宮における清水　112
四、死者の蘇りを待つ空間　113
五、老婆の腐乱死体が示す〝父殺し〟の成功　115
おわりに　117
第四章―二節　『地の果て　至上の時』論―「路地」の真の姿と秋幸の業火―　120
はじめに　121
一、先行研究における「路地」の消滅　121
二、「路地」内部の差別構造　123
三、秩序から抜け出せない人々　124
四、龍造像の相違　125
四―i、これまで秋幸が抱いていた龍造像　126
四―ii、実際に目の当たりにした龍造　127
五、真の秋幸の誕生　128
六、龍造の「路地」に対する憎しみ　131
七、真の「覇王」・秋幸による「路地」の浄化　133
七―i、元「路地」の住人の帰還　133
七―ii、「路地跡」放火から見える新たな「覇王」としての秋幸　135
おわりに　137
第五章―一節　『鳳仙花』論―父の欠落から見る天皇制批判―　140
はじめに　141
一、先行研究の確認　141

二、中上健次の天皇に対する認識 …… 142
三、章立てと男達の登場回数の確認 …… 144
四、吉広と勝一郎の役割 …… 146
五、父となることを拒絶された龍造 …… 147
六、物語から欠落した父 …… 149
七、佐倉と天皇 …… 150
七―i、〝路地の天皇〟・佐倉 …… 150
七―ii、天皇制を批判する …… 153
おわりに …… 154
第五章―二節　『鳳仙花』論―史実の歪みから見える天皇制批判― …… 156
はじめに …… 157
一、先行研究の確認 …… 157
二、本作における史実描写 …… 159
三、歪められた史実 …… 162
四、作中に描かれなかった史実 …… 163
おわりに …… 168
「新宮市街地図」抜粋 …… 171
むすび …… 172
既発表論文発表誌一覧 …… 177

凡例

一、引用は原則として、『中上健次全集』（集英社）に拠り、全集未収録の作品については初出に拠った。

『岬』『枯木灘』→『中上健次全集　3』

『鳳仙花』→『中上健次全集　4』

『地の果て　至上の時』→『中上健次全集　6』

初期作品→『中上健次全集　1』『中上健次全集　2』『中上健次全集　14』『中上健次全集　15』

一、引用の傍線・傍点は断りがない限り、論者が付した。

一、引用本文の「／」は改行を示す。

一、頁数は『中上健次全集』（集英社）に拠る。なお、（14、二八・九頁）の算用数字は全集の巻数を示す。

一、作品タイトルは『』で示した。

一、中上健次作品の書誌情報は初出時に明記した。

序

本論文では、従来〈秋幸三部作〉と呼ばれている『岬』[1]、『枯木灘』[2]、『地の果て　至上の時』[3]の三作に、秋幸の母・フサの半生を描いた『鳳仙花』[4]を合わせた四作品を〈秋幸サーガ〉と呼ぶ。[5]

中上健次の作品を論じる上で、彼の出自は看過できない。中上は「木下」「鈴木」「中上（なかうえ）」「中上（なかがみ）」と四つの姓を持っている。母方では六人兄弟の末っ子、実父方では五人兄弟の長男、義父方では二人兄弟の次男であるという非常に複雑な環境下に生を受けた。中上が小学二年の頃、彼一人を連れて母は再婚した。母に捨てられる形となった兄は、アルコール中毒に陥り、中上や母を殺そうとするも果たせず、中上が十二歳の時、二十四歳の若さで縊死してしまう。この兄の縊死は中上に強い衝撃を与えた。この事件は中上にとって永遠に答えの出ない問いとなり、まるで呪縛されたかのように初期作品から繰り返し描いてきた。

また中上が抱き続けたもう一つの問題として、被差別部落出身であることが挙げられる。中上は幼少期に暮らした被差別部落をモデルに「路地」と名づけた虚構空間を構築し、作品の主要舞台とした。このように、中上作品には、根底に潜む血縁と地縁とが複雑に絡み合って生成されているのである。そして中期には、中上自身の複雑な心情を投影した自らの分身とも言える竹原秋幸を創造した。

本論文は竹原秋幸による〝父殺し〟の読み直しを行い、併せて中上作品に一貫するテーマである天皇制批判を読み解くことを目的とする。これまで〝父殺し〟は、『岬』『枯木灘』『地の果て　至上の時』から成る〈秋幸三部作〉の枠内から読解され、柄谷行人や渡部直己らによって〝父殺し〟は失敗したと論じられてきた。例えば柄谷は、浜村龍造の自殺によって、秋幸の〝父殺し〟は果たされなかったとした。その上、自殺以前から「秋幸さんはわしの子じゃない。わしの親じゃ」とフサに話す浜村龍造の言葉によって、「親」の位置ではなく「息子」の位置に降りてきているため、〝父殺し〟は不可能だと述べた。[6]また、渡部も柄谷と同様に、浜村龍造が秋幸の子だと言っているため、浜村龍造は秋幸の父の座から既に降りており〝父殺し〟は成り立たないと論じている。[7]このような柄谷らが提言した〝父殺し〟失敗説について、先行研究では疑義を呈することなく、鵜呑みにしてしまっている。

とはいえ、〝父殺し〟において必ずしも秋幸が自ら手を下す必要はなく、浜村龍造を追い込んで成功させる方法もあるのではないだろうか。また浜村龍造が秋幸の位相に下りたのではなく、浜村龍造と対峙していく過程で秋幸が彼の位相へ上昇したとも考えられるのではないだろうか。そこで秋幸の成長過程を見直す必要がある。

さらに柄谷は、中上が三年もの期間をかけて執筆した『地の果て　至上の時』の評判が悪かったため、中上は傷つき、その後、『地の

果て　至上の時』のような「力仕事」はやらなかったと指摘した。[8] なぜこの時、中上がやってのけた「力仕事」の内容を検討していないのか。その後、このような「力仕事」をやらなかった裏には、ここで中上の書きたかった一つのモチーフを書き終え、昇華したからだと考えられないだろうか。そもそもなぜ〈秋幸三部作〉の括りで読まなくてはいけないのかと、論者は疑問を抱いている。なぜなら、『枯木灘』と『地の果て　至上の時』を執筆する間の時期は、中上が『紀州　木の国・根の国ルポルタージュ』[9] 執筆のため熊野の被差別部落を旅し、また新宮市で部落青年文化会を立ち上げ、公開講演講座を行うなど、被差別部落に対する問題意識を外に向けて発信し始めた転換期であり、その上、新宮市の地区改良事業によって実際の「路地」が消滅した期間に当たるからだ。したがって、『岬』『枯木灘』執筆当時の中上と、『地の果て　至上の時』執筆当時の中上とでは、描ける、もしくは描きたい問題が変容していたと考えられる。そしてその問題こそ『鳳仙花』に内包されており、同時に『地の果て　至上の時』に潜在していると言えよう。

竹原秋幸と「路地」を描いた作品の整理を行い、〈秋幸サーガ〉に『鳳仙花』を加えた理由を説明する。竹原秋幸が描かれている作品と聞くと『岬』『枯木灘』『地の果て　至上の時』から成る〈秋幸三部作〉と呼ばれる秋幸を主人公とした作品をイメージしがちだ。しかし、『鳳仙花』と『奇蹟』にも脇役ではあるが秋幸は登場しているのだ。『鳳仙花』は秋幸の母・フサを主人公とし彼女の半生を描き、『奇蹟』[10] は「路地」を舞台に、アキユキ（『岬』などにおける秋幸と同一人物）の兄・イクオら高貴で穢れた血を背負わされた中本の一統を描いた作品だ。だが共に「路地」を舞台としながらも、『鳳仙花』と『奇蹟』は同じ系統の作品とは言えない。この二作を比較すると名前の表記方法の違いに気がつく。『鳳仙花』が漢字表記であるのに対し、『奇蹟』ではカタカナ表記である。これは、「路地」のグレートマザーであり、全知全能のオリュウノオバが文字の読み書きができず、「路地」の者の祥月命日や血縁関係を暗誦したように、文字ではなく声によって「路地」の物語が伝えられたことを踏まえているからではないだろうか（ただし、オリュウノオバと中本の一統を描いた『千年の愉楽』[11] における名前の表記を見ると、カタカナを用いた人物と漢字を用いた人物の両者が存在する）。対して、自身を戦後の教育改革によって「部落が文字と出会って生れ出た初めての子である」[12] と記したように、中上は「路地」で最初に書き言葉を習得した世代であった。そのような彼自身を秋幸に投影しているため、秋幸を描く作品では名前が漢字表記になるのだ。つまり、『鳳仙花』は中本の一統を描くことを目的とせず、また「路地」の内部に焦点を当てて前景化した展開ではないため、名前が漢字表記になっていると言えよう。よって秋幸に関する物語は、母系一族の物語の序章をも描いた『鳳仙花』を加えた〈秋幸サーガ〉という物語群で読み

解くべきだ。

中上は芥川賞を受賞した時に、「ずいぶん昔から、まだ力がない、まだ駄目だ、と、はやる腕を、筆を、おさえてきた」[13]と語った。つまり、『岬』執筆以前からこの作品のモチーフを書こうとしていたのだろう。そのモチーフが書かれているはずの初期の主要な詩やエッセイから小説までを論じた先行研究は数える程であり、その中でも詩について言及したものはほとんどない。そこで、本論文では〈秋幸サーガ〉を読み解く前に、中上の家族を模した人物や、紀州熊野と覚しき土地を舞台とした初期作品の整理を行い、〈秋幸サーガ〉を執筆するに至る過程を検討する。そして、〈秋幸三部作〉と呼ばれている三作品の読み直しを行い、従来唱えられてきた〝父殺し〟の失敗説を覆し、物語群の深層に込められたモチーフを明らかにすることが本論文の試みである。また、『鳳仙花』を物語群に加えることで新たな解釈の枠組みを提示したい。

注

（1）中上健次『岬』（「文学界」一九七五（昭和五十）年十月）

（2）中上健次『枯木灘』（「文藝」一九七六（昭和五十一）年十月～七七（昭和五十二）年三月）

（3）中上健次『地の果て　至上の時』（新潮社、一九八三（昭和五十八）年四月、書き下ろし）

（4）中上健次『鳳仙花』（「東京新聞」一九七九（昭和五十四）年四月十五日～十月十六日）

（5）〈秋幸サーガ〉という言葉は、市川真人が「解説　覇王からの／までの距離」（新装新版『枯木灘』河出書房新社、二〇一五（平成二十七）年）の中で、『岬』『枯木灘』『地の果て　至上の時』にそれらの前日譚である『鳳仙花』と後日譚である『鰐の聖域』（「すばる」一九九〇（平成二）年二月～九一（平成三）年九月・未完）『大洪水』（「週刊ＳＰＡ！」一九九〇（平成二）年六月十三日号～九二（平成四）年二月二十六日号・未完）を含めた作品群の総称として用いた。市川は中本の一統を描いた『奇蹟』と『千年の愉楽』を指す〈中本サーガ〉と区別する意味合いで使っている。本論文では竹原秋幸の成長に着目して論じていくため、竹原

秋幸が描かれない後日譚は〈秋幸サーガ〉に含めない立場を取る。

（6）柄谷行人「解説」（中上健次『地の果て　至上の時』新潮社、一九九三（平成五）年）

（7）渡部直己「叛意について　中上健次と被差別部落」（『中上健次論　愛しさについて』河出書房新社、一九九六（平成八）年）

（8）浅田彰・奥泉光・柄谷行人・渡部直己「差異／差別、そして物語の生成　繁茂する「路地」のテクストをめぐって」（柄谷行人・渡部直己編『中上健次と熊野』太田出版、二〇〇〇（平成十二）年）

（9）中上健次『紀州　木の国・根の国ルポルタージュ』（「朝日ジャーナル」一九七七（昭和五十二）年七月一日号～七八（昭和五十三）年一月二十日号）

（10）中上健次『奇蹟』（「朝日ジャーナル」一九八七（昭和六十二）年一月二・九日合併号～八八（昭和六十三）年十二月十六日号）

（11）中上健次『千年の愉楽』（「文藝」一九八〇（昭和五十五）年七・九・十一月、八一（昭和五十六）年二月、八二（昭和五十七）年一・四月）

（12）中上健次『生のままの子ら』（「解放教育」一九八三（昭和五十八）年八月）

（13）中上健次『芥川賞受賞のことば』（「文藝春秋」一九七六（昭和五十一）年三月）

第一章　〈秋幸サーガ〉の生成過程

はじめに

初期作品のジャンルを確認すると、詩やエッセイが小説よりも圧倒的に多く発表されている。これらの初期作品にはジャンルを問わず〈秋幸サーガ〉の片鱗が窺え、そこに至るまでの助走期間と捉えることが可能だ。渡部直己は〈秋幸三部作〉を見る際、『枯木灘』を『岬』の批評的続篇と位置づけ、「みずからの先行作品にたいするいわば批評的精読の連鎖」であると指摘している。[1] これは〈秋幸三部作〉に限っての言及であるが、この傾向は詩から小説への移行期間である初期作品にも見られる特徴だ。『枯木灘』『地の果て　至上の時』がそれぞれ前作の内容を踏まえ、物語の空間を段階的に広げたように、『岬』に至るまでの初期作品も順を追うごとに母系一族の深層部へと斬り込み、徐々に実父との関係に焦点を当てていくからだ。

初期作品を論じた先行論として以下があげられる。詩について論じた四方田犬彦は、「中上健次の詩編はより本質的な意味をもっている。それは作家にとって初期とは何かという問いに関わっており、そのかぎりにおいてここに集められた詩作品は文学が文学として可能となる直前に執筆された、ある臨界点におけるテクスト」と位置づけた。そして、これらの詩に秋幸の思念の原形が描かれており、さらに『枯木灘』で与えられた固有名詞が既に詩で与えられていることから、『岬』の古層には詩が存在していると論じている。[2]

また垣内健吾は、『海へ』[3]から『一番はじめの出来事』[4]『火宅』[5]などを通して「兄の問題」に焦点を当て、兄の死に向き合っていく中上を追った。そこでは「兄の問題」を葬る赦しを得たことによって、『岬』において秋幸の問題へとテーマが移行したと述べているように、「兄の問題」にテーマを絞って論じている。[6] しかし、これでは兄の自死を論ずるに留まり、秋幸を含め〈秋幸サーガ〉がどのように生成されたか不明のままだ。〈秋幸サーガ〉の生成過程を明らかにしようとするならば、詩に限定したり、母系一族の物語の中でも兄の自死のみに焦点を当てて限定したりしてしまっては、その過程の全貌を窺うことが不可能である。そこで本章では、詩から小説への移行期、また小説においては作品ごとに、中上が何に着目したのかを踏まえ、〈秋幸サーガ〉が生成されるまでを検討し、その上で中上が込めた問題意識を明らかにしたい。

一、初期作品に描かれる兄の自死

中上が初期に発表した作品は主に詩やエッセイであった。しかし、中上が昭和四十四年を最後に詩を発表しなくなったため、詩が議論の俎上に載ることはないに等しい。だが、詩を含め初期作品全体を見渡すと、中上作品の中軸の一つである兄の自死が詩に詠み込まれており、〈秋幸サーガ〉の基盤を窺うことが可能だ。

中上が自身の生い立ちや家族について初めて触れた作品は『履歴書』[7]である。本作は題名の通り、〝中上健次〟の誕生から作家〝中上健次〟の誕生までを記した〝履歴書〟だ。

（前略）／昭和二十一年／飢餓の喜びにふるえた／女の／陰部から／ビロードの不幸をまとって／父のない／流動体のスピロヘータが／とびだした。／四歳の時／髭の感覚をともなった男が／網走までの／片道切符をくれた。／隣家の庭には／固いつぼみのバラが／神話を語っていた。／（中略）／十三歳／人々は密殺の企てを／夢に／きらびやかな虚栄をまとって／嫁いだ。／昭和三十四年／若者は／英雄的な興奮と／歌うべき歌を知らず／運搬車の滑稽さ／に／自殺した。／屍は菊のしたたりと／人間の怒りをこめて／火がついた。／（中略）／十八歳／誰も／僕の名前を知りはしなかった。／ジュリアン　ソレルと／ランボーを胸に／この子宮に／やってきた。／（後略）

（14、二八・九頁）

「昭和二十一年」に「父のない」子として生まれた「スピロヘータ」とは、昭和二十一年に私生児として誕生した中上健次である。ここでは「スピロヘータ」と自らを呼ぶように、中上の誕生は母系一族を不幸へと導いた。兄・木下郁平（行平）はその犠牲となり、「昭和三十四年」に「自殺した」。この兄の自死は〈秋幸サーガ〉をはじめ多くの作品に描かれる。そして本詩には、〈秋幸サーガ〉に登場する重要人物がもう一人描かれる。この「網走までの」「片道切符をくれた」「髭の感覚をともなった男」こそ、実父・鈴木留造に違いない。「片道切符」を渡す行為は、「僕」を母の元から連れ去ることを意味する。これは後に『枯木灘』などに描かれる、秋幸が三歳の時に出所してきた実父・浜村龍造が、男同士で暮らそうと、迎えに来たエピソードを想起させる。この「神話」を「固いつぼみのバラが」語っているということは、この出来事が母系一族の神話の序章であるということだ。よって、兄の自死や実父の存在という〈秋幸

サーガ〉のモチーフは初期から完成していたと言えよう。

この詩をはじめとして兄の自死のモチーフがその後の詩にも散見されるため、四方田は「ポエジーの現前として読まれなければならない」と正してはいるが、詩に「後の大掛かりな小説作品の原形をそこに求めることも、彼の文学的教養の源泉を尋ねることも、それなりに意味のあること」だと指摘する。[8] しかし、『東京ルポ　雨』[9]（八回）で兄の死に初めて触れているように、詩だけではなくエッセイの中にも小説の原形は存在しているのである。

『東京ルポ』は、「東京のまん中で、歪み、狂った現代を見た僕」が、「新宮市の街路を通る若者たちに、語りかけ」、「同世代の真しな発言を待つ」（一回）と記し、「〝期待される〟若者になんか決してなるな」（四回）と呼びかけたように、若者たちを鼓舞することを目的としたルポルタージュであった。しかし、連載の一区切りとなる『東京ルポ　雨』では、高校時代の同級生の自死に触れ、自死は自己完結であると捉え、それを否定してはいるが他の連載と比較すると全体的に趣が異なり、情緒的なエッセイとなっている。そして注目すべきことに、「悲しみに耐えかねて、兄の葬列をみおくっていた幼い頃の僕の涙のように」雨が「ふりつづける」と、初めて兄の自死に触れているのだ。初期作品では雨の中、主人公が自身の存在について逡巡し、不安を抱く様子が頻出することから、〝雨〟は初期作品において重要な記号である。そのような〝雨〟を副題とした本作で、「健次は、何にも持たず何にもしないで、雨を眺めています…」と、母と姉に手紙を書こうとしている。さらにここでは、中原中也の『汚れちまった悲しみに』の一部を引用し、兄の自死を悲しみ続けている様を示し、高村光太郎の『レモン哀歌』を想起させる描写を挿入し、死を強調することで死に対して不安な心情を吐露していると言えよう。彼の内部から滲み出る兄の自死に対する想いが、趣旨とは異なる自閉的なモチーフの本作を発表させたのだろう。このルポルタージュのように、主人公が雨の中で兄の死について想いを巡らす小説として『海へ』が挙げられる。

二、初期作品における〝海〟と兄の自死

『海へ』は新宮と思しき街を舞台とした小説である。全十二章から成る本作は、奇数章では雨の中「僕」が海へと向かう様子を、偶数章では「僕」が自身の内部「おまえ」と対話する様子を描く。「僕」がその中に「まるい、／そまつな／墓石」を見るように「海」は

死の世界である。だが、それだけではなく、「僕を圧し倒し、喉をしめ、殺し」、「手をさしのべ、僕をひきよせようと」しているため、抗えない死のイメージを伴う。同時に、「海はぶつぶつ小声でささや」き、「海は怒声をはりあげて僕をにらみつける」ように、「海」は「僕」の内部に潜む「おまえ」＝「唯一の他者」とも言えよう。内部との対話は「三月のある朝／にいやんは／アトラスの愚かさと厳しさを身にまとったまま／くびれ／はてた」と、兄の自死を語ることを可能とさせた。だが「僕はおまえを三月の朝の荷車の響く音のように喚起することはできないのだ」とあるように兄の遺体を運ぶ音、つまり兄の自死自体は思い起こせるが、兄の自死に対する想いを「僕」は言語化できない。

兄の自死を扱った点から、四方田は『海へ』が兄の縊死をめぐる神話のもっとも素朴にして最初の形態と述べた。[10] また、神谷忠孝は『海へ』が自死した兄の原型が少しだけでている点から、『岬』にいたる過程で、『岬』の問題意識を内包し、自己のモチーフをちりばめた作品と位置づけた。[11] だがそれだけではなく本作が、初期作品における兄の自死の原因に対する受け止め方に大きく関わる海の言葉や、海との一体感によって「僕」が浄化されたと神谷が指摘するように、〈秋幸サーガ〉で描かれる自然への同化とそれによる浄化というモチーフを孕んでいることを看過してはならない。[12]

では、中上の詩で海の言葉が表現されている『季節への提言及び悲歌』[13]を見てみよう。中上の詩作の題には「季節」と付けられているものが多数あり、中上は「季節」とは「地獄の一季」や「青春の季節のことかもしれ」ないと記している。[14] そこから本詩の題は、青春を送る「若もん」への提言であり、地獄への挽歌を詠んでいると言えよう。詩の一部を引用する。

海ゆうのはなあごうごう怒りおれらの皮をそぐん／かみさまは呪いをかけて若もんを舟にのってこい／泳いでこい歩いてこいよおと耳うちするんやど／（中略）／銀鱗ひからせる海のけつしてつきぬ呪いがきこえるか／舟にのってこい泳いでこい歩いてこいよおと云う耳うちが／おまえにはきこえるか

（14、四六頁）

海にいる「かみさま」が「若もん」に呪いの言葉を「耳うち」し、死の底へとさらってしまう様子が示される。『海へ』と同様に本詩に

おける「海」も死の世界なのだ。詩の舞台が中上の出身地・紀州新宮であり、そこが面する海が補陀洛渡海へ僧侶が漕ぎ出す海であることも、この詩に詠まれる海が死の世界であることを裏付ける。同じく故郷を舞台とした『故郷を葬る歌』も「海」からの言葉を詩全体で表現している。『故郷を葬る歌』[15]を、高澤秀次は「一族の固有名を連記して、故郷を葬り、自らの退路を断った」詩と述べた。[16]四方田犬彦は本詩が熊野に対するスカトロジカルな連禱であり、その中に後の散文作品の原形があると指摘した。[17]だが論者は、『海へ』の中で「さあ、海よ／おまえが／僕の心の中のあの怒りの海につながっているのなら／歌え／人々についての呪いの歌を／そして／三月のつめたいひかりみたいに／死んでいった／にいやんにおくる／挽歌を」と詠んだように、「にいやん」のために人々へ呪詛の言葉を投げかける挽歌こそが『故郷を葬る歌』だと考える。

『故郷を葬る歌』の末尾には『チェコ問題についてのコメント』[18]が付くはずだった。しかし、『チェコ問題についてのコメント』を付けるよう依頼した時には、既に『故郷を葬る歌』の紙面が印刷されており、その上、山上為雄の「『故郷を葬る歌』の一部として末尾にあのコメントを加えねばならない必然性、絶対性があるかどうか、これは作者の意図とは別に、作品として発表された客観的に独立している詩の価値、意義として検討する必要があろう」[19]という判断によって、分断された形で発表されてしまった。この経緯を踏まえると、『故郷を葬る歌』は『チェコ問題についてのコメント』も含めて考えなくてはならない。『チェコ問題についてのコメント』を引用する。

プロレタリア国際主義に基いて、革命的なチェコ国民と連帯する。
彼らの抵抗運動を支持する。

（14、一一〇頁）

裏切られた者の運動に対する支持を示す内容だ。一見、故郷とは無関係の内容に見えるが、裏切りの観点から『故郷を葬る歌』を見ると、母系一族に裏切られた兄の想いを描いていると捉えることが可能だ。ここで『故郷を葬る歌』の一部を引用したい。

母千里を殺せ／父、七郎を殺せ、留造を殺せ／姉、鈴枝を殺せ、静代を殺せ、君代を殺せ／熊野よ、わがみくそもじよ／わが町、

春日を燃やせ、野田を燃やせ／この連潯(ママ)にしるされたもろもろを／呪え／（中略）／この連潯(ママ)をとめろ／犯罪者中上健次の足を断て／手を断て／舌を断て／眼を断て／男根を断て／皮膚を断て／熊野、くそもじ、わが故郷

（14、四八・九頁）

兄を裏切った要因が中上の誕生であることから、中上は兄が母たちに対する憎しみよりも強い憎しみを自身に対して抱いていると感じていたはずだ。そこで、母たちを「殺せ」と表現しているのに対し、「犯罪者中上健次」には「殺せ」ではなく「断て」と表現しているように、母たちのように一息に殺すのではなく、徐々に身体を傷つけさせ長い苦痛を与えさせようとしているのである。さらにこの時、耳を「断て」としてないことを鑑みると、何者かが「犯罪者中上健次」に指令を発していると捉えられないだろうか。

この詩の特徴は前の引用部に明らかなように「殺せ」や「断て」と命令形が繰り返される点だ。このような言葉選びは、他の詩では確認できない。また、前の引用部の他にも次のように、命令形を連ねている。

くだけろ／さけろ／つぶれろ／もえろ／けむれろ／きえろ／うづけろ、つづけろ／ふやけろ、しんでろ、ぐねれろ／ごねろ、ごらねろ、どろねろ、とめれろ

（14、四九頁）

このような「ろ」が連なる音の響きは、絶え間なく押し寄せる言葉の波を想起させる。

ところで本詩で使用されている「連潯(ママ)」とは何であろうか。これを中上による造語「連濤[20]」とし、その誤植と考えると、詩全体から言葉の連なる濤（波）を表現していると言えるのではないだろうか。つまり、本詩は『海へ』や『季節への提言及び悲歌』で描かれた、海から「かみさま」が言葉を「耳うち」する様を、次々と押し寄せる言葉の濤（波）を用いて表しているのだ。そしてその言葉は、兄を自死へと追い込んだ「犯罪者中上健次」が、兄の想いに寄り添うことによって、兄から「耳うち」された母系一族に対する呪詛を込めた兄への挽歌として詠んだ詩だったのである。

三、詩から小説へ

海と兄の自死をテーマに、最後の詩『発生前後』を中上は詠む。

《海は婆ばあの眼の裏からひろがり
大魔王は革バンドをうちならして兄を襲う
そうだ　光太郎
おまえも知っていた海にすむ大魔王は電波によって
港々にすむ若い衆(シ)に秘密の伝令を伝えた
《おお　パシフィック
大逆の
巡礼の　熊野
泳いでくるか若い衆(シ)　舟にのってくるか
きんだまもっとるんならどっからでもこい[21]

（14、五三・四頁）

「僕はいまだ水棲動物」であり、「陸にあがるにはどうすればいいのか」わからず、兄に尋ねているように、「海にすむ大魔王」の伝令は僕には意味をなさない。対して兄は陸にあがっているため、「海にすむ大魔王」の伝令は意味をなす。その上、この伝令が熊野の若い衆に向けられていることから、兄への伝令を読んだと言ってもよいだろう。よって、『季節への提言及び悲歌』と同様の状況を『発生前後』では詠んでいると言えよう。だが、『季節への提言及び悲歌』における海の「かみさま」がここでは「大魔王」へと姿を変えている。「泳いでくるか」「舟にのってくるか」「どっからでもこい」という「大魔王」の伝令によって、海の彼方＝死の世界へと兄は連れ去ら

れたと結論づけたのである。そしてこのように兄の自死を詠んだ上で、詩の末尾に「（犯罪者の生成課程）」と記すことで、兄の自死の要因が自分自身にあると明言したのだ。だが、中上が「犯罪者」である理由が明示されていない。そして、中上自身も「犯罪者」について言及できていないと『混乱、火、犯罪、爆発―短篇批判』で述べている。

おまえは自己を犯罪者であると規定しようとしている。（中略）おまえは根っからの犯罪者である、と云いたいのだろう。しかしおまえの書くもののなかから一度だって酸い血のりがはなつ犯罪のにおいがたちのぼったことはない。[22]

（14、一二八頁）

兄の自死に関して核心に迫れていないと焦燥を抱いている。ここで投稿者に対し、「簡単な気持ちで作品を書くな」と苛立ちを露わにしたように、兄の自死に関して中上は書かなかったのではなく、書けなかったのだろう。では、なぜ書けないテーマを敢えて書き続けるのか。『犯罪者永山則夫からの報告』の中で、中上は小説や詩を「書くことは、生きのびる道をみつけ」[23]ることだと述べた。したがって、詩や小説を書くことは兄の自死の謎を考えるだけではなく、自身の内部を見つめ昇華させる行為でもあったのだ。しかし、兄の自死の要因について言及できていない上に、前の『故郷を葬る歌』を編集部によってねじ曲げられた経験も相まって、実作者としていかに作品と向き合うべきか中上は考えていたに違いない。そして自身の内部を表現するために、細かく具体的な描写が可能な小説へと創作の場を移したのだろう。この選択から、母系一族の物語を描くことに対する中上の決意を読み取ることが可能だ。

『発生前後』の次に発表した作品は、小説では初めて商業雑誌に掲載された『一番はじめの出来事』である。本作は小学五年生の康二の視点から兄の自死だけではなく、母の再婚や、主人公たちを殺そうとする兄など母系一族の問題が語られる。そして、前作に続き本作でも、海に住む大魔王から言葉が送られてくる。

「兄やんはこのごろ酒ばっかりのんどるさか、時々電波でね、大魔王から指令がくるようになったん」（中略）「ああ海に住む魔術師や。おまえら人間はほんまに信用できんから、ほんとうのことはなかなか言えん。おまえらの一統はみんな裏切者や言うん。母

やんもそれからミチコも康二もいまに罰をあてたる言うん。兄やんは、それがつろて、いっつもみんなのためにみのがしたってくれとたのむんやだ」

（1、二二五・六頁）

海の大魔王の声の正体は、アルコール中毒の兄が聴いた幻聴である。そしてその声は、これまでの若者を海へ誘う声ではなく、母系一族に関する内容へと変化した。その後、兄は「ワタシハ海ニスム魔術師・大魔王ダ、サア、オマエハセキニンヲトルタメニ、ホントウニクビヲククルノダ」と大魔王の指令を聞いた後に自殺を図ったと康二は想像する。だが、なぜ兄が自死しなくてはならなかったのか「僕にはわからない」ままである。「犯罪者」であることを告白したいにも関わらず、これまで描いてきた海からの声というモチーフと共に、子供の想像力を助けとして兄の自死を描写する行為は、兄の自死と母系一族の関係について中上が言語化しきれていないということを示していると言えよう。よって、中上の〝一番はじめの出来事〟＝原体験である兄の自死を当時の視点から描くことは、それを言語化するための整理の第一段階であったのだ。

四、主人公の成熟と兄の自死

『一番はじめの出来事』から二年の歳月を経て、『一番はじめの出来事』で描いた兄の自死のモチーフを引き継ぎ、そこでの人物設定を中上の家族構成に類似するよう変更を加えた『眠りの日々』[24]を発表する。本作は、「母系一族」という言葉を中上が初めて小説の中で使った作品である。そして、兄が自死した二十四歳になろうとしている主人公・ぼく（山室あきら）が兄のように自死してしまうことを恐れた母が、厄払いのために東京から主人公を新宮に呼び寄せたところから物語が始まっているように、東京でフーテンとして暮らす青年の物語系統と、母系一族の物語系統を繋ぐ役割を担う作品でもある。

主人公は「兄の記憶は薄れている」が、「ぼくの体験の核になっている」兄の縊死だけが「いつまで考えても解けぬ数学の命題のように不意にぼくの心の中に浮かびあが」っており、兄の自死に呪縛されている。それにより「ぼくは必要以上に、死んだ兄と同じ年齢に

近づくこのぼくの肉体の年齢について焦りを感じたり、罪悪感を抱いたり、今この体が成熟した大人のものであるというところから発生する不快を感じ」ている。主人公は自死しようなど一度も考えていないにも関わらず、兄のように革バンドで首をしめつける。この自殺のまねごととともとれる行為は、兄と向き合おうとしてのふるまいだろう。兄が「邪悪なる精神そのものに変身し」、自死した理由がわからない主人公だが、「ぼくとぼくの母親が殺したのだ」と独白してもおり、兄の自死に対する認識は矛盾している。この矛盾から、兄の自死の要因の一端を担っていると自覚しつつも、「自分の外側のことばかりに気をとられ、内部になにがあるのかのぞいてみようなどとは思わなかった」ように、兄の自死と自身の因果関係から意図的に目を逸らそうとする主人公の姿が読み取れる。しかし、兄の自死から目を逸らしても兄の死んだ年齢に近づくにつれて罪悪感と焦り、そして肉体の成熟に不快を感じる。だが、主人公自ら成熟を拒んだのではない。

この土地にいる時、ぼくは女の子のことなど考えてはいけないことだと思っていた。現実の生きている女の裸を想像することをタブーのように思い、できることなら自分の性器がいつまでも朝顔のつぼみのようなままであるか、それとも安全無害に勃起不能であるか、どちらかに変えたいと思った。なぜそう思っていたのか、その理由をぼくはすべてわかっている。母と姉のぼくの成熟を監視する眼、ぼくの体の中にひそんでいるそれらの嫌悪の眼が胃から出された吐瀉物のようにとけて、この土地にやってくるといまでもここにある。

（1、二七七・八頁）

母や姉が主人公の厄を祓うために祭りに呼び寄せたように、彼女たちが恐れる成熟＝死の考えが主人公に影響を与えた結果なのだ。以上から『眠りの日々』は、兄の自死がトラウマとなり、成熟＝死を恐れる母系一族を描いた作品と言える。だが、母系一族の神話ということばを使用しているがその内実は描かれず、また兄の自死もその深層まで掘り下げられていない。初めて母系一族の黄金期とその終焉、そして罪を描写できた作品は『補陀落』[26]である。

五、母系一族の黄金期と罪

『補陀落』はこれまでの母系一族を描いた作品と異なり、主人公・康二に三姉が語りかける構造を採っている。ここで母の家出と再婚、暴れる兄、そして姉たちの父の法事での義父と長姉の諍いに端を発した次姉の精神の不調など、母系一族の印象的なエピソードを三姉は語る。この三姉の会話は『眠りの日々』の中で語られた「姉たちの語る混沌とした神話の時代」を明らかにした。同時に、『岬』において描かれるエピソードの下地を作る役割も担う。例えば、主人公が五歳の頃に海へ行った遠足は、『岬』で語られたピクニックを想起させる。

いまから想うと、古く茶化てしまった一枚の写真みたいに感じる。兄やんと姉やんと熊野のシイちゃんとわたしと康二と、たのしくてうれしくてならんというふうに笑顔の一人一人が眼にうかぶ。

（1、四五四頁）

姉の中で美しい思い出として記憶されている。「世界がそこでとまったらよかった」、「おまえが産れたばっかりの、なにを食べようにも食べるものもないあの母さんの子供らの時代にもどりたい……」と姉が語ったこの時代こそが、『眠りの日々』の中で語られた母系一族のみで、貧しくつつましくくらした「母と姉たちによって語りつづけられる神話」の時代であり、母系一族の黄金期であったのだ。

母系一族の罪も『補陀落』において明らかとなる。「わたしらきょうだいの不幸」は主人公のみ連れて母が再婚した時に始まった。そして「父さんの娘三人のために」兄は自死したと姉は語る。その理由は主人公の実父と幼い日の兄の姿を描いた『火宅』に明示される。主人公・彼の父（男）はつけ火をするなど、不幸と地獄を作る人間だったが、兄は男を「母の巣」に入れてしまった。この男の子供を母に孕ませる原因を作ったことを後悔していた兄は、母と男を近づけた結果、自分たち父の子が捨てられたと責任を感じたに違いない。この兄の気持ちを理解しているからこそ、『補陀落』において兄が母や姉たちにとりついていると言った主人公に対し、姉は「わたしらが兄やんにとりついてるんよ」と反論したのだ。兄の自死を母は自身の再婚が影響していると考え、姉は自分たちのせいと考えたはず

であり、母と姉たちは兄に対する罪の意識にさいなまれ続けていると言えよう。よって、母系一族の罪とは母の再婚に端を発しているのだ。[26]

六、竹原秋幸の生成

〈秋幸サーガ〉に描かれる母系一族の物語は初期作品の中で次第に姿を定めていったことが確認できた。では、やがて秋幸へとなる人物はいつ形成されるのか。『犯罪者永山則夫からの報告』の中で「ぼくのあるべき姿は、ものも言わずに肉体労働でもやり、太陽と土と風を愛するギリシャの青年だ」と秋幸を想起させる人物像が記されていた。にも関わらず、このような素質を持つ人物は『岬』に至るまで描かれない。秋幸の特長の一つとして、実父・浜村龍造との容姿の酷似が挙げられる。だが、秋幸に先行して登場する龍造にあたる人物と母系一族に関わる内容は『補陀落』などで確認できるが、これら母系一族に焦点を当てた作品では、その人物像は詳らかにされていない。初めて実父像が描かれたのは、中上を模した人物や実父に焦点を当て、実父との関係を問うた『火宅』である。ここで描かれる実父の身体的特徴が秋幸のそれと酷似しているため、この二人の形成は切り離せない。そこでまず、秋幸に先行して描かれた実父について確認する。

『火宅』において、兄が男（主人公の実父）の容姿を、「眼も鼻も口も、凶暴な感じだった」「この男の顔は、恐ろしげだった。それに大きな体だった」と観察したように男は全身に邪悪さをまとっている。それだけでなく佐倉の土地につけ火をした男は、それを「おもしろい」と言うように絶対悪として描かれる。このように『火宅』において完成した実父像は、〈秋幸サーガ〉で悪の権化として描かれる浜村龍造へと引き継がれたのである。

実父像が形成されると共に、『火宅』ではこれまで描かれなかった中上を投影した人物の容姿の特徴が描写される。主人公は「男の顔に似て」おり、「大きな体は、その男の遺伝によるもの」と身体的特徴の類似が叙述される。また「かっとくる性格もその男によるらしかった」など主人公と実父は容姿だけでなく性格も酷似している。これらの特徴は〈秋幸サーガ〉の竹原秋幸にも踏襲される。『岬』での秋幸の描写を確認すると、容姿は「世の中で一番みにくくて、不細工で、邪悪なものがいっぱいある」「あの男の顔」とある。その上、

秋幸は暴力的な性格ではないが、女を知ると「見境いなしに手をつけたあの男と同じになってしまいそうな自分が不安」だと、自分の中に流れる実父の血が目を覚ますことを恐れているのだ。前述したように、『眠りの日々』では成熟し、兄のように自死してしまうことを恐れていた主人公は、『岬』では人非人の振る舞いをする実父のようになってしまうことを恐れている。したがって、兄から実父へと中上の関心が移行した時、実父・浜村龍造のクローンのように竹原秋幸は形成されたのだ。

七、実父との関係と自然への同化

『岬』において秋幸の背後に兄を見る姉の行為は、浜村龍造と秋幸の繋がりを認めず、姉たちの父の系譜に入れようとしてのことだと言える。また母は、実父のようにならないよう秋幸の行動をコントロールする。母と姉による呪縛は既に『眠りの日々』で描かれていた。だが、ここでは『岬』とは異なり、兄のように自死しないために主人公の「成熟を監視」する目的だった。つまり、『岬』において母や姉は主人公の自死を恐れなくなっており、代わりに人非人の振る舞いをする実父のようになってしまうことを恐れていることになる。この点からも作品の順を追う毎に兄から実父へと中上の関心が移行していることが確認できる。

私小説的な要素を孕む『火宅』では、自身が父となり、実父が生死の狭間にいることを知った主人公が、実父は「おれのなんなのだろう」とその存在を問いはじめる。実父の存在に葛藤を抱く主人公は「なにもかも洗ってほしかった。浄めてほしかった」と想うも、その方法を持っておらず、洗い浄められることはない。この洗い浄める方法が描かれるのが、龍造の実態が描かれ、実父やその家族が秋幸の生活を侵食し、母系の家と義父の家、そして実父の家という三つの家の間に宙づり状態として存在する秋幸を描いた『枯木灘』である。そして、ここで描かれた洗い浄める方法こそが土方作業なのだ。そもそも土方作業は『岬』において、「土には、人間の心のように綾というものがない」と描写されるように、単純さの象徴として描かれていた。確認しておくと、中上が初めて土方作業を描いた作品は、『岬』の前作『荒くれ』[27]であった。ここでは土方作業は『岬』『枯木灘』同様、風景に染まる感覚を主人公に感じさせ、「心地よさ」を感じさせる行為として描かれている。また、『枯木灘』において、土方作業は「心地よさ」を感じさせるだけではなく、土方作業に従事する秋幸を「何も考えない」状態にさせる行為でもある。確認しておくと『岬』で、母や姉に兄や実父と重ねて見られ、自己

を確立できない息苦しさを憶えた際に、秋幸が向かった先は気持ちを鎮めるための土方作業ではなく、母や実父たちを凌辱する目的を伴った異母妹との近親相姦であった。したがって、洗い浄められたい想いは母系一族の中ではなく、実父との関係の中で生じると言えよう。

実父とその家族が秋幸の生活に侵入してきた『枯木灘』を確認すると、実父との均衡が崩れる要因となった秋幸の姪の婿と異母弟との傷害事件の翌日の土方仕事で秋幸は次のように感じる。

いま、秋幸は空に高くのび梢を繁らせた一本の木だった。一本の草だった。いつも、日が当り、土方装束を身にまとい、地下足袋に足をつっ込んで働く秋幸の見るもの、耳にするものが、秋幸を洗った。（中略）それまでつるはしをふるう腕の動きと共に呼吸し、足の動きと共に呼吸し、土と草のいきれに喘いでいた秋幸は、単に呼吸にすぎなかった。光をまく風はその呼吸さえ取り払う。風は秋幸を浄めた。

（3、三〇五・六頁）

このように「一本の木」などに同化する感覚を抱くことで、秋幸は何も考えることのない状態となり、澱が鬱積した内面は洗い浄められる。

ところで『地の果て　至上の時』では秋幸は土方作業に就いていない。秋幸が〝父殺し〟を成すため龍造のそばにいることや、土方作業が『枯木灘』とは異なり、人力から機械へと変化したことで、秋幸が想う土方作業のあるべき姿とはほど遠くなり、土方作業に従事する意義を見出せなかったことも関係するが、秋幸と龍造との均衡の面から考えると、二人の間で以前のように外部の力によって均衡が崩れる危険性がなくなった。それゆえ秋幸は自然と同化し、浄化されたいという想いを抱かなくなっており、土方作業を求める必要がなくなったため、材木商に就いたと言えよう。

八、初期作品に描かれた佐倉

〈秋幸サーガ〉には佐倉という材木業を営む地主が登場する。彼は文字の読めない「路地」の者に金を貸す際に偽の借用書に判を押させ、「路地」の土地を奪い取った。この佐倉を想起させる人物が、前に確認した詩『季節への提言及び悲歌』に詠まれている。

ある時うそつきの商売人がきて山も買うた／若いもん買うた／別な時道化役者がきて笛ふいて踊りわが民族の勝利はと／演説しやつぱり若いもん買うた／おまえにはみえるか／あの買われていつた山と若いもんのべろつと舌をだして悶死するさまが／海へこい海へこいよお／おまえらどこそへ売られてゆくんやどお／商売人も道化役者も信じてはならん／ゆうかみさまわたつかみの言葉がきこえるか／（中略）／ならされてはならぬ／買われてはならぬ

（14、四六頁）

「ある時うそつきの商売人がきて山も買うた」は、「路地」の者を佐倉がだまし、彼らが所有する「路地」の裏山を奪ったことを示している。また、山林地主である佐倉が、「路地」の若い男たちを死と隣り合わせの現場で働かせていたことから、彼らを雇うことを「若いもん買うた」と表現したのだろう。では「道化役者」とは何だろうか。『鳳仙花』においてクリスマスと思しき日に、餅撒き目当てで集まった「路地」の者に佐倉が演説する様が描かれる。だが、佐倉の声は「路地」の者たちの罵声にかき消されており、その様は滑稽である。したがって、この詩で詠まれた「うそつきの商売人」と「道化役者」とは佐倉のイメージを有していると言えよう。

この詩を「海」が「若もん」を死の世界へと誘った詩だと前述したが、このように「路地」を支配した佐倉に当たる人物が詠まれていることから、「若もん」とは兄を含めた、差別され、支配される被差別部落の者たちと言えよう。したがってこの詩は、差別され、土地を取られ、また命を軽んじられてしまうぐらいなら、海へ来いと呪いの言葉で海の神様が「路地」の「若もん」に呼びかけている様を詠んでいたのだ。しかし、ここでは部落差別から逃げろと言っているのではない。この詩には反歌があり、そこで「夏の海からくすねた青い廃物のガス燈をまえに／僕は美しい詩をかいていようと思う」と詠んでいる。海からガス燈をくすねる行為は、死の世界へと誘う海の神様に抗う行為であり、そのガス燈を前に「美しい詩」を書いていくことは海の神様、つまり差別を撥ね返して生きていくこ

とだ。よって、差別する者と闘い生きようと、中上は「若もん」に提言をしたと考えられる。

この詩が発表された後、佐倉を想起させる人物は『火宅』まで描かれない。前述したように『火宅』が中上を模した人物とその実父像が形成された作品であることから、佐倉は龍造や『火宅』における主人公の実父との繋がりの中で、龍造と共に「路地」へ恐怖や災いをもたらす者として創造されたと考えられる。そのため、母系一族を描いた作品、つまり「路地」の内側に生きる（生きた）人々を描いた作品では、佐倉は「路地」の噂の中の人物としてしか登場せず、実態は見えない。対して、「路地」が消滅した上に、龍造のもとに秋幸が身を寄せた『地の果て　至上の時』では、秋幸の前に姿を現した佐倉によって、龍造の嘘が露見する。しかし、佐倉は龍造の正体を暴くために存在するのではない。かつて「路地」の者の土地を奪うにあたり、文字を読めない＝持たない「路地」の者を佐倉は文字で支配した。この文字の所有の有無が、天皇とその対極に位置する被差別部落の関係に置き換えられるのである。したがって、〈支配―被支配〉〈差別―被差別〉の構造に対する問題意識は初期作品から既に描き込まれており、それを佐倉や龍造の存在を通して〈秋幸サーガ〉で追及したと言えるのである。

おわりに

中上が初期に発表した作品のジャンルは小説ではなく詩やエッセイが主であった。不特定多数の人々の眼に止まる媒体に発表した作品の中で二作目の詩作である『履歴書』では、実父や兄に関するエピソードが詠まれており、この時、既に〈秋幸サーガ〉の基盤が確立していたと言える。しかしその後、実父に関するエピソードは詩では詠まれず、小説においてもしばらく描かれることはなかった。その間、中上が繰り返し描いたテーマは詩から小説へ移行する際の中軸を担っており、中上の思考の核となっていた兄の自死である。兄の自死を幾度も描く行為は、兄の自死を考え、言語化していく過程であったと言える。しかし、自身を投影した作中人物に兄の自死の原因を語らせることができなかった中上は、それを姉に語らせる手法を採る。そこでは母に捨てられた「父さんの娘三人のために」兄が自死したと母系一族の罪を告白させると同時に、母の血で繋がった者のみで暮らし、誰一人欠けることのなかった母系一族の黄金期を描いた。ここから初期作品では、中上が実父よりも母系一族に焦点を当てていたことがわかる。そして兄への罪の意識を言語化で

きるようになると、実父像が形成され、そのクローンのように竹原秋幸が形作られた。このような初期作品の傾向は、『岬』において母系一族を描き、次作『枯木灘』で実父・浜村龍造を登場させた〈秋幸サーガ〉の描き方と重なっていると言えよう。

また、母系一族からその外部へと作品世界が広がるように段階を踏んで変化する秋幸と龍造の関係性から、土方作業が担う役割が明らかとなった。彼らの保っていた均衡が外部からの力によって崩れた時、秋幸は土方作業に従事することによって自然と同化し、内面を浄化していたのである。そして秋幸が龍造のもとに身を寄せ、二人の間の葛藤が取り払われた『地の果て　至上の時』では、これまで噂の中の人物に過ぎなかった佐倉が登場する。この佐倉の特徴を備えた人物が既に詩に詠まれていたことから、中上は初期の段階から兄の自死と共に部落差別を描く意思を持っていたと言えよう。母系一族や「路地」の内側からその外側へ物語世界が広がると同時に佐倉が現れる〈秋幸サーガ〉の構造は、〈差別―被差別〉の実態を物語世界に呼び込み、描き出す上で効果的だったのである。かくして、〈秋幸サーガ〉は、〝父殺し〟を果たす秋幸の成長を描くと共に、部落差別の本質を捉えた作品群でもあったのだ。

注

（1）渡部直己「痛ましさについて」（『中上健次論　愛しさについて』河出書房新社、一九九六（平成八）年）
（2）四方田犬彦「中上健次の初期の詩について」（『中上健次全集　14』月報、集英社、一九九六（平成八）年）
（3）中上健次『海へ』（「文藝首都」一九六七（昭和四十二）年九月）
（4）中上健次『一番はじめの出来事』（「文藝」一九六九（昭和四十四）年八月）
（5）中上健次『火宅』（「季刊芸術」一九七五（昭和五十）年一月）
（6）垣内健吾「初期中上健次論―悲劇の誕生過程について」（「京都精華大学紀要」第四十号、二〇一二（平成二十四）年）
（7）中上健次『履歴書』（「道」一九六六（昭和四十一）年八月）
（8）前掲（2）同書
（9）中上健次『東京ルポ　雨』（「さんでージャーナル」一九六六（昭和四十一）年七月二十四日）

『中上健次全集　14』（集英社、一九九六（平成八）年）など、収録している全ての書籍では八回の副題を『われらは主張する』と記載しているが、同日の一面において副題が訂正されている。「さんでージャーナル」は山上為雄を主宰とし、新宮市内で昭和四十一年四月二十四日に創刊された日曜新聞である。「さんでージャーナル」は、庶民が欲望や欲求を、抑圧されるか、自ら抑え、声なき民とならないよう、語らず、動かぬ庶民にならぬ場の提供を目的として発刊された。

中上は創刊号から詩『讃歌』を発表しており、三号目から『東京ルポ』を九回に渡って発表する。副題は次の通りである。『若き世代にむかって』（一九六六（昭和四十一）年五月十五日）、『人間の条件』（同年五月二十二日）、『五年後のにがみ』（同年五月二十九日）、『旅立て』（同年六月五日）、『黒人兵と日本の若者』（同年七月三日）、『星の王子さま』（同年七月十日）、『われらは主張する』（同年七月十七日）、『雨』（同年七月二十四日）、『原点に回帰する』（同年十月二日）。

（10）前掲（2）同書

（11）神谷忠孝「文体と描写の特質―シンボルとしての「海」から「夏芙蓉」へ―」（「国文学　解釈と教材の研究」一九八五（昭和六十）年三月）

（12）前掲（11）同書

（13）中上健次『季節への提言及び悲歌』（「さんでージャーナル」一九六八（昭和四十三）年六月十六日）

（14）中上健次『四つの断章からなる季節への試み』（「さんでージャーナル」一九六八（昭和四十三）年二月十一日）

（15）中上健次『故郷を葬る歌』（「さんでージャーナル」一九六八（昭和四十三）年九月一日）

（16）高澤秀次『評伝　中上健次』（集英社、一九九八（平成十）年）

（17）前掲（2）同書。『故郷を葬る歌』には中世説経文学に構造を借りた作品群の萌芽や、浜村龍造が路地に火を放ち、家々を灰燼に帰し、その後竹原秋幸の目の前で自殺を遂げるという物語の原形が見られるとしている。

（18）中上健次『チェコ問題についてのコメント』（「さんでージャーナル」一九六八（昭和四十三）年八月二十五日）

（19）中上健次『自己批判及び文学ノート』（「さんでージャーナル」一九六九（昭和四十四）年一月五日）の中で『チェコ問題についてのコメント』が『故郷を葬る歌』と分離される形で発表されたことについて「僕の意図しない形で発表されたコメントは、僕の

実作者としての自立拠点がないことを鮮明に暴露させた」と自己批判を行った。山上為雄のコメントはこの批判に対する反論である。

(20) 四方田犬彦は「中上健次の初期の詩について」(前掲(2)同書)の中で、『故郷を葬る歌』が「熊野に対するストロジカルな連禱から開始される」と述べている。それは「くそもじ」が「熊野路」に由来した造語と考えたことに拠るものだが、「くそもじ」とは、接頭語「くそ」に和歌山方言「もじる(壊す)」の語幹が付いた言葉と考えられるため、「連禱」の誤植とは言いがたい。

(21) 中上健次『発生前後』(「長帽子」一九六九(昭和四十四)年五月)

(22) 中上健次『混乱、火、犯罪、爆発―短篇批判』(「文藝首都」一九六九(昭和四十四)年四月)。『混乱、火、犯罪、爆発―短篇批判』と同号に『犯罪者宣言及びわが母系一族』を発表し、兄殺しの末裔と記しているが、それについて説明はない。

(23) 中上健次『犯罪者永山則夫からの報告』(「文藝首都」一九六九(昭和四十四)年八月)

(24) 中上健次『眠りの日々』(原題『火祭りの日に』「文藝」一九七一(昭和四十六)年八月)

(25) 中上健次『補陀落』(「季刊芸術」一九七四(昭和四十九)年四月)

(26) 父親代わりとなり妹を庇護する兄は、中上の母系一族を想起させない『黄金比の朝』(「文学界」一九七四(昭和四十九)年八月)にも描かれる。占い師を探す女が登場するが、この女の兄は、中上の兄や竹原秋幸の兄・郁男と同じく三月三日に自殺している。父親が彼女の幼い頃に死んだため、兄は彼女の父親代わりでもあった。この女の夢に白い背広を着た兄が登場する。白い背広は母系一族を描いた作品の中で、自死した兄の思い出を語る際の兄の服装でもある。ここで、自死した兄が女を守るため夢に現れたように、母系一族をモデルとした作品以外でも兄は妹を守る存在として描かれていると考えられる。

(27) 『荒くれ』(「すばる」一九七五(昭和五十)年九月)においても主人公・彼(コウイチ)は実父とそっくりな容姿をしている。また、実父と母が離婚したのち、母が再婚する際に連れ子となっており、中上の境遇や秋幸の境遇とも酷似するが、ここでは彼には母の血で繋がる兄姉はおらず複雑な血縁関係の中に置かれてはいない。実父は彼を優しい声を出して呼ぶ反面、一方通行の道路に逆から侵入し、鉢合わせた車に対してどなる姿が描かれており、浜村龍造を想起させる人物像と言える。

第二章　『岬』論―秋幸が自己を確立するまで―

はじめに

『岬』は日々の土方作業や姉たちの父の法事とその準備が描かれるメインストーリーと、嫁ぎ先で起こった刺殺事件により精神錯乱の状態に陥った姉・美恵と、その姉に平穏な時間が一時訪れる岬での出来事を描いたサイドストーリーから成る。本作では秋幸が主人公でありながら、作品中に起こる古市刺殺事件などの出来事に影響を受ける人物は姉・美恵である。作品は姉を中心として展開していくため、この姉の変化に秋幸らは影響を受け、振り回される存在となっており、姉が主人公であるかのように見える。だが、姉の行動に寄り添い続けることにより、秋幸は潜在的な主人公として機能していると言えよう。その秋幸は姉や母に兄と似ていると言われ続け、自己の存在を確立することが出来ない。

そこで本章では、母系一族における秋幸の認識と、その認識が秋幸に及ぼす影響を確認する。その上で、秋幸が異母妹と覚しき娼婦に接近した意味を明らかにする。なお本文中の書き分けに従い、美恵を「姉」、芳子を「芳子」と書き分ける。

一、『岬』の人物関係

芥川賞の選評[1]でも述べられているように『岬』の人物関係はわかりづらい。主要人物関係図を見てみると秋幸が暮らす現在の家族、姉の家族、芳子の家族、光子と安雄夫婦、古市の家族と多くの家族が登場する（42頁参照）。さらに秋幸や姉の回想によって、母と姉と兄と芳子と姉たちの父からなる家族、秋幸と母と姉と兄と芳子と暮らした家族、姉と兄のみで暮らした家族も描写される。また、家の形を備えてはいないが、秋幸と母と「あの男」から成る血の繋がりも存在する。このように時間と空間を跨いで同一人物がいくつもの家族に属すことによって複雑さが増しており、人物関係がわかりづらいとされてしまうゆえんである。その上、彼らはいくつもの家族に属しているにも関わらず、秋幸から見た立場で呼ばれている。このように作中人物の主眼に拠っているため、読者に混乱を与えてしまうのだ。そのような中、姉の一人である芳子は姉ではなく芳子と呼ばれる。名前で呼ばれる人物がいる一方で、名前が与えられているにも関わらず秋幸から見た立場で呼ばれる人物もおり、統一されていない。このように呼び方を統一しなかった背景には、作者の意図が込められているに違いない。

母の声で、眼をさました。蒲団の上に、母は、寝巻き姿のまま正坐している。義父は、その横で胡坐をかいている。彼と文昭は、隣の部屋で寝ていた。兄が来ているのがわかった。また、泥酔している。

「母さんと秋幸が幸せに行くのが、憎いんか」

（中略）

「おまえは、昔からそうやったなあ。おまえは、おれら兄妹だけ、放ったらかして、秋幸だけ連れてこの男と逃げようとしたな。ちゃあんと覚えとる。まだ芳子も美恵も、いまの秋幸ぐらいの時じゃ。おれらは忘れてないどお」兄はどなる。語尾がふるえる。

「ぶち殺したろかあ」

彼は、悲しくはなかったが、泣いてみた。そうすれば兄の怒りがおさまるかもしれない、と思った。隣の蒲団で寝入っているはずの文昭が、手をのばして、彼の口をふさいだ。「秋幸、おまえもここへ来い。裏切り者」兄の声がした。寝たまま文昭が、手で、外へ出るなとおさえていた。彼は、文昭の手を払った。襖をあけた。兄は、包丁を持っていた。「そこへ坐れ」と、同時に畳に包丁をつき立てた。

（中略）

その時は、それですんだ。姉が、兄と一緒の時もあった。姉は、兄をとめていた。母は、兄よりも姉にむかって、「おまえらはそんなことするんじゃ、わしの子と違う」と言った。

（一九五・六頁）

この場面は、兄が秋幸らを殺そうとして、母の再婚先である義父の家に押しかけた時の回想である。作中、秋幸から見た立場で呼ばれている人物がこの場面に描かれていることから、母系一族が母とその連れ子となった秋幸と、母の先夫の子である兄と姉との二つに引き裂かれたことによって発生した血縁のしがらみに捕らわれている人物が、名前ではなく秋幸から見た立場で呼ばれていると言えよう。そのため、ここに描かれながら兄の恨みの向かう先にいない文昭と、母系の人間であるにも関わらずこの騒動の渦中、名古屋へ奉公に

出ており紀州の血縁のしがらみに捕らわれなかった芳子は、名前で呼ばれるのだ。名前を与えておきながら秋幸から見た立場で呼ぶことは、紀州に居続ける者の血縁と地縁の繋がりの強さを表しているのである。

芳子に古市刺殺事件を語る場面では、

（略）二番目の、この土地に住む姉の嫁ぎ先で起こった刺殺事件のあらましを、名古屋の姉夫婦に語った。　（二一二頁）

と、「二番目の」姉が「この土地」に住んでいることは既知の事実にも関わらず、「この土地に住む姉」と敢えて記し、「名古屋の姉夫婦」と対比させて地縁を強調していると言えよう。母が姉との会話の中で芳子を「名古屋の芳子」と住む場を付けて語らせるのと同様である。このような呼び方は日常会話で普通に使われるため一見、特別な意味が付与されてはいないように受け取られるが、芳子に「名古屋」を付けて呼ぶ表現は、芳子が紀州から離れ、しがらみから脱した存在であることを意味する表現なのだ。

二、姉による父の法事の妨害と母系のしがらみ

父の法事は『岬』において最も重要なエピソードである。この法事を母は、義父と暮らす家で行おうとするが、芳子は父が暮らした姉の家で行いたいと言い出す。しかし、法事は義父の家で行われてしまう。父の法事が行われる直前に姉は仏壇を壊しにかかる。父の法事に出ることなく帰らさせられた姉は、表のCにあるように、

彼（秋幸：論者注）は、立ちあがって、玄関の硝子戸を閉めた。その彼の、畳を踏む足音に、姉は「来たあ来たあ」と言った。　（二二一頁）

と怯える。姉が仏壇を壊しに掛かる直前、母が弦叔父をはねつけたことが姉を怯えさせる原因となったのではないだろうか。以前、兄

が酒に酔って母と秋幸が暮らす義父の家へ来た時、母が「おまえら（兄と姉：論者注）はそんなことするんじゃ、わしの子と違う」とはねつけた記憶が姉の中で蘇ったのだろう。かつて父が暮らした姉の家で父の法事を行えなかったことにより、姉や兄を捨てた母を許すことなく死んだ兄の霊が、母は自分たちから父までも奪ってしまったと怒り、姉の元に来たと姉が思ったとも考えられないだろうか。父が母に奪われるのを許せない芳子は母に反対したが、姉は意見しなかった。名古屋に住む芳子と異なり、紀州で暮らし続ける姉は、今を生きる母と過去に執着する姉たち母系一族の均衡を保たなくてはならない立場にあるため母と諍いを起こしたくないのであろう。これが紀州に暮らす者の血縁のしがらみの現れである。自分たちを捨てた母を許せなかった姉は、兄のように母に刃物を突きつけ、怒りを露わにすることが出来なかった。その後も、姉は両者の均衡を保つために努めてきたはずである。だが、母系一族を崩壊させ兄を殺した母が、父までも姉たちから奪ってしまうと思った姉は、これ以上母系一族から抜け出た母と姉たち母系一族の均衡のために感情を抑え込むことができなくなり、発作的に仏壇を壊し父の法事を妨害したと考えられる。

三、兄との相似を強いられる秋幸

秋幸は、「自分が兄と似ているとは、思えない。彼（秋幸：論者注）は大きな体」であり、「おれの顔は、あの男（秋幸の実父：論者注）の顔だった」と自覚しているが、母や姉から兄に似ていると言われ続け、それを受け入れてしまっている。秋幸は、母や姉に秋幸として〈存る[2]〉と認識されないと、確固たる存在となることができないのだ。だが、姉は秋幸が確固たる存在とならない限り、兄の影を重ねてしまう。秋幸はアンビヴァレンツな状態にあると言えよう。最初に母や姉が、秋幸が兄に似ていると会話をしている場面を確認する。

「まあ、秋幸も十五や十六じゃない、二十四にもなっとるんやから、ちょっとぐらい酒飲んでもかまんけどな」

「兄やんの死んだ齢やもん」姉は言った。姉は彼の体をみまわした。

「おうよ」と母は言った。卓袱台の前に坐り込んだ。妙に、母の体から力が抜けていくのがわかった。姉の眼が、螢光灯の光を映

していた。

「さっき、ここへ来る時、兄やんがおる、と思たんやだ。びっくりしたよ」姉は坐った。「よう似て来て」

「おうよ」とまた母は言った。「秋幸みるたんびに、思うよ」　（一七三頁）

姉の眼に蛍光灯の光が映る様は、姉が秋幸に兄の幻影を見ていることを示唆する。しかし、姉はこの直前の場面では秋幸に兄を重ねていない。酒宴から秋幸を連れ出す口実として姉は母の家まで一緒に行くよう促す。この時、「酒飲むと、頭が悪りなる血筋やから、恐ろして、よう飲まんの。弟の秋幸が飲んでるのみても、心配になるん」と、アルコール中毒によって自死した兄と秋幸の血縁を気にはしている。だが、義父の家に共に行くように秋幸を誘う姉の言葉は「おまえのその体みたら、誰でもおびえん者はおらんのやから」というものである。姉は秋幸の身体的特徴は兄ではなく「体だけがやたら大きくみえるあの男」と似ていると認識しており、ここでは秋幸に兄を重ねてはいない。しかし、その道中で姉は秋幸に兄を重ねて見始める。本作では、姉の周囲に人々が集まり、彼女を中心に物語が展開するように、姉の言動が物語世界に影響を与え、それを左右する力を持っている。そのため、姉の秋幸に対する認識が、「あの男」から兄に似ていると変化した時、秋幸は秋幸として〈存る〉ことができなくなったのだ。そして、それは姉たちの秋幸の認識とそれに呼応する秋幸の足音の描写を整理した表のA（43頁参照）にあるように音を立てない歩き方で示される。

この時、姉は秋幸に、

「秋幸が、死んだ兄やんみたいな気したんや。秋幸も、兄やんみたいに、手、つないでよ。兄やんが生きてる時、いっつもこの道、手をつないで歩いて、母さんの家へ行ったんや。（以下略）」　（一七二頁）

と兄との思い出を語りながら、秋幸に兄の影を被せ、兄と同じ行動を取るように望む。この姉の発言も先に挙げた姉と母の会話も秋幸と兄との相似を語っている。母と姉が秋幸と兄とを結び付けようとする真意は、秋幸と「あの男」を切り離すためである。さらに姉に

いたっては、秋幸を姉ら父の系譜に取り込もうとしている。それが分かる場面を確認しよう。まず姉から見てみたい。

「おっきい体じゃね、雲突くみたいな大男じゃね。あの男にそっくりになって来たね」
「叔父さん、秋幸はわたしの弟やで」
「叔父も安心じゃ。美恵にこんな雲突くような弟がおるから」　（一八五頁）

秋幸と血縁関係のない弦叔父は秋幸を客観的に見ることが出来、「あの男」との相似を語る。だが、姉は「秋幸はわたしの弟やで」と応えることによって、母系一族から母を奪う原因を作った「あの男」に秋幸が似ているはずがないと主張する。秋幸の血の繋がりを「あの男」から切り離し、兄や姉という母系一族のみと血が繋がっているとしようとしてのことだろう。だが、この母系一族を壊したくない姉の発言は秋幸を不安にさせる。弦叔父が来る直前、姉は秋幸にすしを彼女の家で食べるよう一度は言ったものの、義父の家で母と共に食べるように言い改めている。姉は秋幸に自分の家ですしを食べさせることで、母から秋幸を奪ったと思われたくなかったのであろう。これは母系一族のしがらみの露われである。秋幸に母系一族を裏切った母たちの家の人間だと強要した姉は、弦叔父のことばを聞き、「あの男」と秋幸を切り離すために姉たちの系譜に取り込んだように、姉の秋幸に対する認識は家のしがらみも関係してより不安定となっている。そのため、秋幸は自身のいるべき場がどこであるか不安になり帰り道、表のBにあるように、「自分の地下足袋の足音を確かめながら」歩いたのである。

次に、母が秋幸と「あの男」を切り離そうとしている箇所を見る。

「（略）あれ（あの男：論者注）の噂きくたびに、おまえの体半分割って、血も半分、出したりたいと思うよ」　（一九〇頁）

母は秋幸から父系の血を抜き、母系の血のみが流れる人間にしたいと秋幸に語る。前述した姉が秋幸と兄を重ね始めた時の会話の最中、母は「おうよ」と姉に同調してはいるが、母は姉のように秋幸と兄を重ねてはいない。姉がいない場で、「おまえの顔みたらすぐわかる。

酒もバクチもやってみたい」と、酒を飲んで死んだ兄と、バクチで捕まった「あの男」と同じ血が流れていると言っているため、母は秋幸を一人の人格として捉えているのである。このように秋幸と「あの男」に対する姉と母の認識は違ってはいるが、秋幸が「あの男」と似ていることを否定する二人の想いは同じである。先に挙げた母と姉の会話での母の「おうよ」の意味について渡部直己は、

> 肯定であると同時に、「母や姉の言うように、自分が兄と似ているとは思えない」人物にたいする一種の命令形としてきわだとうとする点に留意すればよい。すなわち、可変的なものと真近さとの紐帯は、厳密にはまず、「女」たちの側から主人公に差しむけられようとする[3]（以下略）（傍点、原著）

と、「おうよ」は肯定であると同時に、兄と似ているとは思えない秋幸に対して、兄と似ているのだと思わせようとする命令形であると論じている。だが、母は先に述べたように秋幸と兄を別人格として認識している上に、秋幸から「あの男」の血を出してしまいたいと言うように、「あの男」と秋幸のつながりを認めており、敢えて兄と似ていると秋幸に強いる必要はない。したがって、「おうよ」とは姉のことばに応えるために母自ら秋幸と兄が似ていると思わせる命令形だったのだ。「兄やんの死んだ齢やもん」という姉の言葉を聞いた「母の体から力が抜けていく」ように、母には兄と姉を捨て、自殺に追い込んだ負い目があるため、自殺した兄に捕らわれ始め、秋幸に兄の影を重ね始める姉に対し、罪の意識から同調せざるを得なかったのである。

秋幸は自身の容姿が「あの男」と似ていて兄とは似ても似つかないと自覚しているにも関わらず、兄に似ていると繰り返し言う姉や母に反論出来ない。なぜ秋幸は反論しないのか。母は再々婚する際、父親を異にする秋幸のみ連れ子とし、兄や姉を捨てた。仮に秋幸が存在しなければ、母が姉と兄を連れ子とした可能性は否定出来ず、また再々婚の条件が「母ひとり子ひとり、父ひとり子ひとり」という五分と五分の関係だったならば、再々婚を拒んだ可能性も出て来る。秋幸は自身の存在によって母系一族の人間関係の均衡を崩したと罪の意識を背負っており、忠実な息子や弟であろうと努めていると考えられる。だからこそ秋幸は自らを抑え込み、自身が兄に似ているという姉や母の言葉を受け入れてしまうのである。母も姉も秋幸が「あの男」の側へ行かないよう、繰り返し兄に似ていると刷り込むことで秋幸を母系に縛り付けているのだ。よって、この母や姉の言葉は秋幸を母系に縛り付ける呪言と言えよう。

四、『岬』におけるにおい

『岬』には「冷えた土」や「草花」、「豚の屎尿」、「鉄や土埃」、「化粧」、「わきが」など様々なにおいが描写される。そして、秋幸はこれらのにおいを敏感に嗅ぎ取っている。だが、秋幸が感じるにおいと主要出来事をまとめた表（43頁参照）から明らかなように、においに敏感な秋幸が唯一表のIの「卵焼きのにおい」だけは感じていないのだ。芳子と姉が「卵焼き」について語る場面を見てみよう。

「お弁当に、卵焼き入れてな」と姉は言う。彼にむかって、「おいしいよお、砂糖入れて、おしょうゆ入れて、味つけて焼くん」と言う。

「母さんのにおいは卵焼きのにおいか」芳子が言う。わらう。「昔から貧乏して、卵焼きが、うちの一番のおかずやったもんねえ。兄やんも美恵も、夜のおかずは卵焼きときくと、わあわあ言うて」

「貧乏はいややな」母は言った。

「貧乏でも、かまうかしてえ」芳子は言う。「なあ、美恵ちゃん、貧乏でもかまんなあ」　（二二七頁）

この会話は単なる思い出話ではなく、姉らと母の過去に対する認識の違いを露見させる効果を持っている。貧しい生活は姉たちの父亡き後から母が再々婚するまで母系一族で暮らした時の出来事であり、姉たちにとっては母系一族が誰一人欠けることなく暮らした幸せな時代の思い出である。だが、母系一族から抜け義父との暮らしに生活を移した母にとっては、貧乏だった時代は美しい思い出ではないらしく、その時代を否定するのだ。この過去に対する認識の違いは、父の法事を義父の家で行うか、かつて父が暮らし、その後母系一族で暮らした家で行うかという意見の食い違いにも繋がるのである。つまり、母の「貧乏はいややな」という言葉には過去を捨てたという意味が込められていると言えよう。さらに、最初に「母さんのにおいは卵焼きのにおい」という姉の言葉に「あほらし」と笑う秋幸は、母と共に義父との暮らしに入ったため、貧乏だった頃に特別な想いを抱くことはないのである。そのため芳子は、美恵には同

調を求めても母と共に自分たちを裏切った秋幸には貧乏でも構わないという同調を求めなかったのである。

「卵焼きのにおい」は姉や兄を捨てた母と秋幸と、母に捨てられた姉たちとの確執を表面化させる意味合いを持っていた。だがそれ以上に、においは重要な意味を担っていると考える。安雄による古市刺殺事件後に秋幸がにおいを感じる場面を見てみたい。まず、表のGの古市の葬儀の翌日の場面である。

死んだものに、この朝がないというのが不思議だった。干物を焼いたにおいがしていた。兄に、あの時、刺されて死んでいたら、自分もこの朝を見ることも、感じとることもない。

（一九七・八頁）

兄に殺されなかったため、「干物を焼いたにおい」を秋幸は感じることができる。では本作におけるにおいとは、どのような機能を果たしているだろうか。秋幸が自身のにおいを一度だけ感じ取る表のHの場面を見る。

彼は、兄が包丁を持ってやって来た時のことを思い出した。兄は殺せなかった。刃物で、刺し傷つけることすら出来なかった。湯呑みの酒を彼は飲み干した。胃が熱く痺れ、腸を通って、陰嚢のつけ根あたりに伝わる。下着から汗がにおった。

（二〇七頁）

ここでも秋幸は、自分たちを兄が殺せなかった時を思い出し、それと同時に、初めて自身のにおいを感じ取ったのである。この二カ所とも、兄に殺されなかったことでにおいを感じられていると描かれているため、『岬』において、においは〈生〉の証だと言えよう。だが、下着に染みこんだ汗のにおいしか持っていない秋幸の〈生〉の力は微弱である。つまり秋幸は物体として〈在る〉が、一人の人格として〈存る〉と認識されていないことを示唆しているのだ。秋幸として〈存る〉ことが出来れば、確固たる存在となり、兄に似ているという姉らの呪言から逃れられ、足音を確かめずとも一人の人格として自身を認められるのである。だが姉や母に従順でいる限り、

秋幸は彼女たちのことばに呪縛され続け、秋幸として〈存る〉ことを認めてもらわれず、息苦しさの中に閉じ籠められたままである。

微弱なにおいしか持っていない秋幸に対し、安雄は表のDにあるように吐き気を憶えさせるほど強い「わきが」のにおいを持っている。主要人物関係図を見るとわかるように、安雄は作品の主要人物でありながら血縁のしがらみの外側に位置し、さらに、秋幸が禁じられている性交を経験している。血縁のしがらみの外側に位置し、「監視付きの赤子」のような秋幸と違う安雄は、秋幸にとって魅力的な人物だったに違いない。だからこそ、秋幸は安雄のにおいにこだわるのである。この安雄のにおいは表のDにあるように仕事中に感じるのは勿論のこと、表のEにあるように安雄が妻の光子と話している時にも感じている。また、表のFにあるように安雄が古市を刺した際、安雄の「わきが」のにおいを想い出す。これらD・E・Fに描かれた「わきが」のにおいはそれぞれ違う意味を持つ。Dの仕事中の場合は〈生〉、Eの光子との会話の最中では〈性〉、そしてFの古市殺害の場面では〈暴力性〉を表しているのだ。一人格として認識されていない秋幸は、これら三つを持ち合わせていない。〈性〉も〈暴力性〉も固有の〈生〉があるからこそ存在する。〈性〉は母により禁じられており、〈暴力性〉は兄が秋幸らを殺そうとしたが殺せなかった出来事に繋がり、また山林地主から山や土地をまきあげた「あの男」を想起させる。こう考えると、母に強いられた禁忌である性交を行うことで、秋幸は「わきが」のにおいという〈生〉の証を獲得出来るのではないだろうか。「わきが」は吐き気を憶えさせるマイナスのイメージを孕んではいるが、秋幸が持ち合わせない要素からなる「わきが」のにおいは同時に強力な〈生〉の証でもあるようにアンビヴァレンツなにおいだと言えよう。

五、近親相姦と秋幸の自己の確立

秋幸は物語終盤において近親相姦を行ったことによって三つの禁忌を破る。

既に確認した母による禁忌。「女に、現を抜かしたらあかんわい」と言われているように、秋幸は性的関係を持つことを母に禁じられている。また、

「月給もろたら、今度こそ、ええとこ行こうよ」文昭は言い彼の裸をみまわした。彼は母の顔をみた。　（一七六頁）

とあるように秋幸は母の顔色を窺い、母に対する遠慮から性欲を抑え性的関係を持つことを我慢しているのである。そのような秋幸自身も、女を知ると「とめどなくのめり込み、どろどろになり、女とみれば見境いなしに手をつけたあの男と同じになってしまいそうな自分」に不安を抱いており、女を「知りたくなかった。余計なもの、やっかいなものに自分をかかわらせ、汚したくなかった」と、性的関係を持つことを忌み嫌っている。

姉たちの父の法事をはじめとして、死者にこだわる姉たちの姿を見せつけられた秋幸は、母系の血のしがらみに葛藤と「息苦しさ」を憶え、そこから脱出するために異母妹と近親相姦を行う。その理由は、

酷いことをしでかして、あいつらに報復してやる。いや、彼が、その身に、酷いことを被りたかった。（二三九頁）

あの男そのものを凌辱しようとしている。いや、母も姉たちも兄も、すべて、自分の血につながるものを凌辱しようとしている。おれは、すべてを凌辱してやる。（二四〇・一頁）

と描かれているように、自分の血に繋がる者への報復と凌辱である。先行論においても、近親相姦は、わずらわしい血縁を背負わせた者への反発と復讐と位置づけられてきた[4]。確かに、息苦しい血縁の中に秋幸を置いた母や姉たちへの反発心はあったと考えられる。だが、血の繋がる者への凌辱のためだけに近親相姦は行われたのであろうか。川合智は二度行われた性交の間の会話[5]に着目し、次のように論じている。

女は「しょうもない」と言下に言う。この「妹」の言葉を聴いて、秋幸が「うなずいた」ことを読み落としてはならない。秋幸は「死」から遠ざけられ、「若い身空」で死んだ、「兄」や「姉」たちの「父」は否定される。「母」や「姉」に比べ、「妹」の言葉の

清々しさは圧倒的だ。そして、これまで「母の言い分」も、「兄の文脈」も「あの男の文脈」も「拒否」し続けてきた「秋幸」が「うなずいた」のだ。ここで「生きる」という方向に「秋幸」は向いたのではないか。[6]

異母妹の言葉によって秋幸は「生きる」方向へ向いたと言うのだ。だが死を否定する言葉だけではなく、においにも注目する必要がある。なぜなら、表のJにある「くさいことあらへんな、青いような、石鹸のようなにおいするな」という異母妹の言葉によって、秋幸がはじめて〈生〉の証であるにおいを獲得したことが確認できるからである。つまり、母系の血縁のしがらみに葛藤を憶え、自らをその中に留めておく限界に至った秋幸は〈存る〉者として認められたい気持ちが抑えられなくなった時、性交を求めたのだ。母から禁じられ、自らも封じていた性交を行うことは禁忌を犯すことを意味する。その上、秋幸は「あの男」を「父とは呼びたくない」と、「あの男」を父と認めることを禁忌としていたが、「この女は妹だ、確かにそうだと思った」と確信したことにより、この禁忌をも破った。そして「あの男」を父と認めたことによって性交は近親相姦となり、秋幸は人倫に背いたのだ。こうして秋幸は、彼を縛り続けていた母系から解き放たれ、確固たる自己を確立させた。しかし近親相姦を行っても、秋幸は獲得したいと願った安雄の「わきが」のように強烈なにおいを獲得出来なかった。だが、「あの男」を父と認め、これまで禁忌としてきた性交を行うことによって異母妹に「青いような、石鹸のようなにおい」がすると言われても、秋幸はその言葉を受け入れるのではなく、表のKにあるように「今日から、おれの体は獣のにおいがする。安雄のように、わきがのにおいがする。」と自身の言葉でアイデンティティを保証できるようになったのである。したがって、これまで母や姉に従って生きてきた秋幸は、三つもの禁忌を破ったことにより、確固たる存在として〈存る〉ことができるようになったのだ。それは地の文における秋幸の表記からも見える。『岬』では「彼」であったのに対し、続編『枯木灘』では「秋幸」と記される。『岬』の地の文での呼称が秋幸から見た立場であったにも関わらず、秋幸は一人称でも「秋幸」でもなく、「彼」と記されていた。そのように表記することによって、秋幸の主体性の希薄さを示していたのだ。[7] そして近親相姦によって秋幸は自己＝名前を獲得し、主人公として相応しい人物へと昇り詰めていったのである。

おわりに

『岬』において作中に起こる出来事に最も大きな影響を受ける者は姉であり、その姉に寄り添って行動する秋幸は潜在的な主人公の位置に置かれていた。秋幸は、姉や母の呪言により母系に縛り付けられることによって、母系に対し「息苦しさ」と葛藤を憶える。そこから脱出するために、物語終盤において秋幸は自身に課した禁忌を破ったのである。これまで他人の言葉に従うのみであった秋幸は、近親相姦という禁忌を破ったことにより、におい＝〈生〉の証を獲得し、さらに、自分の言葉でアイデンティティを保証できる人物へと成長した。つまり、秋幸は確固たる自己を確立したのである。したがって、『岬』は秋幸が主人公として相応しい人物に昇り詰めていくまでを描いた作品であったのだ。主人公に相応しい力を獲得した秋幸ではあったが、近親相姦を行ったため、「あの男」を敵とし、対峙しなくてはならない新たな試練を同時に背負うこととなった。そして秋幸の物語は、実父の表記が「あの男」から「その男」へと変化するように、「あの男」が秋幸の前に立ちはだかり、彼の意識の中に入り込んで来る『枯木灘』へと連続していくのである。

注

（1）芥川賞の選評（『芥川賞全集　十』文藝春秋、一九八二（昭和五十七）年）において人物関係の複雑さに言及されている箇所を挙げる。

吉行淳之介「人間関係が複雑をきわめているので、二度読んだ。」

丹羽文雄「今度の作品にも、欠点はある。人物が多すぎて、判りにくいこと。」

井上靖「人間関係をのみこむのに、多少難渋した。」

永井龍男「登場人物の親戚、姻戚関係が錯雑していて、それを呑み込むまで骨が折れた。（中略）現在もなお、間柄のはっきりしない人物の名が私の頭の中に残っているが（以下略）」

瀧井孝作「紀州新宮あたりの土方一家の話らしいが、人物がゴチャゴチャして、描写も何もない、わけのわからんものと私は見た。」

また中村光夫は「力まかせに書いたところと、妙に技巧を弄したところがまじりあって、読者の頭を混乱させ、読むのに苦痛をさ

え感じさせます」と評価し、安岡章太郎は「おそろしく読み難い」と評している。中村と安岡は人物関係にしぼっていないが、選考委員全員が『岬』に対し、作中の人物関係が複雑過ぎると否定的な印象を持っていたことがわかる。

（2）和辻哲郎『人間の学としての倫理学』（岩波書店、一九五一（昭和二十六）年）によると、〈存〉は主体的作用であり、自覚的に有ることを意味し、〈在〉は物や人物が場所に有ることを意味する。

（3）渡部直己「真近さについて」（『中上健次論　愛しさについて』河出書房新社、一九九六（平成八）年）

（4）近親相姦についての先行論には以下が挙げられる。

渡部直己は、「真近さについて」（前掲（3）同書）の中で次のように論じている。

物語の結末でこの思い（彼のみ不在の時期へ女たちの意識が退行していくことに対する反撥心：論者注）が不快のきわみに達するとき、「彼」は唐突にもきわめて逆説的な振る舞いにおよぶ。種違いの「兄」にむけて「女」の領分から強いられる可変性への最終的な反撥として、腹違いの「妹」久美を抱くという決断がそれであり、「彼」はそこで、かつていくつもの悪事を働き、三人もの女を同時に孕ませ、いまも実の娘である久美を「妾」にするという噂までつきまとうその実父、出来るなら抹殺してしまいたいとさえ唾棄しつづける「あの男」と似たような「酷いこと」をしでかしてしまうのだ。（傍点、原著）

ここでは、姉や母から兄との相似を強いられることへの反撥として、実父のように酷いことをしでかそうと近親相姦へと至ったと述べている。一方で、四方田犬彦は「貴種の終焉」（『貴種と転生・中上健次』新潮社、一九九六（平成八）年）において、

本質を形成するのは血に他ならない。だが、血はあくまで生物学的な自然として顔を出しているのであって、血が人為の意味を担った媒体であるという事態そのものが問いに付されるまでには至っていない。「彼」は「あの男」の姿を直接正視することはできない。「あの男」を否定するには、とりあえずその根拠となる生物学的秩序を攪拌するしかない。「彼」と「女」との近親相姦は、そのようにして正当化される。「女」を犯すことは、その起源である「あの男」を犯すことだ。

と、母や姉には言及せずに実父＝「あの男」に対する復讐として近親相姦を捉えた。

小林幹也は「「岬」―近親相姦と分身―」（「縦覧」第三号、一九九八（平成十）年）において、近親相姦を父だけではなく「母、姉、兄への報復も含まれていたと述べる。それはわずわしい血縁を自分に背負わせた者たちへの報復だった」と本論と共通の理解

を示している。しかし、小林は秋幸の近親相姦は自己のアイデンティティを確立しようとして誰かの分身であることに反撥しているのではなく、「優しい顔の男」になりすまし、実父の邪悪な血を受け継いでいることを隠蔽して生きていくことに対する不安とうしろめたさに反撥していると指摘しており、これは秋幸の行動に主体性を認めていないため本論とは立場を異にする。

李鍾旭は「中上健次「岬」論―「秋幸」の誕生過程をめぐって」（「千里山文学論集」二〇〇四（平成十六）年）の中で「「あの男」への復讐（＝「儀式」）のために「彼」が、「腹違いの「妹」（＝久美）との肉体的接触」を持った行為を、「複雑な血縁関係」の最大の被害者とも言うべき彼の通過儀礼だと位置づけた。

（5）次の会話は一度目と二度目の性交の間に交わされたものである。

「くさいことあらへんな、青いような、石鹸のようなにおいするな」女はひとりごちるようにつぶやく。

（中略）

「死のと思たことがあるか」彼は訊いた。

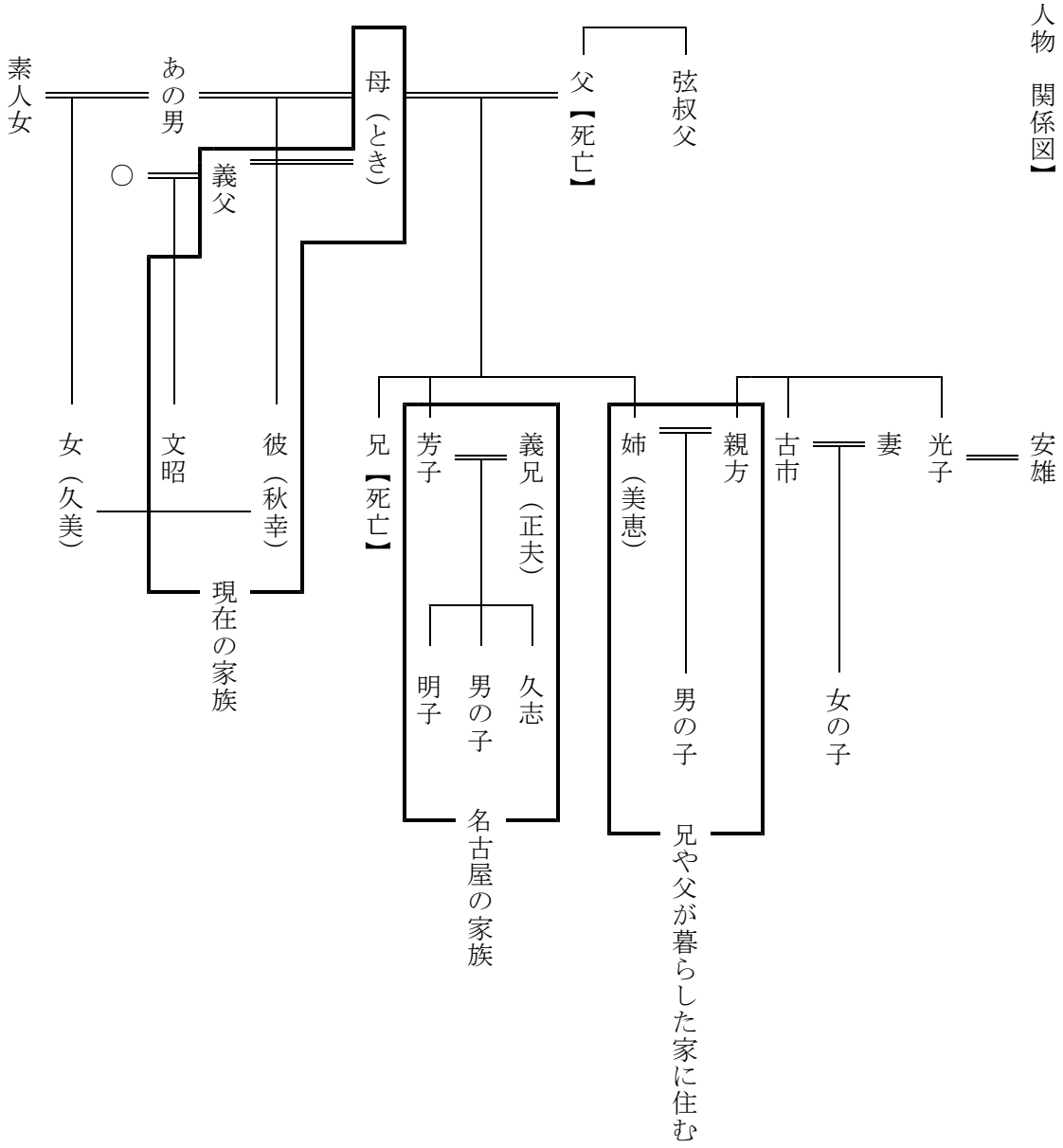
「しょうもない」女は言った。彼に足をからめた。「こんな若い身空で、そんなこと考えますかいな。そのうち、金をどっさり持った人と結婚してな。兄ちゃん、その時、あいつは新地で体売ってたなんて言うて、邪魔せんといてな」

彼はうなずいた。　（二三八・二四一頁）

（6）川合智「〈誤読〉される秋幸―中上健次『岬』の持つ可能性」（「学芸国語国文学」二〇〇八（平成二十）年）

（7）『枯木灘』では秋幸同様、母や義父にも名前が与えられているが、初出誌では連載一回目のみ『岬』と同じく秋幸から見た関係や「母のフサ」「姉美恵」のように「秋幸から見た関係＋名前」の形式で表記される。ただし、『岬』には母が義父や「路地」の女から「とき」と呼ばれている箇所が二カ所あり、また異母妹も『枯木灘』『地の果て　至上の時』の「さと子」ではなく、「久美」と呼ばれている。〈秋幸サーガ〉の登場人物の名前は『枯木灘』において確定したと言えよう。

【主要人物　関係図】


安雄
光子
妻
女の子
古市
親方
男の子
兄や父が暮らした家に住む
姉（美恵）
弦叔父
父【死亡】
義兄（正夫）
久志
男の子
明子
名古屋の家族
芳子
兄【死亡】
母（とき）
彼（秋幸）
あの男
素人女
女（久美）
文昭
義父
○
現在の家族

表「足音」と「におい」

出来事	足音	におい
姉と母の家へ行く道中、姉は秋幸が兄のような気がし、兄のように手をつなぐよう言う。	歩くたびに、作業着にした乗馬ズボンのこすれあう音がした。大きく股をひらいて歩いた。地下足袋は、音をたてなかった。　A（一七二頁）	
土方仕事中、土を掘っている時。		
光子が安雄の弁当を持ってくる。		
姉がすしを作り、姉の家で食べるか訊いてから、母らと食べるよう言い改める。弦叔父が秋幸が「あの男」にそっくりになってきたと言う。	すしを持って、親方の家を出た。夕焼けは終っていた。わざわざ遠まわりして、新地をとおった。（中略）『弥生』が、それだった。そこを足早にとおりすぎた。その店に入ることも、その店の前を通りすぎることも誰かにみられ、禁じられている気がした。自分の地下足袋の足音を確かめながら、家にむかった。　B（一八七・八頁）	
安雄が古市を刺す。		
古市の葬儀の翌朝。		
寝込んだ姉が、秋幸を見て、兄に似ていると言う。仕事について訊く。	母と連れ立って、歩いて帰った。ひたひた、と地下足袋が鳴った。　（二〇四頁）	
人夫らで酒を飲む。		
父の法事の直前、姉が仏壇を壊しにかかった。姉を家に連れて行った。	彼は、立ち上がって、玄関の硝子戸を閉めた。その彼の、畳を踏む足音に、姉は「来たあ来たあ」と言った。　C（二二一頁）	
姉が子供のようになってしまった。		
（岬へ行く。）		
異母妹と性交を行う。		
		安雄のわきがのにおいがした。彼は息をつめた。吐き気がした。　D（一七八頁）
		「（略）傍からみたら、新婿ほやほやにみえるやろ？」「しょうもないこと言うて」安雄は言う。また、安雄のわきがのにおいがする。　E（一八二頁）
		一体何が原因なのか、彼にはわからなかった。突然、起こってしまった。安雄の姿を想い浮かべた。いや、安雄の体が動く時にわきの下からもれるわきがのにおいを想い出した。　F（一九三頁）
		死んだものに、この朝がないというのが不思議だった。干物を焼いたにおいがしていた。兄に、あの時、刺されて死んでいたら、自分もこの朝を見ることも、感じることもない。　G（一九七・八頁）
		兄が包丁を持ってやって来た時のことを思い出した。兄は殺せなかった。刃物で、刺し傷つけることすら出来なかった。湯呑みの酒を彼は飲み干した。胃が熱く痺れ、腸を通って、陰嚢のつけ根あたりに伝わる。下着から汗がにおった。　H（二〇七頁）
		「母さんのにおいは卵焼きのにおいか」芳子が言う。わらう。「昔から貧乏して、卵焼きが、うちの一番のおかずやったもんねえ。兄やんも美恵も、夜のおかずは卵焼きときくと、わあわあ言うて」 「貧乏はいややな」母は言った。 「貧乏でも、かまうかしてえ」芳子は言う。「なあ、美恵ちゃん、貧乏でもかまんなあ」　I（二二七頁）
		彼のわき毛を、髪でくすぐった。鼻をおしあて、においをかいだ。「くさいことあらへんな、青いような、石鹸のようなにおいするな」女はひとりごちるようにつぶやく。　J（二三八・九頁）
		五体をかけめぐるあの男の血を、眼を閉じ、身をゆすり声をあげる妹に、みせてやりたいと思った。今日から、おれの体は獣のにおいがする。安雄のように、わきがのにおいがする。　K（二四二頁）

第三章―一節　『枯木灘』論―秋幸の死と再生―

はじめに

〈秋幸サーガ〉は、神話の主人公としての英雄が繰り返し試練を乗り越えて成長していくように、秋幸にも繰り返し試練が与えられ、それを乗り越えていく構造となっている。前作『岬』で母と姉の呪言から逃れ、自己を獲得しなくてはならない試練を秋幸は背負っていた。近親相姦を行った秋幸は、禁忌を犯したことで母や姉らの呪言から解き放たれ、自己を獲得した。しかし同時に、龍造との対峙というさらなる試練までも得てしまったのである。

このように、自己を確立し不安定な状態から脱したかのように思われた秋幸ではあったが、本作では実父・浜村龍造や竹原一族の出現によって、不安定な位置にいることを改めて意識させられた。そして『岬』において姉・美恵に兄・郁男と重ねて見られることをうっとうしく感じていたにも関わらず、秋幸は自ら兄・郁男や浜村龍造の行動を反復してしまう。そこで本節では『枯木灘』において、より複雑となった血縁関係の中での秋幸の自己の位置づけにおける不安を明らかにし、その上で、物語終盤に描かれる山中での秋幸のケガによる出血の意味を考察する。

一、秋幸が〈反復〉を行う理由

『枯木灘』と『岬』の内容や物語の構造は近似している。この二つの作品の構造を見てみると、平穏な日常生活、そしてそれを壊す事件があり、終盤において異母きょうだいに対する秋幸の突発的な行動から成っていることがわかる。このように物語の構造が似通ってしまう理由は、中上が物語を書くにあたって、物語の祖の時代から物語にはプロローグからエピローグに向かって流れる法則や制度があると考えていたからである。[1] そのため、この物語の法則や制度というコードによって、『枯木灘』は『岬』の構造を〈反復〉したのだ。つまり物語の構造の〈反復〉は、それが物語である以上、法則や制度によって免れることが出来ない必然だったのだ。

物語のコードは勿論のこと、既に論じられているように物語の内容においても、『枯木灘』の登場人物たちは他者（他の登場人物）の物語を踏襲し〈反復〉しているのである。[2] 以下、その具体的な分析に移る。物語中において龍造と郁男の行動や役回りを秋幸は〈反復〉している。まず、龍造を〈反復〉するとは、龍造が囲っていると噂されている「藤田」の女と性的関係を持つことだ。この女を龍造が

囲っていた事実はなかったが、秋幸が同時に複数の女と性的関係を持ったことは、同時に三人の女を孕ませた龍造の〈反復〉となる。さらに紀子を妊娠させた秋幸が秀雄を殺害し入獄することは、フサが秋幸を身籠っている最中に入獄した龍造の〈反復〉である。だが、より重要な〈反復〉は龍造ではなく郁男の〈反復〉だ。その一つは次に引用するように、郁男と秋幸が同じ役を振り当てられ、同じ気持ちを抱いていることである。

その赤ん坊の美智子が大きな腹をして帰ってきたのだった。秋幸には、そっくりそのままかつて昔あったことを芝居のように演じなおしている気がした。いや、自分が、かつて十六年前の兄と同じ役を振り当てられている気がした。

（二五四頁）

これにはまず、実弘と駆け落ちをした美恵と、五郎と駆け落ちをした美智子の〈反復〉がある。美智子の叔父ではあるが兄のような立場の秋幸が、五郎と駆け落ちした美智子を見つめる役割を担わされたのは、駆け落ちをした美恵を見つめる兄・郁男を〈反復〉しているからである。母系一族の長として家を守り続けた郁男と、そうではない秋幸という差異が生じてはいるが、秋幸も郁男も生活の秩序を乱された。なぜなら、美智子の夫である五郎が秋幸の異母弟・秀雄と諍いを起こしたため、秋幸は一定の距離を保っていた浜村家と接近しなくてはならなくなってしまったからだ。この結果、次に引くように、片親が違う弟を持つ兄の心情、つまり郁男の心情を秋幸は理解できるようになったのである。

（秋幸は：論者注）秀雄の兄ではあるが、秋幸は（浜村の家において認められた：論者注）兄ではない。いや腹違いの兄だという気持ちは秀雄と町で出あう秋幸の心のどこかにあったはずだった。

秋幸は、郁男を想い出した。郁男は秋幸の種違いの兄だった。秋幸はそう思いつき、或る事に思い当り愕然とした。郁男は、今の秋幸と同じ気持ち、同じ状態だったのだ。（中略）殺してやる。秋幸は思った。郁男はその時、そう思ったのだった。その時の郁男の眼は、今の秋幸だった。郁男は何度も何度も鉄斧や包丁を持って、路地の家から〝別荘〟の辺りにある義父の家へ、フサと秋

幸を殺しにきた。　（三三一頁）

この場面の直前、秋幸は龍造と共にいる秀雄に遭遇していた。そこで「兄やんに謝らんかい」などと龍造が秀雄に向かって秋幸のことを「兄やん」と呼んだため、秀雄の「腹違いの兄」であるという認識が、秋幸の中で浮上してきたのであろう。秀雄の「腹違いの兄」という立場を自覚することによって、「腹違いの弟」である秀雄が親元で何不自由なく親に庇護されていることに改めて気づかされ、秋幸は「種違いの兄」の郁男と自身を重ね合わせ、「種違いの弟」に親子の親和から排除された郁男の想いを理解できるようになったのである。秋幸が秀雄の、郁男が秋幸の、義理の兄という関係性も〈反復〉しているのだが、それ以上に二人の心情の〈反復〉が重要と考える。そもそも義理の兄弟という関係性を生み出し、家の親和から秋幸や郁男が疎外される原因を作った人物は龍造である。龍造は、郁男が一族の長として守っていた母と母の子から成る西村家を破壊した。仮に、龍造が西村家に闖入しなければ秋幸が生まれることはなく、したがってフサが繁蔵と再婚しなかった可能性もあるだろう。また、再婚したとしても男親の異なる子がいないため、「路地」に残った郁男と美恵を連れ子とした可能性も否定できない。つまり、龍造の存在がなければ、郁男の平穏な暮らしは守られたのである。続いて秋幸について見てみると、五郎と秀雄の諍いによって、秋幸は浜村家との間に保っていた均衡を乱された。さらに、この諍いのときの姉らの発言により、西村に属しきれていない事実を、秋幸は突きつけられたのである。つまり、秋幸と郁男は龍造の出現により、平穏な生活を壊され、寄る辺なさという不安を抱くこととなったのだ。さらに龍造との接近によって、秋幸はこれまでその存在を想像だにしなかった龍造と龍造の子・秀雄との間の親子の親和が漲った空間を見せつけられたはずである。それは、秋幸とフサの間にあった親和の漲る空間に郁男が感じたに違いない、親に排除された疎外感と等しい。親和によって閉じられた空間から排除されることによって生じた不安が、郁男と秋幸の二人に、それぞれその空間にいる者への殺意を抱かせたのだ。よって郁男と同じ境遇に立たされた秋幸は、郁男の行為や心情の〈反復〉を無意識の裡に行ってきたと言える。

さて、〈反復〉の行為として多く論じられている秋幸の近親相姦であるが、これは〈反復〉ではないと考える。先行論では秋幸とさと子の近親相姦について、郁男と美恵を若夫婦のようと言い、郁男が美恵に恋をしたという「路地」で流れた噂や、「路地」で歌い継がれる盆踊り歌の「きょうだい心中」の〈反復〉だとされてきた。(3)

確かに、さと子が秋幸の異母妹と判明し、秋幸が龍造に「さと子と姦った」と告白した場面は『枯木灘』の中にある。だが、さと子との性交そのものは「その新地の女は、秋幸のはじめての女だった。二十四のそれまで秋幸は女を知らなかった。それは姉の美恵が禁じた。」と叙述されるように『岬』で行われている（「さと子」は『岬』での「久美」）。『岬』において母や姉によって、性交を行い、また龍造を実父と認めることを禁じられていた秋幸は、新地の女を異母妹と認め、その女と性交を行うことにより、母や姉が強いた禁忌を破ると同時に、近親相姦を犯し人倫にまで背いた。つまり、この近親相姦は秋幸によって彼を一人の人格として見ようとしない母や姉の領分から脱し、自己を確立するという目的を伴った行動だったのであり、作中で独自の意味を持つ。兄が妹に恋をし肉体関係を迫ったとする郁男と美恵の噂や、兄が妹に恋した故の悲劇を歌う盆踊り歌の「きょうだい心中」と、龍造やフサを凌辱するために行われた秋幸の近親相姦とでは性格が異なっているのだ。〈反復〉と一括りにしても、〈反復〉する者が〈反復〉される者の行動を全く同じようになぞる必要はないだろう。だがこの近親相姦は、恋情とは違う秋幸の明確な意思によって行われているため、郁男や「きょうだい心中」の〈反復〉と考えてはならないのだ。

それを明確にするには、秋幸が行った郁男の〈反復〉が正確には何だったかを見ていかなければならない。〈反復〉行為は石原千秋によって「秋幸は、「反復」することによってしか秋幸たり得ない」[4]と論じられているが、秋幸が行った真の〈反復〉は、郁男の自殺に関係すると考える。兄たちの父の死後、龍造との間に秋幸を生んだフサは、繁蔵と再婚する際に秋幸のみを連れて「路地」を出、また郁男と共に「路地」に残らされた美恵も結婚のため「路地」を出てしまった。唯一人「路地」の家に残された郁男は、不幸を一人で背負わされたと感じ自殺を図った、と秋幸の中で謎は解けている。しかし一方で、秋幸は「その自殺がいくら解いても解いても新たに仕掛けられる謎」とも考えている。なぜ相反する想いを抱くのか。これは、郁男を殺してしまったという想いから秋幸が逃れられないために郁男に捕らわれ続け、郁男の存在が強烈な葛藤となっているからだ。その結果、無意識の裡に郁男の〈反復〉を繰り返してしまうのである。〈反復〉について菊田均は、

反復というのは、つまるところ「私」の一回性、固有性といったものを否定したところに成り立つものである。「私」が成り立つためには、他の誰からも独立した独自の存在として自分を確定することが不可欠の前提となる。ところで秋幸が「あの男」や郁男の

反復であるというとき、秋幸という本来ならば固有の「私」は、「あの男」や郁男によって浸透され、不断に相対化され続けているのである。秋幸はそれ自身独立した固有の「私」でなく、「あの男」や郁男といった他人との直接的な関係の下に置かれている。[5]

と論じている。この指摘を援用すれば、秋幸は自身の固有性を否定し、郁男の影響下に自身を置いてしまっているのだと言えよう。つまり、郁男の〈反復〉行為を無意識の裡に行ってしまうことは、秋幸が不安定な自己しか持てていないことを示しているのである。

二、帰属する場所を持たない秋幸

ここまでに見たように、秋幸は郁男に呪縛され続け、不安定な自己しか持てていない。それと同時に、本来ならば自分の居場所として守ってくれるはずの家の中でも秋幸は不安定な立場に立たされている。主要人物関係図（65頁参照）を見ても明らかなように、三つの家に関わっているという点ではフサも同様である。だが、フサは彼女の他に同時に二人の女を孕ませていた事実を知った時点で龍造とは縁を切り、「いまの竹原と一緒になる時、二人共昔のことはすっぱりと水に流して、言わんと約束しとる」と語っている。「浜村」という言葉を意識し続け、また郁男の自殺の謎に捕らわれ続ける秋幸とは違い、フサは三つの家に頓着していないと考えられるのだ。では、三つの家を意識せざるを得ない秋幸はどのように自身の位置を認識しているのだろうか。

自分には名前が三つある、と秋幸は昔思ったことがあった。実際にそうだった。秋幸はフサの私生児としてフサの亡夫の西村という籍に入り、中学を卒業する時に、義父の繁蔵が自分の子として認知するという形で竹原の籍に入った。（実の父である：論者注）その男は浜村龍造と言った。

（二七九頁）

秋幸は秀雄に見つめられ、ふと自分が、三つの名前のちょうど真中に位置し、どういうことからも、どういう事件からも無傷の

ままここに至っているのに気づいた。

（二八一頁）

秋幸が三つの家の真中に位置するとは、同時にどの家でも中心に位置する資格を得ていないということを意味する。秋幸は、それぞれ強い親和性によって閉じたこの三つの家のいずれにも所属できず、それらの発する斥力によって、それぞれに片足だけを突っ込んでいるような状態に陥ることで、これら三つの家の真中に宙づりにされているのだ。では、秋幸はそれぞれの家をどのように認識し、また彼らからどのように認識されているのだろうか。

まず、西村家では、フサと美恵の「減るんでなしに増えるんやもん」や、郁男の「死んだんと同じくらいまた生まれるんじゃ」という生まれることを肯定する考え方によって、一人だけ男親が異なっていても秋幸は家の中で守られていた。しかし、そのような西村の家の中心に位置する人物は、縊れ死んだ郁男である。郁男は秋幸の中で繰り返し想起され、その上、美恵らによって死してもなお語り続けられている。郁男は死者でありながらも生者と同じ位置に存在しているのだ。さらにフサの持ちかけに従って繁蔵の元で働くこともせず、一人西村の家を守り続けた郁男こそが西村の家の中心としてふさわしいのである。そのような折、五郎と秀雄の諍いが起こったことによって、秋幸は「兄が死んだ今、母の子として一等下に生まれたたった一人の男として秋幸が、母の子の一族の長としてふるまう」と、生きているからこそ一族の長になることが出来ると思う。だが、美智子が秋幸に向かって秀雄を「おまえの、弟」と呼ぶように、西村の長として振る舞えるという理解は秋幸だけのものであった。他の場面を見てみても、美恵が龍造のことを「声をひそめてそれが拭っても消えぬ忌しいことであるように「おまえが六月の腹の時まで一緒におったんやのに」と話し」、秋幸の生物学的父親を否定することによって、意図せずとも浜村の血が流れる秋幸を西村の中で否定してしまうのである。だがしかし、そのような美恵も、先の美智子の言葉を「秋幸は違うんや」と否定する。秋幸と秀雄の関係を切り離しているわけだが、その一方で秋幸の前で龍造の話題が出た際には「ここに秋幸おるよお」と、秋幸と龍造との関係を改めて表面化させてもいる。一見、矛盾と見えるが、この二つの言葉の真意は、西村の人間として秋幸を守ることにあろう。つまり美恵は、龍造を筆頭に浜村家は否定したいが秋幸は守りたい、と秋幸に対して肯定と否定のアンビヴァレンツな認識を持っていると言える。では、秋幸を連れて西村の家を出たフサは秋幸に対してどのような

認識を持っているのか。「フサが、父親を否定するのだ」と秋幸も思っているが、先に見た通りフサは龍造を否定している上、繁蔵と再婚する際に過去を水に流したことによって、勝一郎は勿論のこと龍造と暮らした事実をもなかったことにしてしまっている。そのようなつもりはフサになくとも、自分の存在を否定されたと秋幸が感じるのは自然であろう。したがって、秋幸は西村から肯定されながらも否定されていると言えよう。

続いて、竹原へ入った後の秋幸の西村や「路地」に対する態度を見てみると、

祖母はフサと離れて二人だけで暮らす郁男と美恵が心配だった。その時、フサが路地の家へ秋幸を連れてやって来た。涼台にフサと祖母が腰かけていた。美恵が祖母の持ってきたヨーカンを切って皿に入れ、涼台の二人にはいと渡した。小学四年ほどの秋幸は体はすでに中学生ほどあるのに、路地にもどってきても昔のように外に遊びに行こうとしなかった。生まれてからこの間まで育った家や路地が他所のように思えるらしかった。美恵はそれが嫌だった。

（三〇七頁）

と、美恵の視点から秋幸が「路地」を他所のように思っていると描かれている。一見、秋幸は「路地」と西村を否定しているように捉えられる。だがフサが繁蔵と所帯を持ったとき、秋幸は義理という垣根を取り払うため、傍若無人に無頓着に振る舞い、そしてすぐに何の抵抗もなく繁蔵を「お父ちゃん」と呼んだ。その振る舞いと同様、これは竹原の中で生きていくための秋幸の知恵だったのである。

では、このように竹原の人間になろうと努力した秋幸は竹原の人間として認められたのであろうか。西村の中心が郁男であるように、竹原にも中心となる人物が存在する。それは、竹原の家が貧困に苦しんでいた頃、自らを犠牲にして身を売り、家を守ったユキである。ユキは竹原の家の中で次のように位置付けられている。

ユキは竹原の長女だった。誰もがユキに一目おいた。ユキは竹原の一族そのものだった。自分の認める者だけが、食うものに困り暖を取るものに困った昔から成り上った今、竹原の者として居るべきだ。

（二七二頁）

ユキはことあるごとに、竹原の家そのものになった気がするのだった。ユキは仁一郎が死んだ今、自分しか竹原の家を考え、竹原の一統の成功をいのる者はない、と考えている。

（四二二頁）

このように、ユキは竹原一族から自他共に「竹原の一族そのもの」と認識されている。そのようなユキは、戦後、龍造に家を焼かれている。そのため、秋幸が龍造のように体の大きな男であり、龍造の面影があることから、

ユキから見れば、秋幸の体の大きさが竹原の家、竹原一族をおびやかすものとうつるらしかった。いや、それは秋幸の中に流れるあの男の血かもしれなかった。

（三四四頁）

と恐怖を抱くのだ。「竹原の一族そのもの」であるユキが、秋幸に対し憎みと怖れを抱いている以上、いくら努力しても秋幸が竹原の人間となることはあり得ないだろう。にも関わらず、秋幸は「繁蔵とは義理の父子なのに、繁蔵の顔を見ていると、本当の親子のような気がする。竹原という秋幸のみょう字が、生まれる前からついていた気がした。」（①）と思い、さらに「どうせおれも養子にでも行かん限り竹原じゃ」（②）と言っているように、自身は竹原の人間であると認識している。先に見た竹原の人間になろうとする努力を続けていると言ってもよい。だがその反面、ここに引いた①と②の間に

この家が嫌だ、秋幸は繁蔵の顔を見ながら思った。竹原という姓が嫌だ、竹原というまやかしが嫌だ。秋幸は一度母のフサに、死んだらどこの墓に入るつもりか確かめたことがあった。兄の郁男の骨は西村勝一郎の墓にあった。「どこでもええ」とフサは言った。

「もしおれが土方しとって事故起こって死んでも、竹原の墓だけは入らんど」秋幸は言った。

（三八九頁）

とあり、竹原の人間であることを拒絶してもいる。つまり、秋幸は竹原の家に対する肯定と否定の間で揺れ続けているのである。

ここで、秋幸が竹原と西村の家の空気をどのように感じているか確認する。秋幸には竹原の「家の温い空気が疎ましく感じ」られていた。つまり、秋幸にはそれが郁男を自死に追いやり、美恵を狂わせる原因と映っているにも関わらず、幸せに自足している家に漂う温もりが不快なのである。これに対し、西村の家の空気は「郁男が家の湿った空気のようにここにいる。死んだ者、生きた者が同居しているこの美恵の家がうっとうしく同時に秋幸を安堵させる」。西村の家に対し相反する感情を秋幸は抱いている。これは竹原の家から否定され続ける秋幸が、彼を否定しながらも肯定してくれ、母に捨てられて犠牲となった郁男の自死や美恵の精神の異常などの苦難を乗り越え、安泰な現在のみを生きているわけではない西村の家に、再び安住の地を求めたいという心理の現れである。だがそのような秋幸の想いがある一方で、郁男に捕らわれ続ける美恵は、言葉で示さなくとも、秋幸の後ろに郁男を重ねて見てしまう。より正確に言えば、「おれはまったくおれ一人だ」と考えている秋幸は、一人の自立した人間として西村に肯定されたいと願っていることになる。

最後に浜村の家であるが、この家の中心は秋幸の実父である龍造ではなく、龍造の「熱病」が作り出した架空の祖先である浜村孫一である。秋幸は子供の頃から浜村とは無関係と思おうとしながらも、「浜村という言葉を耳にし眼にするたびに体がほてる気がし」ており、どうしても意識の片隅から浜村龍造を追い払えずにいた。だが今では、

「わしの子じゃ」男はどなるように言った。「二人共（秋幸とさと子：論者注）わしの子じゃ」

その時、秋幸は随分昔からその言葉を聴きたいと待っていた気がした。あのアキユキと呼ばれた時からだった。

（三六一・二頁）

とあるように、むしろ自分の子であると龍造に認めてもらいたいと思うまで、秋幸の意識は変化しているのである。そして同時に、秋幸の龍造に対する肯定の感情も芽生えたのだ。だがやはり、

確かにおまえの子だ、おまえからこの胸も眼も歯も性器も半分ほどもらった、だがその半分が嫌だ。

（三六二頁）

その男が、自分の半分を作ったことが秋幸には耐え難かった。もし男の言うようにその孫一の伝説が本当だとしても、男が有馬の土地に石碑を建て、血が永久に滅びることなくかつて何代も伝わったようにこれからも何代も続くように祈るのなら、秋幸はすすんで滅ぼしたい。（中略）「浜村孫一が聞いてあきれる、おまえのやる事は明日食う米を思案する貧乏人を痛めつける事と一緒じゃ」秋幸は言った。一切すべて否定したかった。

（四四九・四五〇頁）

などとあるように、秋幸には自身に流れる龍造の血をどうしても受け入れられない感情も残っている。つまり、実父として龍造を受け入れ、浜村に認められたい思いと、弱者を痛めつける龍造を否定し、浜村を拒絶したい感情の間で揺れ続けているのだ。

これらから、秋幸は三つの家に対し肯定と否定の感情の間で揺れ動き、どの家にも属しきれない不安定な存在だと言える。そして、不安定な存在であることは、秋幸が郁男のように自殺することも、美恵のように気がふれることもなければ、文昭のように骨折するまで怒られることもない、「無傷」にしかなれないことを同時に意味している。傷を負った三者は全て純粋な血の流れを持った人間、つまり、家から認められた人間であり、家の中では安定した位置にいられる存在だったからである。対して、三つの家それぞれの強い親和の力によって、三つの家の間で宙づりになるしかない秋幸は不安定な存在だ。そのような秋幸が出した結論は、

竹原秋幸、その名前が嫌だ。竹原フサ、その名が嫌だ。秋幸は背に広がった鳥肌と不快感が何故なのか分からないまま思った。浜村秋幸、その名も嫌だった。（中略）言ってみれば秋幸はその路地が孕み、路地が産んだ子供も同然のまま育った。秋幸に父親はな

かった。秋幸はフサの私生児ではなく路地の私生児だった。私生児には父も母も、きょうだい一切はない、そう秋幸は思った。

（四四六頁）

秋幸は川原に立ち、男を見ながら、その路地に対する愛しさが、胸いっぱいに広がるのを知った。長い事、その気持ちに気づかなかった、と秋幸は思った。竹原でも、西村でもない、まして浜村秋幸ではない、路地の秋幸だった。

（四五一頁）

と、三つの家全てを否定することである。秋幸の一番身近にいるフサや美恵が龍造の子であることを認めない以上、自身の出自を受け入れられないからだ。そのため、自身を肯定してくれる場として誰をも受け入れる「路地」を見出し、「路地の私生児」や「路地の秋幸」となることを選んだのである。

三、秋幸に流れる浜村の血と暴力性

「路地」という自らの出自を見出した秋幸は暴力性を開花させる。この変化は作品の冒頭から「大きなものが見ている気がした。形を現わさないものだった。いつか必ず形をあらわすと思った。」と予言されていた。「大きなもの」とは、「秋幸の半分が顔をあらわしはじめているのだった。いつかその半分ほどの暗闇は光にさらされ、二十六歳の秋幸という体の中に閉じこめられたものがあばかれる。」とあるように、龍造と対峙したことで明確に意識された秋幸の半分を流れる龍造の血であろう。秋幸は自身のダンプカーを囲むようにして停められたオートバイをダンプカーで踏み潰し、さらにそれらの持ち主を轢き殺そうとするほどの暴力性を露呈させる。暴力性を開花させた秋幸は恋人・紀子から「ヌーッとしたにおい」がしなくなったと言われたように、行動だけではなく体臭までもが変化した。「ヌーッとしたにおい」の源こそ、秋幸が抑え殺していた暴力性であり、それを発現＝解放することで、その体臭が消えたのである。秋幸の変化は紀子との性行為の場面でも現れている。暴力性を開花させる前は、

「藤田」の女は乳首を噛め、噛み切ってくれと言った。痣が出来るほど乳房を摑んでくれと言い、実際赤い痣が太股の内側、乳房に出来た。秋幸は自分が本当に一頭の獣である気がした。獣となって凌辱した。だがこの女（紀子：論者注）は違った。秋幸は自分のごつごつした体がいやで、紀子と寝るたびに紀子を苦しめていると思った。

（三〇四頁）

とあるように、龍造の一部分を知るために彼が囲っていると噂されている「藤田」の女との行為では、女に言われるがまま激しく性交を行っているが、紀子との性交においては紀子の苦痛を慮っている。だが、暴力性を開花させた後には、

いつもモーテルや旅館で紀子は秋幸の性器が紀子の体の中に入ろうとする度に、足をいっぱいにひらき、腰を上げても、「痛い」と言った。その度に秋幸は、一時、その紀子の痛みが治まるのを待って、深くまた入れようとする。紀子の性器が秋幸の性器におし広げられ、それでも柔らかく優しく包んでいる。いつもそれが好きだった。乱暴すると壊れてしまう。だが今は違った。壊したかった。痛みを与えたかった。

（四二九頁）

と、秋幸は紀子に痛みを与え、壊したいと思い、乱暴な性交を行うようになる。それは「ケダモン」の正体が、異母妹と近親相姦を実行した、今、まさに目の前にいる秋幸自身だと紀子に証明したかったからだろう。さらに秋幸は、龍造が実際には行っていない近親相姦を行ったことで、龍造を越えたと考えているのではないだろうか。しかし、龍造と対等の立場に立つ資格を得たはずだった秋幸は、龍造から新たな試練を与えられる。龍造は「女というもんは寝るだけのもんじゃ」と秋幸に言い放ち、たとえ「ケダモン」となったとしても、秋幸が龍造を越えるのはおろか対等の立場に立つことすらできないと見せつけたのである。これによって秋幸は、次にあるように、これまでは女に振り廻されていたことに気が付く。秋幸が、男のみで繋がる浜村孫一の物語を受け容れようと想い始めた証左で

あろう。

女は何故魅くのだろう。美恵は、郁男が死んだ時、泣いた。秋幸は家の掘りごたつの中に足をつっ込み朝飯を食いながら、路地の家の柿の木でくびれて死んだときいて、その時「ざまをみろ」と思った。郁男に勝ったと思ったのだった。美恵が狂い、さと子の事があった今、秋幸は、女である姉の美恵の力に振り廻されていた、と思った。

秋幸は持っていたスコップをいきなり型板にたたきつけた。型板は割れた。どなりつけてほしい。殴り倒してほしい。そう思った。そうすれば自分が、浜村龍造の子であり、浜村龍造と同じように熱病を患い、祖父があり、曾祖父があり、はるか先に浜村孫一がいるという架空の物語を信じ、秋幸の半分の謎が明らかにされる。何もかもから自由になる。

（三九三・四頁）

大事に手入れしてきたスコップや型板などの土方の道具を乱暴に扱う行為は、これまで母たちの望むように振る舞ってきた大人しい秋幸という殻を破ることを意味する。この変化は、浜村家を意識し過ぎたがために暴力性を持つ浜村の血が秋幸の中で漲り始めたため生じたと言えよう。さらに、殴り倒されたいと望んでいる。殴り倒されるとは、自身に流れる浜村の暴力性を含んだ血を自他共に認めることであり、浜村の家の親和に入れるようになり「無傷」でもなくなると、秋幸は考えたのではないだろうか。浜村の家に入ってしまえば、宙づりの不安定な立場を強いてきた「家」を含め、秋幸は「何もかもから自由にな」れるのである。

なぜ、秋幸は浜村家を意識してしまうのか。その原因は、龍造について見聞きしても意識されなかった体内に詰まる湿った黒い体液の存在に、五郎と秀雄の諍いによって気付かされたからだと考えられる。この黒い湿った体液とは龍造から受け継いだものである。なぜなら、龍造が建てた浜村孫一の石碑を見て「石碑は男の濁った血が廻って出来たように黒かった」と感じているように、龍造の血は「黒」いと秋幸が認識しているからだ。この体内に徐々に詰まっていく黒い湿った体液を浄化する作業が土方である。秋幸にとって土方は、五郎と秀雄の諍いが起こるまでは、安定した日常の一場面として秋幸を風景の一部とし、安心をもたらす営為であった。だが、諍いによって龍造と接近しなくてはならなくなってからは、秋幸の体内に詰まった体液を浄化する作業へと変化していく。これは、秋

幸が浜村孫一の石碑を見た後、海に入り、その一部になりながら体の中を浄めたいと思っていることからも言えよう。風景の一部となり土方作業をしている時、秋幸は自瀆している感覚を憶え、快楽を味わう。自瀆とは、快楽を味わうだけでなく、同時に龍造から受け継いだ精液を体外に排出する行為でもある。だからこそ、秋幸は土方作業が出来ない時は紀子と性交を行うのである。

四、特別な女性「紀子」

その紀子を中上が作中に描いた意図を見ていく。「紀子」という名前について考えていくと「紀子」が特別な名前であることがわかる。例えば、「紀」は中上が生涯意識し続けた「紀州」を顕し、また子供の命名（中上紀）や妻のペンネーム（紀和鏡）を考えた際に使われた文字である。にも関わらず、他の中上作品において「紀」という字を当てられた登場人物はいないのだ。したがって、「紀子」という名前の名づけには特別な意味合いが込められているに違いない。「紀子」の名について、柴田勝二は、秋幸の労働と秋幸の紀子との川原での暴力的な性行為の場面を挙げ、

> 秋幸の土に対する行為がやはり親和であると同時に侵犯であることが示唆されることになる。この両義性は『岬』の秋幸においては明確ではなかったものであり、『枯木灘』に至って、土との交わりを自己の居場所とする孤独な青年から、自身の生まれ育った紀伊熊野の自然、風土を愛しつつ侵犯する行為の主体への移行を、秋幸は遂げることになる。それを強調するように、秋幸が愛しつつ荒々しく犯す相手は、その土地を端的に象徴する「紀子」という名前を付与され、彼女が「声をあげ」る様は「日を受けて色が変わる竹藪が声をあげ」るという、自然の擬人化によって語られているのである。[6]（傍点、原著）

と述べている。また秋山公男は、秋幸が土方作業の中で風景に染められることを血の浄化と意味づけており、秋幸にとって紀子の存在は風景と同一の位相にあるといってよいとし、「紀子の「紀」は紀州の「紀」、すなわちその地の「風景」の寓喩と解される[7]」としてい

る。確かに、中上は「紀州」を意識していただろう。だが、『枯木灘』において龍造が遠つ祖とした浜村孫一の石碑が建っている地が有馬であることを忘れてはならない。『日本書紀』には、「伊弉冉尊、火神を生みたまふ時に、灼かれて神退去ります。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗、此の神に魂を祭るには、花の時には亦花を以ちて、祭る。又鼓・吹・幡旗を用ちて、歌舞ひて祭る。」と花窟神社で行われる祭事が記されていることから、イザナミは花の窟に祀られているのである。[8] このように神聖な地であり、且つ孫一の石碑が建っている有馬を本作では次のように説明している。

山は架空の物語に出てくる山だった。石碑のあるその寺にむかってだだっぴろく山裾に広がるみかん畑も架空の土地だった。その山、その土地は、大きな体の蛇の眼をしたその男、蠅の王浜村龍造の熱病がつくり出す架空の物語の場所だった。火の神を産み、女陰が焼けて死んだ伊邪那美命を葬った窟は車で五分たらずのところにある。

（三七二頁）

敢えて、イザナミを葬った花の窟の説明を書き加えることによって、中上が『日本書紀』を意識していたことがわかる。よって、「紀子」の〝紀〟は「紀州」はもちろんのこと、『日本書紀』の意味も含蓄しているのである。

また、花の窟は「舟に乗り海から見ると女陰そのものに見えると言われた」とあることから、花の窟は女性器の象徴と言える。そして、この対になるものが龍造が建てた浜村孫一の石碑だ。

石碑は男の濁った血が廻って出来たように黒かった。触るとざらざらした。この血が秋幸の中にも流れている。それは熱風のように突然、路地にあらわれフサの家に身を寄せ、三人の女を同時に孕ませた男の勃起した性器だった。

（三七一頁）

このように、孫一の石碑は男性器を象徴している。さらに、この孫一の石碑に龍造の血が廻っているようだと感じているため、この石碑に感じる血は秋幸の血でもあるのだ。よって、孫一の石碑を秋幸の男根と考えると、花の窟は紀子の女陰となる。

龍造は孫一の石碑を建てた有馬の地を手に入れている。実は、龍造は孫一の血で繋がった者の〝共同体〟を創ろうとしていたのだ。こう考えると、「紀子」という神話に由来する名の女性を秋幸の恋人として登場させた意図が一層際立つ。龍造は自らの領土である有馬の地で、孫一の国を創造＝国生みを果たそうとしているのである。そして、「浜村孫一の眼に守られて在る」と思っている秋幸も、自身のルーツを浜村孫一と認め、龍造の国作りに賛同したのだ。秋幸に繰り返し試練が与えられ、それを乗り越え成長すると、その成長に見合った試練が次々と与えられる〈秋幸サーガ〉全体の構造を見ると、ここにも神話における英雄譚と同じ構造を見て取れる。「紀子」を登場させることで、「紀州」と神話世界が〈秋幸サーガ〉に組み込まれ、同様の神話構造が『枯木灘』の物語を作動させていることを中上は示したのである。

五、秋幸の死と再生

ふと、秋幸は、自分がその男、蠅の王浜村龍造の子であるなら、自分の遠つ祖もその浜村孫一であることに気づいた。それは天啓のようなものだった。男を嘆かせ苦しめるには、男の子である秋幸が、浜村孫一とは何の血のつながりもないと立証するか、敗走してこの熊野の里へ降りて来たという伝説を、作り話としてあばくことだ。いや、浜村孫一を男の手から秋幸が取り上げることだ。秋幸は想った。一切合財、おまえの言うことを認める。だが、おまえではなく、この俺こそが浜村孫一の直系であり、浜村孫一であり、浜村孫一の眼に守られて在る。

（三七三頁）

浜村家の親和の中に身を置こうとする秋幸は、龍造から孫一を奪おうと志す。龍造も秋幸も共に孫一の直系であるが、家という単位に

こだわっている限り、浜村家の正式な家族ではない秋幸は、龍造の血の流れを持っていても浜村家の直系にはなれない。その家という空間を秋幸に改めて意識させる場が精霊送りであった。それは、浜村だけではなく西村にも竹原にも当てはまる。

西村の家では兄の精霊送りだけではなく、秋幸にとっては血の繋がりを持たない姉たちの父の精霊送りをしなくてはならない。姉たちのもとで嗅いだ「線香のにおいが息苦しいほどだった」ように、立ち入ることのできない彼女らの親和的空間に秋幸は息苦しさを憶えたのだろう。また、西村の家の精霊送りのみをすればよい姉たちに対し、竹原と西村を行き来しなくてはならない秋幸は、自身の立場の不安定さをより一層強く認識したはずだ。その上、竹原の輪の後ろに母親と共に立つ徹を、秋幸は「自分によく似た立場」と思っているが、その彼は正妻の息子と共に精霊舟の準備を任されており、正統な竹原の血を継ぐ者として認められている。この精霊送りを行う空間には、本来ならば秋幸が属しきれる浜村家がごく近くにおり、秋幸は血縁と家の複雑さから逃れられない運命を改めて意識し、息苦しさを感じたのであろう。この場で「竹原秋幸、その名前が嫌だ」「浜村秋幸、その名も嫌だった」と思うように、この二つの家に属すことを嫌った。また、母に背中を叩かれ、鳥肌が立ち不快感を抱いたことからも、母の私生児であることを無意識裡に拒絶してしまい、「父も母も、きょうだい一切はない」「路地の私生児」だと思うのだ。すなわち、秋幸は精霊送りでのそれぞれの家の親和的空間から一人疎外された想いを抱いたことによって、血縁と家からの解放を強く願ったのである。

だが、秋幸は龍造に呼ばれ「顔が上気」しつつも「兄やん」と呼ぶ声に誘われるかのように浜村家のもとに歩み寄ってしまった。この場で秋幸はこれまで想像もしなかった龍造たち浜村の家族の親和のありようを見せつけられる。したがって、この精霊送りは、三つの家の間に宙づりになっている不安定な存在であることを改めて秋幸に意識させる場面だったのである。ここで龍造の一切を否定するように彼の悪事を言い募ることによって、秋幸は「路地」への愛しさを思い出し、「竹原でも、西村でもない、まして浜村秋幸ではない、路地の秋幸だった」と「路地の秋幸」となることで家の概念から解放されたのである。しかし、秋幸と龍造の会話を聞いていた秀雄に「おまえ、おまえと親にむかって言いくさって」と言われたことにより、龍造を「親」と呼べる親和が満ちた家の存在を秋幸は突き付けられ、同時に秀雄に対する殺意を芽生えさせた。浜村家の親和が満ちた空間は、郁男にとってのフサ・秋幸・繁蔵・文昭から成る家に等しい。つまり、秋幸も郁男も親和が満ちた空間から疎外された人物として、自らが疎外されていることを思い知らされた相手に殺意を抱いたのである。だが、秋幸は秀雄を殺すことが出来たが、郁男は秋幸とフサを殺せなかった。秋幸には龍造から受け継いだ汚れ

た血が流れているのに対し、龍造の血が流れていない郁男は純粋で無垢だったからである。人を殺せる血を持っていなかった郁男は自ら命を絶つしかなく、秋幸は黒い湿った体液の宿命ゆえに殺人を実行できたのである。秋幸は秀雄を殺害した後、山へと逃亡し、そこで脚を怪我する。この山への逃亡は龍造が遠つ祖としている浜村孫一が片眼片脚になりながら敗走した経緯を想起させる。この時、初め新宮から別の土地へ逃げようとした秋幸は、いてもたってもいられぬ思いにかられて、山へ駆け込んでいる。実は、秋幸は無意識の裡に孫一を〈反復〉していたわけだ。

次に秋幸が怪我をし、血を流す描写を見ていく。

秋幸は、路地を思い出した。美恵が路地から離れられないように、秋幸もその路地から離れられない。だが、血は流れた。自分が一体何なのか、と思った。竹原秋幸でも、まして西村秋幸でもない。

（四六〇頁）

秋幸は「路地」を思いながら血を流すのであるが、ここで不自然な「だが」という逆接の接続詞が使われていることに注目しなくてはならない。この表現は、一度自身を受け入れる場として「路地」を見出したことを錯覚として否定するためのものである。「路地」から離れられないはずだった「路地の秋幸」の血が流れ出て行く意味は、これまでの秋幸を形作ってきた血、この時までの秋幸という存在そのものの否定に他ならない。言わば、これまでの秋幸はここで消え去った。この場面ではこれまでの秋幸の象徴的な死が描かれ、同時に自身のこれまでの拠り所も消滅し、「自分が一体何なのか」と自身を見失う。しかし同時に、秋幸は三つの家の間に宙づりにされる不安から解放され、さらに、血のしがらみからも抜け出すことができたはずだ。そして一旦空洞となった自身の中に孫一を迎え入れ、孫一として浜村家の血を背負い、山から下りることとなる。この時の秋幸は物語（＝神話）を経巡って一回り成長し、龍造に対峙できる男へと生まれ変わっていた。『枯木灘』の試練はかくして乗り越えられたのである。

おわりに

自身がどの家の人間でもなく、「路地の秋幸」または「路地の私生児」だと気がついた時、秋幸は自分の居るべき場は「路地」と思ったのであろう。にも関わらず、秀雄殺しの後に秋幸は山へ逃げる。紀子と会えなくなった以上、秋幸は花の窟に象徴される自然の中、この局面では山でしか、不安から逃れることができないからだ。さらに、潜在的な記憶としての戦に敗れ山中を敗走した孫一の姿も、無意識の裡に秋幸に山への逃亡を促していよう。逃亡の途中、秋幸は怪我をし血を流す。この血は、母系の血と龍造から受け継いだ汚れた血、そして「路地」の血であった。これら秋幸を形作っていた血の流出は、この時までの秋幸の象徴的な死を意味しているのだ。こうして一度死んだ秋幸は、浜村孫一となって生まれ変わり、三つの家の間に宙づりにされている不安からも解放された。この構造が意味するように、『枯木灘』は死と再生の物語（＝神話）だったのである。秋幸逮捕後、「路地」や町内では秋幸に関する噂が流れた。それは、秋幸を一回りも二回りも大きな存在と見立てた噂であった。すなわち、「路地」で噂されていた龍造の〈反復〉である。そのような秋幸は、龍造の幻影の中に龍造と共に「路地」を地上げしている姿となって現れる。それは、再生した秋幸が龍造と正面から対峙できる力を獲得していることを示唆し、その生まれ変わった秋幸が現実に龍造のもとへ赴いたとき、『地の果て　至上の時』の物語が始動するのである。

注

（1）中上は、小説における一定のコードや文体の存在を一九七六（昭和五十一）年に行った小川国夫との対談『暴力、ディオニソス、語り』（「文藝」二月）で語り、同年二月十六日の「日本読書新聞」に掲載された『小説の新しさとは何か』でも触れている。さらに、その詳細を後年、『物語の系譜　佐藤春夫』（「国文学　解釈と教材の研究」一九七九（昭和五十四）年二月）の中で、

物語の骨法、ここでは、いまひとつ顕らかにされるべき法則、制度である。物語が、プロローグからエピローグに向かって流れる法則や制度がある事は、物語の祖の時代から自明の事である。序、破、急。起、承、転、結。いかなる物語も、この法則や制度をまぬがれる事はあり得ない。現存するどんな法や制度下にいる人間より、書かれてある小説、私がこの三十二の齢まで幾

つも書き創った小説の登場人物らは、物語の法や制度の恐怖政治の下にいる。　（15、一二七頁）

と記した。

（2）秋幸の〈反復〉行動については既に多くの指摘がなされている。それらの中でも渡部直己は「真近さについて」（『中上健次論』河出書房新社、一九九六（平成八）年）の中で、秋幸の〈反復〉行動を「おのれの〈いま・ここ〉を犯す「余計なもの」への反撥から、逆に郁男の「物語」を成就し、龍造の「物語」のひとつを無自覚に反復」していると論じている。また、四方田犬彦も「貴種の終焉」（『貴種と転生』新潮社、一九九六（平成八）年）において「郁男が中絶した物語を完成したかたちで反復し」、「父親の物語を唾棄しつつ、最終的にはそれを無自覚的に反復してしまう」と論じており、両者とも〈反復〉により郁男を越え、また龍造の行動を無自覚に〈反復〉していると指摘する。さらに長野秀樹は「「枯木灘」論　物語への接近と拒絶」（「国文学　解釈と教材の研究」一九八八（昭和六十三）年八月）において、秋幸だけではなく秋幸の姪の美智子や秋幸の従弟となる洋一らも他者の行動を〈反復〉していると述べ、『枯木灘』を「他者の〈物語〉を反復する者達の物語」と定義している。

（3）日高昭二は「『枯木灘』から『地の果て　至上の時』へ――「風景」と「資本」の物語」（「国文学　解釈と教材の研究」一九九一（平成三）年十二月）の中で、秋幸とさと子の近親相姦を「兄・郁男と姉・美恵の無意識の相姦が重なっていた」と論じている。また、菊田均も「溶解する「私」――中上健次『枯木灘』」（「文藝」一九八一（昭和五十六）年六月）において、この近親相姦が美恵と郁男の同居生活の〈反復〉であり、それだけでなく、「路地」に噂された郁男と美恵の関係自体が「きょうだい心中」の〈反復〉であると指摘している。

（4）石原千秋『枯木灘』（「国文学　解釈と鑑賞」・別冊、一九九三（平成五）年九月）

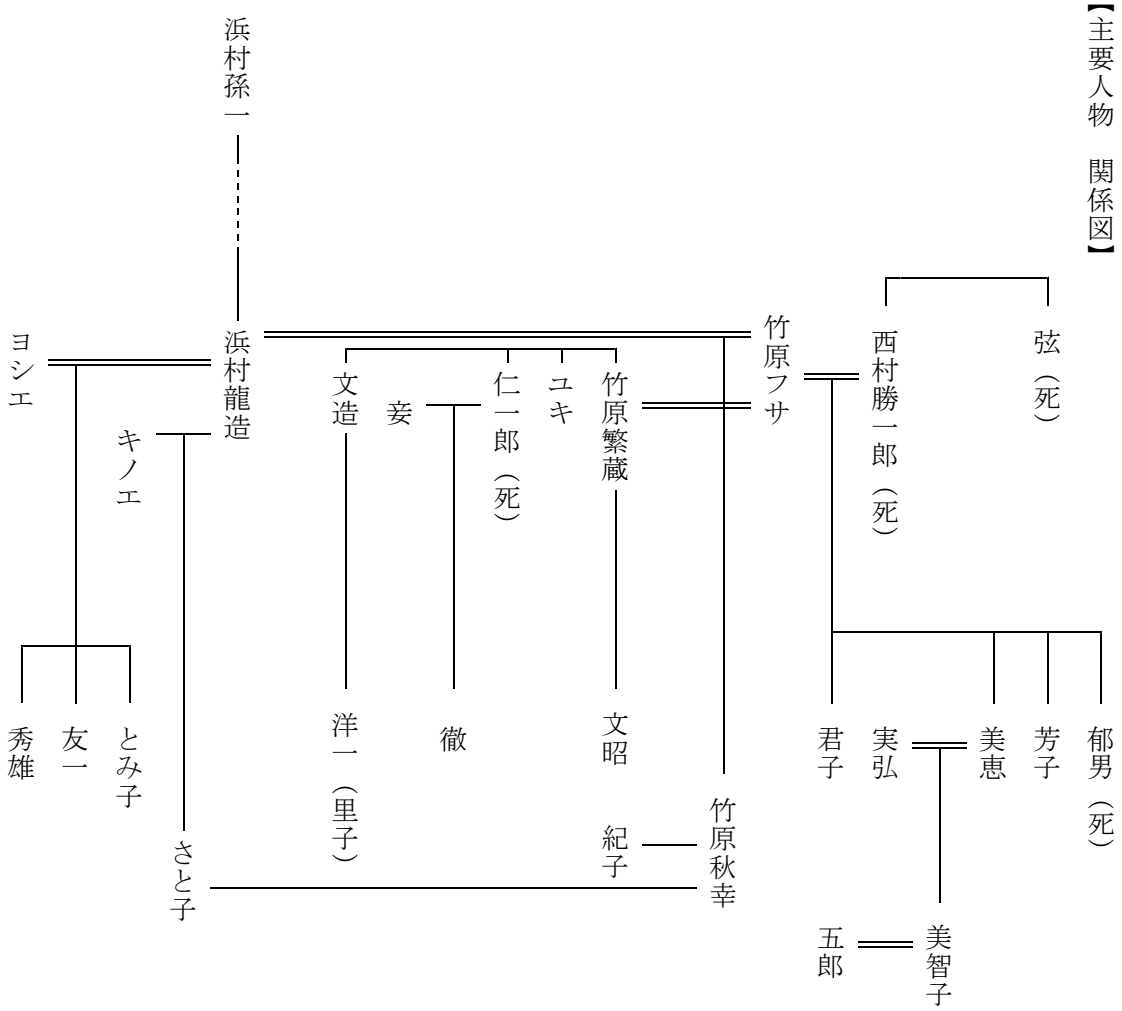
（5）前掲（3）同書

（6）柴田勝二「重層する現代と古代――『枯木灘』の時空」（「東京外国語大学論集」二〇〇七（平成十九）年）

（7）秋山公男「『枯木灘』――深層心理と性」（「愛知大学文学論集」二〇〇五（平成十七）年）

（8）『古事記』ではイザナミは「出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき」と記されている。

【主要人物　関係図】


浜村孫一
ヨシエ
浜村龍造
竹原フサ
西村勝一郎（死）
弦（死）
文造
妾
仁一郎（死）
ユキ
竹原繁蔵
キノエ
秀雄
友一
とみ子
さと子
洋一（里子）
徹
文昭
紀子
竹原秋幸
君子
実弘
美恵
芳子
郁男（死）
五郎
美智子

第三章―二節　『枯木灘』論―土方作業から見る秋幸の暴力性の開花―

はじめに

『枯木灘』では竹原秋幸が土方作業を行う様子が繰り返し描かれる。次の引用部に見られるように、土方作業は人智を越えた作業であり、何よりも貴い聖職だと秋幸は認識している。

（略）人間の手におえない土にむかって秋幸ら土方が祈りをあげている気がした。汗は祈りのために流す。祈りがないと秩序は乱れ、土は動き、水はあふれる。そこに何が建とうと、何の為にその工事がなされようと、土に最初に触れるのは土方以外になかった。秋幸は十九歳で土方をはじめてそう考え、今もそう考えた。祈りながら働き、働き終えて祈りをささげるのではなく、何も考えずに型板を図面通りにつくり、何ひとつ祈りも感謝の言葉も考えず風景に身を染める。

（三八一・二頁）

秋幸が土方作業に求め、また生じた感覚を『岬』と『枯木灘』とで比較すると、『岬』では土方作業に従事して感じ得た認識を、加えた力の分だけ動くその単純さや正直さに好感を得、ここちよさを感じると描いていた。対して『枯木灘』では、ここちよさだけではなく、自然との同化によって内面に溜まった澱が浄化される感覚を抱く秋幸の意識の深層部を描くように変化している。

『岬』では噂の中の人物に過ぎなかった龍造が、『枯木灘』では異母弟・秀雄と姪の夫・五郎の傷害事件によって、秋幸の眼前に現れる。この意図せぬ龍造の接近によって、秋幸と龍造が保っていた均衡は破れ、秋幸の心理状態は揺れ動き続ける。この秋幸と龍造の関係性の変化や、秋幸の龍造に対する認識の変化は、土方作業に従事する際の秋幸の姿勢に反映される。だが、落ち着かない心理の変化を秋幸が母や姉の前で見せることはない。したがって、土方作業は秋幸の感情の動きを見る指標と言えよう。

前節では秋幸が、母系の西村の家、義父の竹原の家、そして実父の浜村の家のいずれにも属しきることができず、宙づり状態にあることから生じた不安を抱えていることを確認した。そこで本節では、秋幸の周囲に起こる出来事との関連性を踏まえつつ、土方作業に従事することで秋幸の不安が浄化されていく有り様を確認し、秋幸にとっての土方作業の持つ意味を明らかにする。その上で、彼の周囲で起こる出来事が彼に与えた影響を土方作業における秋幸の変化から読み解く。

一、秋幸にとっての土方作業

秋幸にとって土方作業はどのような意味を持っているのであろうか。兄・郁男が諌めるように死んだ十二歳の時から、秋幸は彼を殺したと思うと同時に、自身の成長する体におびえた。その体は龍造に似て骨格が太く、地下足袋をはく足を見てもそれらは「獣のものであって到底人間のものとは思えな」い「人殺しの体」である。その「人殺しの体」の扱い方として次のように描写している。

秋幸は働いた。日を受け、風を受けた。それが二十六の秋幸のする事だった。どんな現場でもよかった。冬の日、胸までつかって浜そばで下水道に流れ込む掘り割の底を洗った事もあった。歯の根が合わなかった。繁蔵が文昭に組をゆずってから秋幸は現場監督として働いた。夜、地下水を汲み出すポンプを見に行った。ポンプは廻っていなかった。打ったばかりのコンクリに水が入りかかっていた。冬のさなか、バケツでかき出した。夏は暑すぎた。汗が吹き出た。

秋幸は土方を好きだった。日と共に働き、日と共に働きを止める。一日、土を掘り、すくい、石垣を積み、コンクリを打った。土を掘りすくっても、物が育ち稔るわけではなかった。石垣を積み、側溝をつくり、コンクリを打って、自分が使うのではなかった。人には役立っても秋幸には徒労だった。だがその徒労がこころよかった。組の現場監督の秋幸は銭勘定ではなく、日を相手に働くその事だけでよかった。

（四五九頁）

「人殺しの体」に漲る力を鎮めるように、秋幸は自然に身を委ね土方作業に従事していると言えよう。土方作業は物が稔るわけでもなく、土方で作っている物を自分が使うわけでもないため、労働を徒労と秋幸は思っている。だが一方で、その徒労をこころよいとも感じており、土方作業はこころよさを得るための手段である。その上、「自分が考えることも判断することもいらない力を入れて掘りすくう動く体になっているのを感じた」ように、土方に従事しているとき秋幸は何も考えない状態となっている。土方作業は労働そのもの

だけではなく、それを行う場も秋幸に影響をもたらす。物語冒頭部での土方現場に向かう場面では、川を見た秋幸が「明るく青い水が自分のひらいた二つの眼から血管に流れ込み、自分の体が明るく青く染まっていく」感覚を抱いており、風景に同化することによって秋幸は浄化されていく。秋幸にとって土方作業とは、加える力に正直に応えてくれる自然の中に身を置ける上に、複雑なしがらみが存在する生活空間から切り離され、そこで生じる葛藤から自身を解放させる手段と言えるのだ。

しかし、柄谷行人は秋幸の土方作業と資本主義を関連づけて次のように述べる。

> 主人公秋幸は、一介の土方にすぎないにもかかわらず、ギリシャ悲劇的な人物になっている。逆にいえば、ギリシャ悲劇的人物であるにもかかわらず、秋幸は、土建業という資本主義的構造のなかにいる。[1]

柄谷の言葉を借りれば、ギリシャ悲劇的人物、つまり高貴な人物である秋幸が資本主義構造の中に置かれているということだ。また68頁に引用した本文を用いて柄谷は以下のように論じている。

> 『枯木灘』の世界は、明瞭に資本制の産業構造の中におかれている。右の引用からも明らかなように、秋幸の労働もまた、たんなる反復ではなく、交換価値のための労働に対するプロテストとしての反復なのである。それは基底的であるとしても、始元的なのではない。つまり、秋幸の労働（自然との関係）は資本制の「関係」のなかにしかありえないのである。[2]

土方作業の描写の反復が資本主義に対するプロテストと言うことだ。これらから、柄谷が資本主義の中に秋幸の労働が置かれていることの矛盾に固執していると言える。しかし時代状況に鑑みて、秋幸の労働を資本主義と切り離すことは不可能であり、秋幸の労働は「資本制の産業構造の中」に置かざるを得ない。にも関わらず、この論に対する批判は見受けられない。これに対する批判がないということは、柄谷の論に対し疑問を呈することなく読み継がれてきたということだろう。

必ずしも金銭が労働の対価である必要はない。土方作業によって徒労のこころよさを味わっているため、金銭ではなく心の平穏とい

う対価を秋幸は得ていると読むべきだ。なぜなら、既に論じてきたように、秋幸が生活空間から切り離された土方現場という空間の中で作業に従事することによって、血縁や家のしがらみから解放されていると考えられるからだ。

秋幸は日を受けて風に色が変る山の現場の景色を見たかった。水に撥ねる光に眼を眩ませたい。秋幸の体がその快楽を覚えていた。

（中略）土の色は秋幸を洗った。

（三〇二頁）

このように秋幸の土方作業は資本主義構造の範疇を越えて、「土の色は秋幸を洗」い、「風は秋幸を浄め」るように、風景に自身を染まらせ＝同化させ、血縁や家のしがらみから発生する不安を浄化させる作用を担っていると考えられる。つまり、秋幸の労働の目的は内面の浄化であり、金銭を得るための労働の範疇の外側に位置しているのだ。そして土方作業の反復は、秋幸の幼少期を彷彿とさせる義父の弟の里子・洋一の存在や否応なしに聞こえてくる龍造の噂などに触れてしまう生活空間に戻るたびに内面に生じる澱を浄化しようとしてのことであり、「交換価値のための労働に対するプロテスト」ではない。よって、秋幸の労働を理解するには、資本主義と切り離して読み解かなくてはならないのである。

二、「染まる」＝主体の放棄

秋幸が土方作業に従事する姿の描写を確認する。

日のはじまりと共に働き、日の終りと共に土を相手に体を動かすのをやめる。日に照らされ、光に染められ、季節の景色に染められ、秋幸は自分が一切合財なくなり自由になる気がする。

（二六一頁）

秋幸はまた自分の体が、光を受けた山や川の景色に染まり始めていると感じた。それが快かった。安心できた。（二六五頁）

働き出して日がやっと自分の体を染めるのを秋幸は感じた。（二八二頁）

秋幸は日に染まり、汗をかき、つるはしをふるいながら、耳に蟬の声を聴いた。（三三九頁）

日は秋幸を風景の中の、動く一本の木と同じように染めた。（中略）秋幸は土方をやりながら、自分が考えることも知ることもない、見ることも口をきくことも音楽を聴くこともないものになるのがわかった。いま、つるはしにすぎなかった。（三四一頁）

シャベルで土をすくい、それを掘った側溝の穴から外に出す。秋幸は日に染まり、山の風景に染まり、今、単に、動く道具だった。（中略）秋幸のがらんどうになった体の中に蟬の声が響いていた。（三六三・四頁）

ここに挙げた秋幸が土方作業を行う場面は一例に過ぎない。だが、これらを見ると「染まる」ということばが頻出していることに気づく。では、この「染まる」とはどのような状態を指し、またいかなる意味が込められているのだろうか。

「一本の木と同じように染めた」などの描写から、風景に「染まる」[3]、つまり風景の一部に同化すると換言できる。秋幸を「一本の草、一枚の葉」などの自然や「つるはし」などの土方道具に喩えることで、この時、秋幸が「考えることも知ることもない」主体なき存在になっていると言えるだろう。主体なき存在である秋幸の内面はがらんどうとなり「自分が一切合財なくなり自由になる気がする」ように、「複雑な血のつながりの中」から秋幸を解き放つ[4]。

さらに、「土方をやっている秋幸には、昔のことなど何もなかった。今、働く」というように、秋幸は過去や血縁などの一切のものから切り離され、今ここに在る自身の存在を確認するために土方作業に従事していると捉えられる。よって、ここからも秋幸の土方作業

の目的が賃金を得るためではないと言えるのだ。

血縁や家のしがらみから切り離されたいと願っているにも関わらず、秋幸は殺人を犯そうとした兄や、子を身籠もらせた後に逮捕された実父・浜村龍造の行動をなぞってしまう。それは、秋幸が母や姉のことばによって生じた呪縛から今も逃れられていない証拠だ。母や姉がおり、龍造の噂が蔓延し、さらに子供時代の秋幸を想起させる義父の末弟の里子を預かっている生活空間は、秋幸にとって血縁や家のしがらみから不安や葛藤を強く意識させる場である。土方作業において浄化されてもこのような生活空間に戻ることによって不安は再び生じてしまう。そのため、不安を浄化し、「考えることも、識ることもない」主体を持たない状態になるために土方作業を反復しなくてはならないのだ。換言するならば、土方作業は秋幸が置かれている血縁と家という複雑なしがらみからの積極的な逃避と言えよう。

三、「ふと」思う秋幸の変化

本作には「ふと」思う秋幸の描写が頻出する。土方作業中には「ふと」思う描写が六カ所あるのだが、この「ふと」思う内容も、土方作業に向かう姿勢と同様に龍造との関係性の変化の中で移り変わる。

秋幸は龍造に関する噂と彼の視線から龍造を感じていたが、秋幸の異母弟・秀雄と秋幸の姪の夫・五郎の傷害事件を発端に龍造との距離が接近し、秋幸は主体のない状態となれない状況に置かれてしまう。

> 秋幸はいきなり、自分が無意識のうちに避けてきたもの、母や母の子の兄や姉たち三人、義父や義父の子の文昭が、秋幸がそれ（龍造：論者注）に向きあうことを回避させてきたことが、ついにいま眼の前にやって来たことを知った。
>
> （二八八頁）

龍造らとの間に保ち続けていた距離が崩れたことで、心の平衡状態が乱れてしまった「秋幸は日を受けて風に色が変る山の現場の景色

を見たかった」と山中[5]での土方作業を求める。

日が当り、土方装束を身にまとい、地下足袋に足をつっ込んで働く秋幸の見るもの、耳にするものが、秋幸を洗った。（中略）風は秋幸を浄めた。

（三〇五・六頁）

傷害事件の翌日も、このように土方作業を行いながら風景に染まり、体内ががらんどうになった感覚を抱くことで心の乱れを浄化している。だが秋幸の土方作業に従事する姿勢には変化が生じる。傷害事件前には土方現場で秋幸が「ふと」思う場面が二カ所ある。一カ所は休憩中に文昭と会話をしている場面であり、厳密には土方作業中に「ふと」思ったとは言いがたい。その内容は、家出した美智子が帰宅したという会話から想起された美恵の家出やその後、美智子を出産した出来事である。もう一カ所は、秀雄と遭遇した直後の場面である。ここではつるはしで土を掘りながら、秀雄の目を「ふと」思い出している。この二カ所は「ふと」思う内容が秋幸が主体的に関わる出来事ではない点が共通している。よって龍造の血を受け継ぐ者と関係する出来事の後で、土方作業に秋幸は集中できなくなってしまうのだ。

また傷害事件後では、土方作業中に「ふと」思う秋幸の姿が四カ所に描かれ、その内容は秋幸が主体的に関わる内容に変化する。そしてその中でも、龍造にさと子との近親相姦を告白する前後で内容が大きく異なる。近親相姦の告白の前後に秋幸は、子どもの頃に川で秀雄を溺れさせ、そこを龍造に見られていた時の出来事を思い出す。近親相姦前は、この記憶が長年「罪のようなものとして秋幸の記憶の中にあった」と独白している。異母弟を溺れさせてもとがめられなかったことに対する罪悪感もあるだろう。だがその一方で、母を裏切った龍造が「母さん」と母を呼んだように、秋幸が存在することで母系一族と龍造との繋がりが消えず、母系一族に破滅をもたらしてしまう罪の意識を秋幸は持ち続けている。そして今回の傷害事件が母系一族と龍造に関わるため、秋幸はこの出来事を「ふと」思い出したのだろう。対して近親相姦を告白した後は、近親相姦をとがめられなかったことがきっかけとなり、秀雄を溺れさせてもとがめられなかった過去を想起したと言える。

この後者の場面では土方作業中に秋幸が聞く蟬の鳴き声も変化する。近親相姦について煩悶していると、蟬の声が嘆き泣く声のように聞こえ、秋幸は苦痛を感じる。この蟬の声は母系一族の破滅を招いた龍造から自身の半分が出来、その上、母系一族を破滅させる要因となった男性器を持って生まれたことを嘆き、許しを乞うている秋幸の内なる声だろう。郁男のように自死しないまでも美恵のように精神に変調をきたしたこともなく、また文昭のように骨折するまで怒られたことがない、無傷であり続ける秋幸はどの家にも属し切れていない証である。許しを乞うことは、罪を認めてもらうことでもあるため、蟬の鳴き声の変化には、宙づりの不安定な状態から脱したい秋幸の想いが表れている。このように乱れた心を鎮めさせる読経のような蟬の声から一変し、秋幸の心を乱す龍造のわらい声や、嘆き泣く声のように蟬の声の捉え方が変化したことからも、土方作業に従事しても心は浄化されず乱れたままであることがわかる。

秋幸の治癒の場である山中から町中に土方現場が移り、さらに「女というもんは寝るだけのもんじゃ」という龍造の言葉から、近親相姦の告白を弱みとして握られたことに気づいたのを契機に、秋幸は「ふと」思うのではなく、常に考えるようになり、がらんどうの状態に戻れなくなった。これは、秋幸が想う土方作業に対するあるべき姿から程遠い。

> 人間の手におえない土にむかって秋幸ら土方が祈りをあげている気がした。汗は祈りのために流す。祈りがないと秩序は乱れ、土は動き、水はあふれる。そこに何が建とうと、何の為にその工事がなされようと、土に最初に触れるのは土方以外になかった。秋幸は十九歳で土方をはじめてそう考え、今もそう考えた。祈りながら働き、働き終えて祈りをささげるのではなく、何も考えずに型板を図面通りにつくり、何ひとつ祈りも感謝の言葉も考えず風景に身を染める。
>
> （三八一・二頁）

龍造の存在は、このような何ひとつ考えないという土方作業のあるべき姿勢を失わせるほど秋幸の心を乱した。考え続けてしまうため秋幸はがらんどうとなれず、不安や葛藤を抱いたまま浄化を行えない悪循環に陥ってしまった。

四、秋幸の暴力性の開花

血縁や家のしがらみによる不安や葛藤が浄化されなくなるにつれ、秋幸の抑えきれない暴力性が次第に露わとなる。この暴力行為の対象物が秋幸の血縁に喩えられる形で描かれる。

四―i、オートバイと父系

「秋幸の半分の謎」が明らかにならなければ「何もかもから自由にな」れない。秋幸は型板にシャベルを叩きつけて割り、「どなりつけてほしい。殴り倒してほしい」と思う。これは周囲にいる人夫に対し思っているのではなく、「空気のように遍在し」、秋幸を見つめる龍造の視線に対しての想いであろう。秋幸の想いとして、近親相姦を告白した際、龍造が「父親として、秋幸を打ちすえ、さと子を張り倒し」苦しめば、龍造を父として受け入れ、乗り越えるべき対象が明確になるはずだった。しかし、龍造は苦しむことなく反対に近親相姦を認めるような態度を取ったため、父親としての手応えを秋幸は得られなかった。

だが、秋幸が無意識裡に親（龍造）を乗り越えようとする様子が描かれる。秋幸はダンプカーの周囲を塞ぐように異母弟にオートバイを停められた際、「親のスネをかじるチンピラの挑発」と受け取った。親の金で買ったオートバイは親の比喩であり、また龍造が『岬』と『枯木灘』においてオートバイに乗っていると描かれていることから、オートバイは龍造を象徴していると言ってよい。そのため、ダンプカーでオートバイを轢きつぶして囲いの外に出る行為は、親（龍造）を乗り越えようとする秋幸の心の現れと言えよう。秋幸は血縁のしがらみから抜け出したいと願っている。だが一方で、龍造に子として認められたいとも思っており、矛盾が生じている。秋幸は「その男やその男の子供とは無関係だと思っていたにもかかわらず、浜村という言葉を耳にし眼にするたびに体がほてる気がして、それが不思議だった」と自身と浜村家との関係を意識の表層でこそ認めてはいないが、意識の深層では認めてしまっており、意識が解離している状態だ。意識の表層と深層の両方で浜村の血が流れていると認めなければ、「自分の半分」は謎のままであり、秋幸は自身の核を見つめきれない。日を受けた風景に曖昧なものはないように、龍造の子として自分自身を認められれば、「半分の謎」が明らかになり、意識の表層においても自身の内を流れる浜村の血を認められる。つまりは、存在が曖昧ではなくなるということだ。そうなること

でようやく、自分が属すべきは、西村でも竹原でも浜村でもないと断言できるようになり、血縁や家というしがらみから解き放たれるのだ。しかし今、それが叶わず自身の存在を曖昧に思うため、自分の息の音が一人耐えるあえぎ声に聴こえるのだろう。

四―ii、カルピスと母系

秋幸と龍造が入れ替わり龍造が娘・さと子と寝た人非人のケダモンだという噂に対して、秋幸に「おとなしいお前から思いもつかん」「秋幸が毎日まじめに土方しとるのを見て、母さんは何もらうよりもうれしい」と話す母と姉は秋幸の真の姿を見ていない。母らの秋幸に対する理想を聞き、これまで母らに呪縛されつつも庇護されてきた過去、そして母系が求める理想の秋幸を演じ続けなければならない未来を捨てたい想いが強まり、「一切を捨ててしまいたい。過去も未来もなく、ただ自分がここに石のように在る。草のように在る」ことを願ったと考えられる。血縁や家から解放された一人の男として今、ここに在りたい想いは、秋幸にこれまで見せたことのない剣幕で「女子供ではあるまいし、甘ったるいもんが飲めるか」と、土方現場でカルピスを捨てさせた。「カルピス」を女子供の飲み物と認識しているため、「カルピス」は母系一族の隠喩と捉えられないだろうか。秋幸はこの場面に至るまで「カルピス」を飲んでいたことから、理想で塗り固めた秋幸しか見ない母系一族に対する憎悪が衝動的に「カルピス」を捨てさせたのだろう。よって、これは母系一族に対する苛立ちと拒絶と言えよう。

四―iii、白痴の少女と近親相姦と龍造

秋幸の周囲に白痴の少女が頻繁に現れる。この少女が秋幸に与える影響は非常に大きい。近親相姦を告白した際、龍造がさと子との間に子を「つくれ、つくれ、アホでも何でもかまん」「アホの孫の一人や二人どういうこともない」と言ったことから、白痴の少女は近親相姦、そして龍造と結び付く記号となった。よって、この白痴の少女の背後に秋幸は龍造を見てしまうのだ。これまで秋幸の一部とも言える土方道具を置いている倉庫の中に入った白痴の少女を見ても秋幸は追い出そうとしなかったが、土方現場で「すこし頭がトロ

い」女を見、白痴の少女と龍造が言ったさと子の産む子供を思い出した日、倉庫から白痴の少女を追い出そうとしたのもそのためだ。この日は追い出しはしなかったが、数日後、昼間に閉めたことのない倉庫のシャッターを白痴の少女の前で閉めた。白痴の少女を倉庫から閉め出す、すなわち、龍造が秋幸の心の中に入り、平静を乱すことを拒否する想いの表れである。

これら一連の秋幸の変化は土方現場が山中ではなくなったことにも関係するが、秋幸が龍造に固執したことにより、意識の中から龍造の存在が消えなくなったことが何よりも大きな原因である。秋幸が見せた暴力性は、龍造を父と認めたことで露見した秋幸の半分であり、鬱積し続ける血縁や家のしがらみによる不安が龍造の存在により浄化不可能となったために生じたのだ。そして前節で見てきたように、秋幸がどの家にも属しきれない不安定な存在であることを一層際立たせた精霊送りの場で、これまで想像もしなかった家の親和を見せつけられた秋幸は、まるで兄・郁男を〈反復〉するように突発的に異母弟・秀雄を殺害するに至ったのだ。[6]

おわりに

秋幸は土方作業に従事することによって風景に「染まる」感覚を抱き、「一本の草」や「つるはし」などに同化し、何も考えることのない主体なき状態となり、血縁や家のしがらみによる不安から解放されていた。したがって、土方作業は資本主義的な労働ではなく、主体なき存在になることが目的であった。

秋幸が龍造の存在を彼についての噂話や彼の視線から感じていた間は、秋幸は土方作業に従事しながら「ふと」思い出すこともなく、風景に「染まる」感覚を抱き、主体なき存在になることによって内面をがらんどうにし、内面に鬱積した血縁や家のしがらみによる不安を浄化できた。しかし、異母弟・秀雄と姪の夫・五郎との傷害事件に端を発し、それまで保たれていた秋幸と浜村家の距離が乱れ、秋幸の心の平衡状態も乱れると、秋幸は土方作業に従事しても風景に染まりきることができず、主体なき状態になれなくなった。意識の裡から消えない龍造に、復讐するために近親相姦を告白したが、秋幸の思惑に反し、怒りを買うどころか容認されてしまう。これらが原因となって、秋幸の意識の中から龍造が消えず、「ふと」思うだけではなく、常に考える状態に陥り、何ひとつ考えず作業に従事す

るという土方作業のあるべき姿からかけ離れ、風景に染まれなくなった。そして、風景に染まりきれないため鬱積し続けた不安と葛藤を浄化できなくなると同時に、秋幸の中に眠っていた半分の血が目を覚ましたことで、秋幸は暴力性を開花させた。

『地の果て　至上の時』では秋幸は土方作業ではなく龍造のもとで材木業に就く。これは、秋幸が龍造のもとに身を寄せており、また秋幸が服役していた三年の間に土地開発ブームが起こり土方作業のあり方が一変したことも関係している。だがそれだけではなく秀雄殺害後、逃走した山中で怪我をし、「路地の秋幸」の血を流し、浜村孫一となって蘇った秋幸には、三つの家のまん中で宙づり状態となり、どの家にも属し切れない不安や、複雑な血縁によって生じたしがらみから脱しており、土方作業によって内面を浄化する必要がなくなったためだと言えよう。

注

（1）柄谷行人「差異の産物」（「新潮」一九九三（平成五）年十月）

（2）柄谷行人「三十歳、枯木灘へ」（『中上健次全集　3』月報、集英社、一九九五（平成七）年）

（3）蓮實重彦は「過失と告白」（『小説から遠く離れて』日本文芸社、一九八九（平成元）年）において、秋幸の「染まりやすさ」は自然だけではなく言葉にも感染する彼の超＝感染性という受動的な資質の表れとし、受動的な生の消耗であり危険の徴候としている。また、物質との一体化を、秋幸には解消しがたい弱さの現れとも言い換えている。母や姉の言葉は秋幸にとっては呪縛であるため、彼女らの言葉に感染していると言え、秋幸の受動的な生の負の面と考えられるため一部首肯できるが、自然に「染まる」ことは秋幸の内面を浄化する正の一面も併せ持っていると考えるため本論文とは立場を異にする。

（4）柴田勝二は「〈天皇〉のいない世界」（『中上健次と村上春樹　〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』東京外国語大学出版会、二〇〇九（平成二十一）年）において、秋幸が土方作業によって空無の地点に自己を置こうとするのは、「近似してしまいがちな実父龍造から自己を差別化するための手立て」としている。その要素を含んではいるが、土方作業の本質は血縁と家のしがらみから解放されるための手段であり、龍造との差別化のみを理由とすることはできない。

（5）『読経の声にも似た木々のざわめき』（「朝日ジャーナル」一九八三（昭和五十八）年八月五日号）の中で中上は、山の中を歩いていると「意識の世界からすとんと無意識の世界へ穴に落ち込むようにはまり込む」感覚を抱き、また「路地」の裏山は「単なる山ではなく、私には遊び場であると同時に治癒の場所だった」と語っている。よって中上は、山とは無意識にさせ心の傷を治癒させる場と認識していたと言える。そのため、秋幸も心を癒やすために山へ入っていくと捉えられよう。

（6）柴田勝二は「重層する現代と古代」（前掲（4）同書）において、「秀雄（異母弟：論者注）の殺害が、象徴的には〈父殺し〉であり〈自分殺し〉である」と述べている。本作を含む『岬』『地の果て　至上の時』の三作は通過儀礼の上で〝父殺し〟へと向かっていく秋幸が描かれる。よって、『枯木灘』では異母弟を殺害することで、兄が果たせなかった弟殺しを成し遂げ、兄の呪縛から解放され〝父殺し〟へと向かうステップを一段進めたと考えるべきであろう。

また今井亮一は「「岬」ならびに『枯木灘』再訪―私的空間としての路地」（『路地と世界―世界文学論から読む中上健次』松籟社、二〇二一（令和三）年）の中で、『枯木灘』を〝父殺し〟の物語であるとし、本作において秋幸は龍造から浜村孫一の物語を奪うことで〝父殺し〟を象徴的に遂げたと指摘する。そして〝父殺し〟を許容できないかに見える秀雄が「龍造に代わる抑圧的な「父親」」として精霊送りの場に登場しているため、秀雄殺しも〝父殺し〟であると論じている。今井は『地の果て　至上の時』を「秋幸三部作の締めくくり」ではなく、『日輪の翼』（「新潮」一九八四（昭和五十九）年一、三月）と『讃歌』（「文学界」一九八七（昭和六十二）年七月～八八（昭和同六十三）年三月、同年五月～十一月、一九八九（平成元）年二、四、五、八、十月）と共に成る「路地解体後三部作」の劈頭として位置づけている。本論文と物語群の捉え方が異なるため、〝父殺し〟として捉える対象が異なりはするが、龍造から孫一の物語を奪うことによる秋幸の〝父殺し〟は、本論文で指摘する秋幸の〝父殺し〟と同様の観点から論じていると言えよう。

第三章―三節　『枯木灘』論―〈秋幸サーガ〉と神話―

はじめに

〈秋幸サーガ〉は神話構造で成り立っていると考える。特にそれが顕著に見られるのは、『岬』、『枯木灘』、『地の果て　至上の時』での秋幸の成長過程だ。これら三作品を通して、繰り返し試練を与えられ、それを乗り越えることによって人として成長していく秋幸の姿は、さながら神話に描かれる英雄のようである。さらにこの構造を裏付ける根拠として、舞台の「紀州」と、『枯木灘』と『地の果て　至上の時』に秋幸の恋人として登場する「紀子」の存在が挙げられる。中上には作品に繰り返し同じ名前や漢字を採用する特徴があるが、「紀子」という名はこの秋幸の恋人のみの採用である。その上、〝紀〟という字もこの人物にのみ使用されていることから、「紀子」は特別な人物であると言えよう。なぜなら、〝紀〟は中上が生涯意識し続けた「紀州」を連想させる字であるため、〝紀〟は特別な字と考えられるからだ。さらに前節で確認したように、浜村孫一の石碑が建つ紀州・有馬の地にイザナミが祀られていると描く『日本書紀』までをも中上が意識し、〝紀〟という字を採用したに違いない。そこで本節では、『日本書紀』との類似点を確認し、神話構造にのっとって〈秋幸サーガ〉が展開していることを検証していく。

一、〈秋幸サーガ〉と神話構造

第三章―一節で見てきたように紀子の名前は紀州と『日本書紀』を由来として付けられていると考えられ、〈秋幸サーガ〉は日本神話を意識していると言えるのだが、これは紀子の名前に限ったことではない。そこで、〈秋幸サーガ〉の神話構造を考えるため、『日本書紀』と比較する。

まず性交を行った場所を確認したい。イザナギとイザナミは天の浮橋から天の沼矛を海に入れ撹拌し、そこで島が生まれる。この海に着目して、『鳳仙花』におけるフサの性行為の場所を見る。物語の舞台である新宮、そしてフサが生まれ育った古座も海に面していることから、フサにとって海は身近な存在である。そのことも関係し、フサには潮鳴りの音が不意に聞こえもするように、彼女の中には海が存在していると言えよう。ここで、『日本書紀』に描かれる天の沼矛が男性器を、海が女性器を表していると仮定すると、勝一

郎が天の沼矛に、フサが海に重ねられる。[1] フサと彼女の最初の夫である勝一郎が初めて性行為を行った場所は海岸であった。『日本書紀』によると島を作った後に二柱が交合し夫婦となるため、この二柱の行為をフサと勝一郎の海での性行為、そして結婚と重ねて見ることが可能である。したがって、イザナギとイザナミが国を産んだように、フサと勝一郎の性行為も、その後の物語の舞台となる「路地」の家を創ったと言えるのだ。

続いて、イザナギとイザナミ、もしくはイザナギが生み出した三貴神であるアマテラス・ツクヨミ・スサノオと、〈秋幸サーガ〉を構成する上で欠かせない存在である秋幸・美恵・郁男の三人を比較したい。[2]

アマテラスはこれまで生まれた神々とは異なり、美しく、天地四方を隅々まで輝かすこのとのできる神秘的な神であり、イザナギもイザナミも長く地上に留めるべきではないと考え天上へ送った特別な神である。アマテラスに相当する人物は美恵である。

> 母親のフサも、自殺した郁男も、芳子も君子も、昔からこの美恵を心のどこかの中心に置いていたのだった。奇妙な性格だった。子供の頃、肋膜を患い、肋骨を三本取る手術をしたせいもあって、美恵は、人の不幸がわが身の不幸になり、人の痛みが自分の痛みのように、男まさりの芳子が母のフサにぶたれると、痛いと火がついたように泣いた。秋幸が兄の郁男について竹藪に行き、竹で足の皮をむいたのを知った時、美恵は気を失い黄色い胃液を吐いた。
>
> （二七八頁）

と描写されるように美恵は、特殊な感性を持った存在であり、かつ、母系一族の中心的役割を担っている。このような美恵とアマテラスが物語世界に与える影響を確認したい。『岬』では美恵の言動に秋幸らが影響される形で物語が進むため、美恵が精神に異常をきたしたとき、彼女を取り巻く時空の流れが変化すると物語の時間の流れまでもが変化してしまった。対して、アマテラスがスサノオの止まない悪行によって天の岩屋戸に籠もると、国中が闇一色となってしまったように、アマテラスの行動も神話世界全体に大きな影響を及ぼす。つまり、美恵もアマテラスもそれぞれ物語の中心に位置し周囲の世界に影響を与える存在なのだ。

続いて郁男を見ていく。郁男は〈秋幸サーガ〉では「役者にしてもおかしくない程整った顔をし」ていると容姿の美しさを強調して語られる。また、〈秋幸サーガ〉には含まないが、中本の一統を描いた『奇蹟』の中でもその容姿が描写される。そこでは、夏芙蓉や白梅の匂いがすると言われ、妹・キミコから見ても白っぽく、信じられないほど美しく、郁男より清潔で奇麗な若衆はいないと描かれているため、郁男は美しい光を放つツクヨミの印象と重なるのである。また、郁男は秋幸らを殺そうとしたように残虐な一面も持っている。この性格は、『日本書紀』の一書において保食神を打ち殺したツクヨミの残虐な一面とも重なる。

一方で、スサノオは勇ましく、強く、そして残忍な性格の神である。それに対し秋幸の体型は同じように土方作業をしている義兄の文昭と比較すると、「胸まわりも腕も、文昭の二倍近くあ」（『岬』）り、また秋幸の力の強さも、共に土方作業をしている「一つ齢下の徹の二倍ほど力があった」（『枯木灘』）と体格も力も人の二倍あると描かれている。これは、スサノオの勇ましく、力の強いという特徴に合致する。そして秋幸の内面に潜む残忍さが、異母妹を犯し、異母弟を撲殺させるまでに導いた。これらから、それぞれ三柱の特徴は美恵、郁男、秋幸の性格と似通っていると言える。その上、三貴神とされながらもアマテラスとスサノオを中心として神話が描かれるように、〈秋幸サーガ〉においても自死した郁男は、生前の姿を描いた『鳳仙花』以外では、物語世界に登場せず、美恵と秋幸のエピソードが中心となっていることからも、三柱と三人の性質は酷似していると言えるのである。

ここで、再び神話世界と〈秋幸サーガ〉の展開を比較する。三柱それぞれが治める国をイザナギに命じられた後、スサノオはアマテラスに別れを告げに高天原へと昇った。そこで悪行を働き高天原から追放されたスサノオは出雲国に現れる。この時、スサノオは八岐大蛇を退治し、奇櫛稲田姫を救うように、高天原から追放される以前との性格の変化が明らかだ。このスサノオの神話と同様に〈秋幸サーガ〉では『枯木灘』の終盤、異母弟・秀雄を殺害した秋幸は、物語世界から追放され、その続編である『地の果て　至上の時』で物語世界に復活する。そしてこの時、秋幸が身を寄せる場を母系から父系へと変えたように、秋幸の変化を見て取ることが可能だ。だが、スサノオと秋幸の類似はこれだけではない。『日本書紀』の一書では、スサノオは木々を生み出し植林法を伝えた後に根国へ入り、神話世界から姿を消している。よって、『地の果て　至上の時』で秋幸が龍造のもとで材木を扱い、その後、物語世界から姿を消す行為もスサノオの行動に倣っていると言えよう。これらから、主要な登場人物や基本的な構造を見ていくと、〈秋幸サーガ〉は日本神話

と同様の構造の上に成り立っていると言えるのである。

二、秋幸とスサノオ

日本神話でのアマテラス・ツクヨミ・スサノオの三柱の中で秋幸とイメージの重なる神はスサノオであった。ここで〈秋幸サーガ〉の構造も踏まえ、いかに秋幸とスサノオが重なるのか確認したい。イザナギに根国へ追放された後、ツクヨミには触れず、アマテラスのみに別れを告げようとするスサノオの行動から、スサノオがアマテラスをイザナミの死後、代理母として見ていたと捉えられよう。対して秋幸の場合は、「母のフサが女手ひとつで五人の子を育てるために行商していたため、美恵は姉だが秋幸の母親代わりでもあった」とある。このように、母親代わりとして秋幸の面倒を見た美恵は秋幸の代理母だ。そこで、秋幸もスサノオも姉が代理母になるという同じ構造を持っているのである。

ところで、スサノオは自我を確立していなかったのだろうか。林道義はスサノオの高天原での行動と八岐大蛇退治などの「各々のエピソードが同一人物の性質としては統一性に欠けているように見え、ときには矛盾しているように思われる」原因を、スサノオが「自我＝意識」の発達段階にあったからだと指摘している。[3] これは、『岬』において、美恵や母らに兄と重ねて見られることによって自己を確立出来ていなかった、つまり自我の発達段階にいた秋幸と重なる面がある。例えば、第二章で論じたように、『岬』の終盤では秋幸は自身が禁じ、さらに母や姉らによっても禁じられた性行為を行う。その上、これまで実父と認めることを禁じていた浜村龍造を実父と認めたことによって、秋幸が行った性行為は異母妹との近親相姦となった。これらの禁忌を破ることによって秋幸は、自己を確立していったのであるが、この近親相姦が母や姉に対する秋幸の初めての反撥であったことから、この禁忌を犯す行為は秋幸にとって最初の試練となったのである。だが、この試練を乗り越えたと同時に、自己を確立したがために秋幸は浜村龍造との対峙という新たな試練を背負い込んでしまったのだ。

一方で、スサノオに与えられた試練とは、イザナギから海原を治めるよう命じられたことである。スサノオはこれを拒否し「妣の国

へ行きたい」と反撥し泣き続けた。その後、地上の木々を枯らすなどしたスサノオにイザナギが言い放った言葉が「根国へ行け」だった。しかし、スサノオは根国へ行く前に高天原にいる姉のアマテラスに別れを告げに行く。このように、秋幸とスサノオは共に、親たちの言いつけに背いた。親の意に反する行動を取ることで、彼らは成長し、自己を獲得し、自ら新しい世界へ昇りつめていくのである。

また『岬』での秋幸の異母妹・久美（『枯木灘』における「さと子」）との近親相姦にあたる行為は、スサノオとアマテラスとの誓約と言えるため、秋幸もスサノオも性交によって発達段階の歩みを進める。近親相姦（誓約）は秋幸にとって自らの意志を持つ契機であったのに対し、スサノオにとっては身の潔白を示す手段でありながらも、悪行を働く端緒となった。龍造と向き合わなくてはならなくなった秋幸だったが、突如起こった異母弟・秀雄と姪の夫・五郎の傷害事件によって、龍造との均衡が壊され、秋幸の内面は乱された。その上、西村家、竹原家、浜村家の全ての家に属し切れず、宙づり状態であることを秋幸は突き付けられており、そこで生じる寄る辺ない不安は、秋幸を暴力的な行為に及ばせ、浜村家の親和の中にいる異母弟・秀雄を殺させた。異母弟殺害に至るまでに見せた秋幸の暴力的な振る舞いは、数々の悪行を働きアマテラスを怒らせたスサノオと重なる。ここで、秋幸は逮捕という形で一旦物語世界から追放され、スサノオもアマテラスら神々によって高天原から追放される。その後、秋幸は『地の果て　至上の時』で刑期を終え物語に復活し、スサノオは出雲国に現れる。秋幸は、フサの元に寄りつかなくなり、これまで敵と見なしていた龍造のもとに身を寄せる。対して、スサノオは悪行を働くことなく、八岐大蛇から奇櫛稲田姫を守り英雄となる代わりようを見せたように、この追放と復活によって、両者は性格を変えたと言える。ここで、スサノオの八岐大蛇退治について見てみたい。神話に語られる英雄の誕生は自我の芽生えを意味するとのノイマンの指摘を受けて河合隼雄は『神話の心理学』の中で、

> 自我は人間の意識のなかに芽生えてくるが、それが自立するためには、無意識から独立した存在にならなくてはならないし、外界においても母親から自立した存在になっていかねばならない。
>
> そこで、象徴的に言えば、一度は「母なるもの」のイメージを殺すことによって、それから切り離された存在とならねばならない。これが神話における怪物退治だとノイマンは考えた。(4)

と述べている。ここから考えると、アマテラスを驚かせ体を梭で傷つけさせたスサノオと、近親相姦の相手を異母妹・さと子ではなく姉・美恵だと思う秋幸は、「母殺し」とは言えないまでも間接的に代理母を蹂躙していると言えるだろう。また秋幸が〈秋幸サーガ〉のクライマックスで行った、母系一族のトポスであり自身の帰する場である「路地」の跡地に火を放つ行為も象徴的な「母殺し」である。このようにスサノオと類似した行動を秋幸が取っていることから、この物語群の中には『日本書紀』の神話構造の要素が含まれていると言えよう。この荒ぶる神でありながら英雄となったスサノオのイメージを内包した秋幸と性行為をする人物が紀子なのである。

三、土地との性行為

紀子との性行為が土地との性行為であることを保証する資料として、中上が梅原猛と行った対談の中で、新宮で行われる御灯祭りについて話している箇所を見てみたい。

中上　（略）むしろぼくは速玉大社より神倉山と、もう一つ阿須賀神社、あそこが古代の熊野を解くのに大事だと思うんです。

梅原　あすこは重要でしょうね。それと、その関係はよく分からんけどね。神倉山というのは、昔からの、縄文の聖地ですね、神倉山はね。あれと、例の花窟とが繋がってるんですよ。（略）

（中略）

中上　山の上にワーッと登って行く……。単純な祭りなんですけどね。上に登って、火つけて、パーッと下りてくる。

（中略）

中上　（略）昔はいろいろなことをしたらしいんですよ。一週間か何日か身を潔め……。

梅原　女性を断たないかん（笑）。

中上　何で女性を断つのか……（笑）。たぶん山の神というか、梅原さんの説をふまえて言えば、イザナミに対する畏敬かもしれませんね。

梅原　山の神は女ですからね。[5]

ここで山の神が女であると話題が上がる。さらに、農耕文化によって山の神が女から男へと代わった地域もあるという梅原の発言に対し、中上は「十津川あたりの民俗ですけどね、事故が起こると、すぐペロッと見せる。やばいな、怖いなっていうときがあるでしょ。そのときしょんべんをする。しょんべんをするっていうことは、悪いことでも何でもないんですよ。山の女神が喜ぶんですから」と発言しているため、この対談以前から中上の中では山の神が女であることは既知の事実だったのである。[6]この内容を想起させる描写が『地の果て　至上の時』での秋幸が山中でナイフの刃を踏んで怪我をした次の場面である。

「どうした？」と浜村龍造はたずね、秋幸の足を見、「そうじゃ、忘れとった」と言い、秋幸にほんの一滴だけでよいから小便をしろと言う。秋幸は言った意味が分らず訊き返すと、「そうじゃ、おまえはチラリですむような男じゃないんじゃ」と言い、秋幸に服を脱いで素裸になって山の中を走り廻ってくるか、水につかるかしろと言う。「何ない？」と訊くと浜村龍造は秋幸の耳に小声で「大きな物持っとる男二人が自分一人をないがしろにしてベチャベチャしゃべっとると癇癪起こしたんじゃ。アレの好きな山のカミが女陰広げて待っとるのにと、怒り出して悪さをしたんじゃ」と言い、「早よ脱げ、俺も従いたるさか、まず走るにしても水に入るにしてもチンポ見せたれ」と真顔で連に忠告するように言う。山と山にはさまれた風景の中で、無数の笛や弦を吹き叩いたような渓流の水音の中に男根の好きな好色な山のカミが潜んでいると、浜村龍造が言っている気がして秋幸は、人がそう言い伝えてきたのならそうだろうと、浜村龍造が見つめているのを気にしないでシャツを脱ぎ、ランニングを脱ぎ、ベルトをはずして作業ズボンを脱いだ。（中略）秋幸が浜村龍造にならって淵の方に行き、腰まで水につかり頭からつっ込んで洗い、顔を上げると浜村龍造はみつめている。「これで山のカミの婿殿じゃ」と浜村龍造はつぶやいた。

（6、一七八・九頁）

この場面と前に挙げた梅原と中上の対談からわかるように、中上は山の神が女と認識している。ここでは山のカミへの挨拶を描いているのだが、秋幸に対して龍造が「山のカミの婿殿」と言っていることから、山のカミと秋幸の性行為の意味も内包されていると言えよう。山のカミへの挨拶の他に〈秋幸サーガ〉では、土方作業中に秋幸が山など自然と性行為をしているかのような描写がある。『枯木灘』での秋幸の土方作業の描写には、

秋幸はまたつるはしを土に打ちおろす腕の動き、力をこめて起こすために踏んばる両肢の動きに呼吸を合わせた（以下略）

（二八四頁）

つるはしをふるった。土は柔らかかった。力を入れて起こすと土は裂けた。また秋幸の腕はつるはしを持ちあげ、呼吸をつめて腹に力が入る。土に打ちつける。

（三二七頁）

などとあり、さらにその土が快楽に声をあげていると感じていることから、この「つるはし」が秋幸の男根の喩であり、秋幸は土と性行為をしていると言えよう。

このような土地との性行為は、秋幸がスサノオだけではなくオホクニヌシのイメージを兼ね備えていることを示唆する。そして、この国作りこそ秋幸が行おうとしていることではないだろうか。『日本書紀』においてオホクニヌシは国作りの際に「広矛」を用いている。「広矛」を男根の喩とすると、「広矛」で地面を突く行為は、オホクニヌシが土地と性行為を行っているように受け取れる。よって、オホクニヌシの国作りにおける「広矛」と秋幸の土方作業で使用する「つるはし」のように、男根を想起させる物で地面を突く行為は、土地との性交と言えるのだ。オホクニヌシの国作りを彷彿とさせる秋幸の土との交合は、紀州の地に浜村孫一の血が流れる者の〝共同

体〃を創造するための擬似行為である。秋幸が土方作業において心地よさと安心を感じていることから、この土方作業は秋幸が安らぎを憶える紀子との性行為に置き換えられる。したがって、「紀子」という紀州の女陰を借りて、秋幸は〃共同体〃を創造しようとしていたのだ。

おわりに

紀州はもちろんのこと、浜村孫一の石碑が紀州・有馬に建っており、そのそばに『日本書紀』でイザナミの墓として描かれている花の窟があること、この二つが「紀子」の名前の〃紀〃を採用する際に中上が込めた意味だと考えられる。そしてこれは同時に、〈秋幸サーガ〉を描く際に、中上が神話、ひいては『日本書紀』を意識していることを暗示している。『日本書紀』との関連から〈秋幸サーガ〉を見ると、イザナギとイザナミの国生みを模したフサと勝一郎の性行為によって〈秋幸サーガ〉の基盤となる「路地」の物語世界が誕生した。そこでは、三貴神の性質と似通っている秋幸、美恵、そして郁男が登場する。特に秋幸にいたっては、親たちへの反撥、近親相姦、そして物語世界からの追放と復活などを経て成長する様が描かれるが、この過程はスサノオの成長過程を模倣していると言える。したがって、〈秋幸サーガ〉は繰り返し与えられる試練に打ち勝つ秋幸の成長段階を描きながら、神話構造に則って物語を展開しているのだ。(7)

だが秋幸はスサノオのイメージだけを内包しているのではない。秋幸の土方作業は、オホクニヌシの国作りも模倣している。『枯木灘』では浜村孫一の石碑と花の窟が対となっていることから、秋幸の男根と紀子＝紀州の女陰によって、秋幸によって統治される孫一の子孫のための〃共同体〃を創造することを意味していたのである。(8)

以上のように、〈秋幸サーガ〉と日本神話との親和的関係を検証することによって、〈秋幸サーガ〉の見取り図を提示できるのである。

注

（1）吉田敦彦「ヌボコによる海の攪拌の意味と、サルタビコが海で溺れたわけ」（『水の神話』青土社、一九九九（平成十一）年）
　吉田は、『古事記』の国生みについて論じた中で、創造の具としての役割を持つ矛には、ファロス（陽根）を象徴する意味が認められるため、アメノヌボコ＝ファロスをさし入れて、攪拌する原初の海は女陰の意味を持つと指摘している。『日本書紀』についての言及ではないが、矛を男性器に、海を女性器に見立てていると『日本書紀』でも言ってよいだろう。

（2）『鳳仙花』で妊娠中と出産時の描写が描かれているのは、郁男・美恵・秋幸の三人のみである。フサには子供が六人いるがこうした偏りは、彼ら三人が物語世界で重要な役割を担っている証しと言えよう。

（3）林道義『ユング心理学と日本神話』（名著刊行会、一九九五（平成七）年）

（4）河合隼雄『神話の心理学―現代人の生き方のヒント』（大和書房、二〇〇六（平成十八）年）

（5）梅原猛・中上健次『君は弥生人か縄文人か』（朝日出版社、一九八四（昭和五十九）年）

（6）南方熊楠「山神「オコゼ」魚を好むと云う事」（『南方随筆』岡書院、一九二六（大正十五）年）の中に、奈良県と和歌山県の境にある安堵峰に伝わる話として、山神は女形であり、「甚だ男子が樹陰に自涜するを好む」とある。

（7）ここに言う神話構造とは、日本で言えば『日本書紀』や『古事記』におけるスサノオやオオクニヌシの説話に例があるように、主人公（＝英雄）が数々の試練を乗り越えて本来持っていた能力（＝聖性や高貴性）を開花させる（＝自己実現を果たす）物語構造を指す。

（8）龍造は秋幸とさと子に子を生めとそそのかし、生まれた子を有馬の土地で育てればいいと言っていることから、ここでは龍造が創ろうとする孫一の血が流れる者の共同体を秋幸が奪うという意味も内包されていると言えよう。

参考文献

小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集二　日本書紀一』（小学館、一九九四（平成六）年）

第四章―一節　『地の果て　至上の時』論―〝父殺し〟に向かう秋幸―

はじめに

秋幸は『枯木灘』において異母弟・秀雄を殺害することによって、捕らわれ続けた兄・郁男を越えた。だがそれは同時に、秋幸に邪悪な浜村の血を受け継いでいることを認めさせた。弟を殺すことで兄を越えた秋幸が、次に対峙すべき相手は父である。秋幸は逮捕前まで従事していた土方を捨て、〝父殺し〟を成し遂げるために龍造に接近し、彼のもと材木業に就く。先に秀雄の命を奪った秋幸は、そこで祖父・ジジや遠つ祖・浜村孫一などの龍造が拠り所としてきたものを次々と奪う。

従来、秋幸の〝父殺し〟は龍造の自殺によって失敗したと論じられてきた。しかし、自死という結果に至る過程が重要だと考える。そこで本節では、試練を乗り越えることで次第に強く存在を主張するようになった邪悪な部分＝秋幸の「影」が、彼を〝父殺し〟へと導いていく有り様を跡付けることで、『地の果て　至上の時』の読み直しを行うことを目的とする。

一、「新宮」という聖なるトポスの消滅

秋幸が服役している三年の間に、聖なる地であった「新宮」は、紀伊半島を一周する高速道路の建設が始まったことにより資本主義のシステムが流入し、俗化した。それに伴い、『枯木灘』では自然との交感を意識する聖なる作業だった土方も、利潤を追求するだけの単なる労働に堕し、俗化してしまった。その変化を嫌った秋幸は再び神聖な山へと入ろうとする。なぜなら『枯木灘』において山は、帰属の場を持てず宙づり状態にあった秋幸に心の平穏をもたらす空間であったからだ。

一―i、聖なる六さんと俗化した秋幸

秋幸は、利潤を求めず日のある限り働く六さんという人物の話を聞く。この六さんこそが秋幸が求めている聖なる存在である。秋幸は山へ入り、六さんが「単純な休みもしないで働く姿を見ていると、なにもかもが余計なわずらわしい事に見え」、六さん「の元に居

れるだけ居させてもらおうと決めた」のだった。六さんの小屋に入る前に、秋幸は服ごと水に入って行く。これは、殺人を犯した身で神聖なる六さんの小屋を穢さないための浄めの儀式だったのだろう。秋幸は六さんと酒を酌み交わしながら、これまでの経緯を話すのだが、これは「神様」と言われるほどの聖なる人物に自分に罪を告白する懺悔と捉えられないだろうか。罪を懺悔することで秋幸は聖なる山に居続けることを許されたかったのだろう。だがしかし、六さんが自らの力で治癒できないほどの傷を負ってしまうことにより、秋幸は新宮へ出ることを余儀なくされる。六さんがケガをした原因は、秋幸という俗な人間が六さんの神聖な場へ乗り込んでいったことによって、神聖な空間の均衡が崩れてしまったからだろう。ここから、秋幸が神聖な空間から拒絶された人間となってしまっていることが読み取れる。

一―ii、神聖なる「土方」の消滅

新宮に戻った秋幸は、他所から流れてきた金儲けのためだけに土方作業に従事する労務者や、その仕事からはじき出された者が、「消しゴムで消されるように消えていた」「路地」の跡地を根城としている姿を目にする。秋幸にとっての聖なる空間であり、出所して戻る場でもある「路地」は消され、その跡は穢されてしまった。利潤が目的の土方は、秋幸が求める仕事ではないため、それを捨てて実父・浜村龍造が行っている材木商を選ぶ。だが、材木商がいくら山中でする仕事だと言っても、利潤だけで動く材木商も自然に逆らう商売であり、俗化した土方と何ら変わらず、快楽を味わうことは不可能である。にも関わらず、秋幸が同じ俗な仕事である材木商を選んだ理由は、兄・郁男が成し得なかった弟殺しを果たし、兄を越えた秋幸にとって、次に越えなくてはならない存在が父であったからだろう。また神聖な空間から拒絶されたことも、俗な山仕事へと転向させ、秋幸を〝父殺し〟へと導くきっかけとなったのではないだろうか。それらを鑑みると、龍造の元へと秋幸を向かわせた六さんのケガは、母系から父系へ、土方から材木商へと移行させる役割も担っていたのだ。

二、「影」を見つけた秋幸

『地の果て　至上の時』では「影」の描写が『岬』『枯木灘』よりも圧倒的に多く、この「影」には特別な意味が込められていると考えられる。それは、自分自身が無意識裡に認めることを拒否しており、自分の表面に出ているものと違う性質を持つとユングが唱えた「影（シャドー）」であろう。[1] スサノオが悪事を繰り返し行ったことで、マイナスを集めるとプラスとなり、八岐大蛇を退治できるまでに至ったように、秋幸も近親相姦や異母弟殺害という禁忌を犯したことにより、邪悪な力を徐々に自身の内面に蓄積していった。その力こそ秋幸がこれまで無意識の裡に認めることを拒否していた自己、つまり「影（シャドー）」だったのだ。ここで、作品冒頭の場面を確認したい。

> 朝の光が濃い影をつくっていた。影の先がいましがた降り立ったばかりの駅を囲う鉄柵にかかっていた。体と共に影が微かに動くのを見て、胸をつかれたように顔を上げた。
>
> （九頁）

この作品を秋幸ではなく「影」から描き始めることは、秋幸の内面に隠されていた「影（シャドー）」＝邪悪な力が姿を現したことを読者に提示する。そして本作では、「影」を手に入れた秋幸が、これまで犯した禁忌の終着点として〝父殺し〟を果たすために龍造に挑む姿が描かれる。従来、『地の果て　至上の時』での龍造は、秀雄が殺されてからの三年の間にメタレベルから秋幸のレベルまで降りてきたと言われているが、果たしてそうであろうか。

初めて秋幸が龍造の元を訪れた時、龍造は秋幸に「わしのものはなにもかも秋幸のものじゃ。土地も財産もこの浜村龍造さえ秋幸のもんじゃ。」と言いながら、うれしくてたまらないように体をゆすって笑い、長年手に入れたくとも叶わなかった秋幸が手に入った嬉しさを露呈している。そしてこの時、自分のものは全て秋幸のものだと言うことによって、一見、龍造が秋幸の秀雄殺害の罪を許したように見せたのだろう。そしてこれらが先行研究において龍造が秋幸のレベルへと降りたとされるゆえんである。だがこれを殺人まで

をも犯した秋幸が龍造と闘うにふさわしい人物へと昇り詰めたことに対する龍造の歓喜と言うことはできないだろうか。だがしかし、龍造は妻と娘を秋幸に対面させ、「どうじゃ、針のムシロに坐っとる具合じゃろ」「そのぐらいの針がなんじゃ」と言う。ここで子、又は弟を殺された二人の女の、無言の怒りと恐怖の視線を秋幸は見せつけられたに違いない。彼女らが秀雄殺害を許していないように、実は龍造もまたその罪を許していないのだ。そのため、秋幸が「針のムシロに坐」らされている感覚を憶えるのは容易に想像できる。ここで龍造は、「そのぐらいの針がなんじゃ」に含意された、「路地」の者らから「蠅の糞」と噂され続ける屈辱や、一時は確かに存在した秋幸との親和的関係のフサによる隠蔽に、長年、耐え続けてきた自分の「針」とは比べものにならないということを秋幸に言わんとしているのだ。後者に関してこの時点では、秋幸は気が付いていない。だが、これは龍造の秋幸に対する挑発といえる。龍造に挑む秋幸は、以下の引用の傍線を付した言葉から窺えるように、

（略）わらい、「龍造よ」とまるで浜村龍造が秋幸の息子だというように呼んだ。浜村龍造が邪意のない子供のような笑みを浮かべるのを見て「刑務所の中で浜村孫一が何遍も夢枕に立つんじゃ」と思いつきを言った。

「秋幸、おまえこそおれの現し身じゃ、龍造はおまえの子供じゃ、と御先祖様が言うんで、おれが阿呆ぬかせとどなると、孫一のやつは何十代もの血の流れで一代ぐらい逆さまになってもかまうものかと言うんじゃ」

浜村龍造は眼をまるくしおどけ、秋幸が歩いて陳列ケースの中から銃床の朽ちた鉄錆だらけのがらくた同然の火縄銃をつかみだし、ふりかえりもせずに玄関の方へと歩くと「おまえはなにもかも俺から取り上げる」とはしゃいだ口調で言う。

（三〇頁）

秋幸は龍造の挑発に乗りながら、たとえ「がらくた同然」であっても龍造が成り上がるまでの苦悩と屈辱が籠もった火縄銃を目の前で奪い、来歴の拠り所として造り上げた遠つ祖・孫一を略奪する。この一連の行動から、秋幸は龍造から全てを奪おうとしていると捉えられる。それにも関わらず龍造がはしゃぐ理由は、二十九年間待ち望んだ秋幸を手元に置く夢が叶い、また『枯木灘』の終盤での「秋

幸は買いだ」という思惑通りに、相手にとって不足のない邪悪な感情を秋幸の中に確認できたからであろう。この時、秋幸と龍造の決闘が始まったのだ。ところで、龍造はフサに対し「秋幸さんはわしの子じゃない。わしの親じゃ」と秋幸の言葉を借り、自ら秋幸との立場の反転を敢えて認める。この反転により、邪悪な存在に成長した秋幸の言いなりになり、龍造は全てを奪われたかのように見せた。だが、これは秋幸の言葉を巧みに利用することによって、秋幸を懐に収めたことを表明しつつ、二人の闘いの開始を宣言している。換言すれば、「二代ぐらい逆さまになってもかまうものか」という秋幸がとっさに思い付きで発した言葉が、龍造の心理を捕らえたのだ。すなわち、絶対悪とされた龍造がメタレベルから秋幸のレベルまで落ちたのではなく、異母弟殺害によって邪悪な力を獲得した秋幸が龍造と闘うに相応しいレベルへと昇り詰めたのである。では、秋幸はいかようにして龍造と闘うのだろうか。

三、龍造を追い詰める秋幸

龍造が子どもの頃に暮らしていたジジの小屋に秋幸が寝泊まりすることにより、ジジの小屋とジジ、つまりジジや龍造の屈辱が詰まった龍造の原点を龍造から奪ったと読み取ることが可能だ。拠り所を奪われた龍造が秋幸にどのように接するか確認していく。

> 浜村龍造は不思議な笑いをつくり、「夢じゃなしに、六か、六らの仲間が秋幸の顔を見に来たんじゃろ」と言い、「秋幸は浜村孫一じゃさか、あれらが顔ぐらいおがんどってもバチは当らん」と独りごちるように言って足音を消した素早さで停めたライトバンに歩く。
>
> （一七二頁）

龍造は秋幸が孫一だと独りごちるように言うことで、自らにそれを言い聞かせるが、自らが発した言葉からも、その場からも逃げようとしている。この龍造の様子は、「不思議な笑い」からも読み取れるように秋幸を自らの手元に置けた喜びを抱きつつも、孫一をはじ

めとする拠り所を秋幸に奪われるのを怖れていると捉えてもよいだろう。

「（略）おまえが秀雄を殺したんじゃが、わしはフサが俺の子を殺したんじゃと思とる。本当に秋幸が殺すんじゃったらこの俺じゃ」浜村龍造は昔の癖を思い出したようにちっと音させて唾を吐いた。

「浜村孫一が浜村龍造をか？」秋幸が言うと浜村龍造は声を立ててわらった。

（一七四・五頁）

この場面も秋幸に対する龍造の挑発である。だが同時に龍造は、ジジに秋幸を会わせられず、また秀雄を死なせてしまった原因が自身にあることに改めて気づいたのではないだろうか。龍造は昔の癖をすることで強がって見せたが、龍造の言葉を利用し、自分が孫一だと言う秋幸の巧みな返しに笑うことしかできないほど、追い詰められて来ているのだ。だが、秋幸が「路地」がつけ火された夢に体の大きな男が出てきたと言うと、

（略）（龍造は：論者注）へっと小馬鹿にした顔をつくり、「また俺じゃと言うんか、体の大っきな男というのは他にもおる。おまえじゃろ」と言う。浜村龍造は秋幸の顔に浮かんだ一瞬の狼狽を見て嬉しくてたまらないように「この孫一殿はまだ昔のタネの時代の事を言うてくれる。まだ芽も出さんタネの孫一殿じゃ」と言う。「タネ殿は分ってくれんのじゃ。負けたら負けた状態でとまっとったら一統が亡びるじゃのに。路地を見た事あるかい？路地を歩き廻った事あるかい？」「違うんじゃ」秋幸は言おうとした言葉を浜村龍造がわざと曲解していると思い腹立たしくさえなって手を上げ言葉を遮った。浜村龍造が黙るのを見て、わざと人を挑発していると思い、秋幸は「その男は確かに俺じゃったんじゃ」と昂ぶった声で言った。秋幸はわざと声を落とし、意識せずとも充分似ている声で浜村龍造そっくりに、「わしは刑務所から戻ってこの足で路地の土の上歩き廻っての、泣いたんじゃ」と言った。「わしはその時、何にでもなれると思たんじゃ。（中略）わしは浜村孫一にもなれると思たんじゃ」

（一七六頁）

龍造はこの時、秋幸が「路地」の者らと同様の認識内に留まっていることを再確認したはずだ。そのため、傍線部にあるように龍造は身体的特徴の類似から秋幸との互換性を引き合いに出す。しかし、秋幸は龍造の思惑の真意に気づき、そして、互いの互換性を利用し、「孫一にもなれる」と龍造の声色をまねることによって、龍造を挑発しようとしていることが窺える。この直後、龍造は秋幸に対して次のように思うのだ。

（略）それが嘘でありたった今思いついた事だろうと察しながら、秋幸の本当を見たというように見ていた。浜村龍造はひとかたならぬ衝撃を受けていた。（中略）佐倉の番頭だった頃の骨格の太さだけが目立ちそこにいるだけでキナくさかった若い頃の浜村龍造のような秋幸が、ぬけぬけと自分が積み重ねて来た事を簡単に、冗談のように横取りしてしまう。簡単に嘲い物にもしてしまえる。浜村龍造は秋幸を見つめたまま、浜村孫一の石碑を建てたのも、織田信長に破れ仏の浄土を求めて有馬へ降りたという伝承の土地を買いしめたのも、血にこだわり秋幸にこだわったのも自分だと思い、「兄やんはわしを脅しとるんじゃの」とつぶやいた。

（一七七頁）

「秋幸の本当を見た」とは、秋幸の邪悪な面である「影（シャドー）」を認めたということであろう。脅されていると龍造が確信を持つまで秋幸の中に潜む邪悪な面は大きくなってきた。そして、弱々しく「つぶやく」しかない龍造の姿からは、自らの過去を秋幸に横取りされた敗北感が垣間見られる。この後、自身の意に反する行動を秋幸が取っても不平を言えなくなる。つまり、既にこの段階で龍造は秋幸に逆らえなくなり始めているのだ。

四、〝父殺し〟の成功

四―i、秋幸を〝父殺し〟へと向かわせる「水の信心」

ところで、「新宮」では土地改造と時を同じくして、「水の信心」という新興宗教が老婆らの間に蔓延した。その上、異母妹・さと子までもが熱心な信者となってしまった。「水の信心」では、水を飲むことによって体の穢れ＝体毒が消えると言われている。さと子は、パンパンをしていた時の性交によって自身の体毒が生じたと考えている。だが、

（略）秋幸はさと子には何一つ罪がないのだと心の中でつぶやいた。（中略）別々の腹に生れた同じ父を持つ子が姦した事が罪ならさと子にではなく男である秋幸にある。それなのに、さと子は自分が穢れていると水の信心をはじめた。（中略）さと子のぬぐい去ろうとした穢れの記憶がそうしたので、罪になるならむしろ秋幸に廻ってくるものだ（以下略）

（二六〇頁）

とあるように、秋幸はさと子の体毒は自分との近親相姦によって生じたと考える。そして、『岬』に描かれているように近親相姦によって龍造を凌辱しようとした自分自身こそが穢れ、体毒を孕むべきだと思う。『枯木灘』で秋幸とさと子が近親相姦を龍造に告白した際、龍造はうろたえも怒りもせず、笑った。この龍造の態度を思い出した秋幸はさらなる怒りを憶えた。そこに、「水の信心」に頼らざるを得ないさと子を知った時、秋幸の中では更に〝父殺し〟を遂行しようとする思念が強くなったと言えよう。そして、龍造から逃げるために養護院に入っていたというさと子の過去を知ったことを契機に、「あれを殺す」と秋幸は〝父殺し〟を宣言する。

四―ii、シシ狩り＝〝父殺し〟の象徴

それを聞いていたかのように、龍造はシシ狩りへ秋幸を誘い、「兄やんの下手くそな鉄砲の流れ弾に当るかもしれんが、兄やんとじやったらシシ追うて野山走り廻っても面白いと思う」と言いつつも「流れ弾じゃないかもしれんがの」と秋幸に自分を撃てとそそのか

す。そして、「龍造は秋幸の動揺を見透かしたように笑」い、かつて佐倉を獲物と誤って撃ちかけた自分のように、秋幸が自身を撃つこともできると言ったのだ。その上、秋幸の〝父殺し〟の方法に気づいているかのような次の言葉を述べたのである。

「こんな弾、逃げていくシシに撃ち込んで殺して喜ぶより、昔やっとったように犬をけしかけて犬に仕とめさせた方が面白いけどの。アキユキじゃったら追い込んで足に喰いついて筋を噛み切って動けんようにするんじゃろけど。弾一発で殺すの味気ないと思うんじゃ」

（三九二頁）

この「アキユキ」とは警官が飼っている犬のことだ。また、秋幸が刑務所に入っている間に竹原の家では、「アキユキ」という綽名の付いた犬を飼い始めたことから、竹原の犬は不在の秋幸の代理と捉えられないだろうか。その上、これら二匹の犬に「アキユキ」という名が与えられていることを併せて考えると、犬は秋幸を示す記号と言えよう。この犬（秋幸）によってシシ（龍造）を追い詰め弱らせ、抵抗出来なくさせる殺害方法こそが、秋幸が成さんとする理想の〝父殺し〟である。よって、シシ狩りは〝父殺し〟の象徴と言えるのだ。

シシ狩りの場面を見る。秋幸は自身が刑務所から龍造の元に来たのは、償いではなく勝利者が略奪するようなものだと思う。兄、弟と順々に殺してきた秋幸の次なるターゲットは紛れもなく父だ。徐々に龍造との距離を縮めていった秋幸は、「俺の獲物はあいつだ、俺の父親だ」と「自然な気持ちで浜村龍造を父と呼べる事に気づ」く。そして息子・秋幸の猟銃は父・龍造に照準を合わせた。「龍造は気配に気づいたように振りかえり、一瞬、驚き、顔が固くこわばり」、「十ほど数える間、浜村龍造は立ちすく」んだが、秋幸は引き金を引かない。それは、猟銃で〝父殺し〟を行うことは、安易な方法であり、「味気ない」からだ。邪悪な存在として成長した秋幸にとって、道具に頼ることなく、徐々に死の淵へと龍造を追いやる〝父殺し〟こそがふさわしい。だからこそ、この場面では、龍造を猟銃の照準に収めて終わるのである。この時、「わしは龍さんをシシと間違えるし、友一はわしをシシと間違えて撃ちかかるんじゃ」と

言いながら歩く秋幸を、龍造は追うだけで何も言わない。かつて、誤って佐倉を撃ちかけたと言っていた龍造ならば、ここで軽口をたたいてもよかったのではないか。だが、何も言わない龍造の様子は、秋幸に抗えなくなったことを示唆する。

そして、シシ狩りの翌朝、龍造は自殺する。夜明け前、秋幸は龍造の書斎に「大きな黒々とした影」が立っているのを見る。その「影がくっきりと全貌を見せる事はない」、そして「影は秋幸に向い合うように立」ち、首を吊ったのだ。この場面において、龍造はなぜ「影」と描かれるのか。それは、「覇王」を僭称していた龍造が、秋幸に拠り所を全て奪われたことにより、内実を失った「影」のみのがらんどうな存在になってしまっていたからであろう。そして、内実のない「影」となった龍造には死しか残されていない。

既に、秋幸の物語に必要なくなったその「影」に声を掛けるか否か錯乱し、ようやく発した言葉は「一つの言葉しか知らないように叫んだ」「違う」だった。だが、この言葉は自殺してはいけないという意味ではない。自らの拠り所を次々と奪われ精神的に追い詰められ、秋幸に対する抗う力を失った龍造は、自殺の道を選んだのである。つまり、龍造は敗北を認めるために死ぬべくして死んだのだ。

ではなぜ龍造が首を吊った瞬間、秋幸は「違う」と叫んだのか。渡部直己は、

> 何が「違う」のか。問題は明らかに「ヨシ兄（龍造の朋輩：論者注）と浜村龍造が摩(す)り変わり、どこかで鉄男（ヨシ兄の息子：論者注）と秋幸の役割が摩り変わった」という「役割」なのだが[2]（以下略）

と、この時秋幸と龍造の親子、鉄男とヨシ兄の親子の「役割」が入れ替わり、後者によって龍造の自殺前夜に〝父殺し〟を成されてしまったことに今気づいたことを指すと論じている。しかし、確認してきたように、秋幸の〝父殺し〟は精神的に龍造を追い詰め、間接的に殺したため成し遂げられており、この説は成立しない。したがって、「違う」の意味は、別のところに求めなければならないのだが、それは二十年前に「路地」の権利が龍造に渡ったことを知った今、その真実を明らかにしてから龍造には死んでもらいたかったという不満だろう。

ここで、〝父殺し〟についての中上の発言を見ていく。小島信夫との対談の中で中上は、

他の終り方（龍造の自殺以外：論者注）も考えてみましたが、結局あれ（龍造の自殺：論者注）以外にないと思いました。[3]

と述べている。さらに、柄谷行人は中上が龍造の自殺について次のように言ったと川村二郎との対談で述べている。

あれは途中までは父親を殺すつもりだったらしいんです。それが途中で殺せないということになって、自殺することになった[4]

中上のこれらの発言は、秋幸が龍造を直接手に掛けるか、それとも間接的に殺すか、どちらかを考えていた証左であろう。龍造が最終的に選んだ終わり方が、自殺であっただけなのだ。したがって、ここまで見てきたように、秋幸の龍造に対する殺意が散りばめられている本作では、龍造の死を描いている時点で、〝父殺し〟は成立しているのである。さらに、「自分がその浜村龍造の息の根を止めた張本人だと思」い、「親を殺してしまったと言葉が浮いて出た。兄も殺したし、弟も殺してしまった」と自覚する秋幸の姿は、秋幸が龍造を自殺へと導いた証しであろう。神話的英雄と言える秋幸の成長譚という枠組のもとにこの作品が成立していることを念頭に置いて読むと、邪悪な力を獲得した秋幸が、「父親を殺」そうと順々に龍造の拠り所を奪い死の淵へと追い詰めて、〝父殺し〟を成し遂げたことが一層明らかに見えるのである。

ではここで、〝父殺し〟について述べている先行論を見ていく。柄谷行人は、

ここでは、浜村龍造は、秋幸の父としてあらわれるのではない。彼は「秋幸さんはわしの子じゃない。わしの親じゃ」とフサにいう。秋幸もまた、一面でそれに合意している。すなわち、幾度も父殺しが暗示されているにもかかわらず、その「父」は、ほとんど最初から「息子」の子としてあらわれている。いいかえれば、最初から、メタレベルが対象レベルに降りてきている。すでに、父殺しは不可能なのである。[5]

と論じている。また絓秀実は、

「父殺し」「王殺し」への衝動は、ここではもはや何ものにも代理されることなく秋幸を支配し、その内面を揺すぶっている。しかし、秋幸自身が「父殺し」を行うことはない。浜村龍造は首を吊って自殺し、それを前にして「違う」とつぶやくのみである。この作品で行われる唯一のそれは、龍造の古くからの「朋輩」であったヨシ兄が実子の鉄男に殺されることだが、それが秋幸の「父殺し」の代理表象になりえぬことは、「今、はっきりと、路地は消える」と秋幸が思うところにも明らかだろう。「路地」とは、まず何よりも、さまざまな代理表象が「父殺し」の主題へと組織され、絞り上げられていく物語空間であった（はずだ）が、秋幸自身は「父殺し」を遂行できず、路地から去っていくほかはないからである。[6]

と論じる。柄谷も絓もテクストに書かれた叙述をそのまま受け取っており、秋幸や龍造が口にする反転の真意も、龍造が自死に至った理由も正確に読み取れていない。本作品を理解するためには、秋幸の行動と龍造との関わりを見て、秋幸の〝父殺し〟と龍造の自殺について判断しなくてはならないのだ。龍造が言う反転は秋幸に対する挑発であり、また秋幸は龍造を追い詰める場面で互いの反転を口にするように、これらは完全に彼らの立場が入れ替わったのではなく、互いの心理的なかけひきであった。したがって、このように秋幸を挑発し続けることが可能な龍造はメタレベルに居続けている。また秋幸は、近親相姦や異母弟殺害などの禁忌を犯し、邪悪な力を獲得することで龍造のレベルへ昇り詰めた。この異母弟殺害をはじめとして秋幸は龍造の苦悩と屈辱の証しであるジジの小屋や、孫一のものとする火縄銃など龍造が拠り所としているものを次々と略奪し、精神的に死の淵へと追い詰めていった。このように言えるのは、龍造を亡き者にする想いを遠い日に刻みつけられた願望のように抱いていることに気づいている秋幸が、一貫して〝父殺し〟を果たすために行動を起こしていると言えるからだ。この遠い日について作品冒頭において次のように描かれている。

いまから思えば何もかもすべて始まってしまっていた。秋幸は腹違いの弟、実父浜村龍造の二男秀雄を、それがまた終りでもあり石を打ちつけてこじあけた新たな始まりのように殴り殺した。

（一二頁）

遠い日とは秀雄殺害以前とわかる。秋幸は密かに龍造殺害の願望を抱き続けていたのであろう。そしてそれが、秀雄殺害時に秋幸の意識の前面に表出したと考えられる。

また、本作品の語り手の一人であるモンが、龍造の死と過去に秋幸が告げられた予言を思い出し、

（略）オリュウノオバが秋幸の顔を見て透視した運命は、すでに取りかえしが効かない状態で起こっていた。だが、まだ小さな芽の状態だった。それから子供の頃から癇症の美恵は気がふれた。秋幸はさと子と姦した。弟の秀雄を石で打ち殺した。実の父親の浜村龍造を殺した。いま秋幸の中で運命の芽は育ち枝葉を広げている。

（四四五頁）

と思っていることからも、秋幸以外の人物も秋幸が〝父殺し〟を果たしたとして認めている。だが、モンは秋幸と龍造が山へ入った時、二人が山へは行かず、有馬の浜村衆と会っていたと想像するなど事実を全く見透せていないように全知全能の語り手ではないため、彼女の想像が誤っている可能性は否定できない。そこから考えると、秋幸の〝父殺し〟の成功は信憑性に欠ける。だが、中上は「路地」のことなら何でも知っていた人智を越えた存在であるオリュウノオバが「透視した運命」を書くことで、このモンの考えが真実であることを担保させる。よって、このモンの想像からも〝父殺し〟は成功したと言えるのだ。

五、邪悪な存在となったことを認めた秋幸

〝父殺し〟を成し遂げた秋幸は、「光が闇の中の影を見つめたままのような秋幸の眼から体の中に入り込む」感覚を憶える。この「闇の中の影」とは、これまで秋幸の心の奥底という闇の中に潜んでいた自身の「影（シャドー）」である。それに光が当たり、その邪悪な自己が、漸く明るみに出たのだ。この後、山中の渓流で水を飲む秋幸は、水面に映った自分の「影」を見る。この水に映る「影」を見る行為こそ、ユングが述べた「水の鏡を覗きこむ者は、なによりもまず自分自身の姿を見る。自分自身に向かっていく者は自分自身と出会う危険を冒」（傍点、原著）すことであろう。[7] 〝父殺し〟を果たしたことにより、自分自身の内に潜んでいた邪悪な存在と出会う危険に立ち向かえるまでに成長し、真の「覇王」・秋幸が誕生したのである。

だが最後、「死んでこそ絶対の勝利だ。死こそ輝かしい名誉だ」と「浜村龍造はヨシ兄をはげますように独りごちる」とヨシ兄の臨終に際して秋幸は想像する。これは男手一つで育てた溺愛する息子に裏切られ、撃たれたヨシ兄に、息子に執着するのではなく、朋輩である俺に付いて来いと思うはずだと想像してのことだろう。仮に死が勝利であるならば、秋幸が聞きたかった「路地」についての真相を語らず闇に葬り、自殺前夜に書類（佐倉から奪った「路地」の土地の権利書か）を片付けていたことから、生きていれば秋幸に様々な真実を訊ねられ、自身の中にひた隠しにしてきた秘密までもを奪われるはずだ。しかし、死によって、真実を葬り去り、沈黙は守られ、龍造はこれ以上何も奪われることはないのだと捉えてもよいだろう。そのため、死が絶対の勝利と思うと想像したのだろう。一般論として、物理的な〝父殺し〟を行うならば自らの手で命を絶った者の勝利で終わる。だが、秋幸が成さんとする〝父殺し〟はこのような誰しもが考える安易な方法ではなく、龍造の拠り所を奪い、精神的に追い詰め、自ら死を選ばせるという手の込んだ方法に拠るものであった。よって、龍造は奪われる物を全て失いがらんどうな存在に成り果てたのだ。仮に自死しなくとも、彼は生きる屍のような存在になっていたに違いない。

そして、龍造の死によって秋幸は龍造が僭称していた「覇王」の座を奪い、真の「覇王」となり、「路地」に火を放つ。これまで秋幸を守ってくれた温かい空気で包まれていた「路地」は、差別されるだけではなく、「路地」の秩序に染まらない者を排除したように、差別を再生産していた事実を「路地」の外部である龍造のもとへ行ったことで知った。この「路地」の本質は、秋幸が龍造と一時は親

和的な関係を築けていたことを隠蔽させた。このように秋幸は二十九年間自らを欺き続けた悪しき「路地」を浄化するために業火を放ったのだ。

おわりに

最後に、本節で明かにし得た神話的英雄としての〈秋幸サーガ〉の構造を提示しておく。神話的英雄である秋幸は、近親相姦や異母弟殺害という試練を乗り越えつつ、自己を確固たるものとし、最後の通過儀礼である〝父殺し〟の段階まで昇り詰めた。秋幸を挑発し続け自らを殺すようそそのかす龍造は、依然として秋幸にとって闘い甲斐のある人物だ。異母弟殺害によって邪悪な力を開花させた秋幸は、龍造の拠り所を次々に奪い、精神的に追い詰めていく。シシ狩りの場面で素直に龍造を父と呼べることに気づいた秋幸にとって、銃を使い一発で殺すという安易な〝父殺し〟は望むところではない。本文に叙述されている龍造の自殺は、拠り所とするものを秋幸に順々に奪われ、精神的に追い詰められた結果、選んだ死であり、この死こそ秋幸の〝父殺し〟である。したがって秋幸の〝父殺し〟は成功したと言える。秋幸は〝父殺し〟を果たしたことにより「影（シャドー）」を統合し、邪悪な部分も含めて真の自己を確立し、さらに龍造が僭称していた「覇王」の座を奪い真の「覇王」となった。この真の「覇王」・秋幸は自らを欺き続けた悪しき「路地」を彼の業火で浄化した。これはカグツチがイザナミを焼き殺したように、秋幸が母なる「路地」を滅ぼしたとも言えるだろう。つまり、本作はクライマックスにおいて〝母殺し〟までもが描かれているため、〝父殺し〟と〝母殺し〟の物語だったのである。

注

（1）ＣＧユング『元型論　増補改訂版』（林道義訳、紀伊國屋書店、一九九九（平成十一）年）

（2）渡部直己「路地の秋幸」（『日本近代文学と〈差別〉』太田出版、一九九四（平成六）年）

（3）中上健次・小島信夫『血と風土の根源を照らす』（『地の果て　至上の時』付録、新潮社、一九八三（昭和五十八）年）
（4）柄谷行人・川村二郎「中上健次・時代と文学」（「群像」一九九二（平成四）年十月）
（5）柄谷行人「解説」（『地の果て　至上の時』新潮社文庫、一九九三（平成五）年）
（6）絓秀実「解説「父殺し」の逆説」（『中上健次選集10　地の果て　至上の時』小学館、二〇〇〇（平成十二）年）
〝父殺し〟については、辻原登も「『地の果て　至上の時』をめぐる十一のプロポ」（『地の果て　至上の時』講談社文芸文庫、二〇一二（平成二十四）年）の中で、「この物語は、父の勝利で終わる。」「浜村龍造は暗闇の書斎で、唐突に秋幸の目の前で首を吊る。息子の父親殺しの願望はこうして父親に先を越され、頓挫する。」と述べている。
また中上は、上野千鶴子との対談『暴力と性、死とユートピア』（山口昌男編『火まつり』リブロポート、一九八五（昭和六十）年）で龍造の死について、魔女ランダの例を挙げ、龍造が母のふりをしているとし、そのため〝父殺し〟は不可能だと述べている。だがエッセイ『もうひとつの国　南の記憶Ⅱ』（「すばる」一九八四（昭和五十九）年十一月）の中で魔女ランダについて述べた際に、「たまたま分かり易い例として『地の果て　至上の時』を使っているだけで、他意はない」としたように、南方を述べる際に母系社会という共通項から「路地」を見出して、『地の果て　至上の時』に触れたのだろう。またこの時、「フサはさながら魔女ランダである」。「秋幸はこの魔女ランダを殺さなければならない」。「逸脱した秋幸の真の敵は母フサであるはずだ」と述べている。「秋幸が犯したとされる近親相姦も、浜村龍造への殺意も、単純な世の中にはびこった父―母―私、あるいは、パパ―ママ―ボクの、まことにキック力のない構造認識から出たもの」と記していることから、中上は龍造を父として描いていたはずであり、母であるため〝父殺し〟は成し遂げられないとは言えないはずだ。
（7）前掲（1）同書

第四章―一節補説

『地の果て　至上の時』論補説―「水の信心」から読み解く〝父殺し〟の成功―

はじめに

これまで秋幸の〝父殺し〟は龍造の自殺によって失敗したと論じられてきた。しかし、第四章―一節で確認してきたように龍造は秋幸に拠り所を次々に奪われ、追い詰められて自死にいたったのだ。この自死による龍造の敗北を裏付ける要素として「水の信心」が挙げられる。「水の信心」はモンや秋幸の異母妹・さと子、義父・繁蔵の姉・ユキらが信仰している新興宗教であり、秋幸自身が直接関わっていないため、これまで「水の信心」に焦点を当てた先行研究は数えるほどしかない。[1] それはこれまで〝父殺し〟失敗説を疑うことがなかったため、「水の信心」が担う役割に関心を向けられていなかったからだ。

本作には死んだ老婆の蘇生を行うために「水の信心」の行に励む者らの姿が描かれている。この蘇生に着目すると、「水の信心」は『枯木灘』の後日譚であり、秀雄の死から七日間の龍造の姿を描いた『覇王の七日』[2]と繋がることに気づく。そこでは孫一が黄泉の国から龍造の書斎に現れるという死者の蘇りが描かれており、『地の果て　至上の時』における秀雄の蘇生を願う龍造の姿と重なるのだ。

また「水の信心」の老婆らの信者間の共同体は内向きに閉じて秩序を保っており、それは「路地」が再差別を生み出した構図に等しい。したがって、「水の信心」は『地の果て　至上の時』を読む上で、その読解を深める要素を担い、かつ〈秋幸サーガ〉において〝父殺し〟と、「路地跡」を繋ぐ架け橋と言えるのだ。そこで、ここでは蘇生に焦点を当てて、「水の信心」を読み解くことで秋幸の〝父殺し〟の成功を別角度から検証し、第四章―一節を補完することを目指す。

一、「水の信心」について

新興宗教「水の信心」に老婆らが次々と入信したのは、土地の「急激な変化と労務者の流入で落ちついていられなくな」り、その不安を鎮めるように「湧き水や清水にあおられるようにして飲み出した」ことがきっかけだった。しかし「水の信心」の起源は、「消毒の臭いのする水道の水がまずくて飲め」ず、体調が悪くなった教祖である斎藤の母親が、日輪教の教えによって「山の下にわいて出る水」を飲みはじめたことにあった。そして、清水を飲んだことで体調がよくなり、体毒が洗い流されて行くと感じた斎藤の母親が人に勧めたことで、「水の信心」が老婆らの間に広まったのだ。

では信者である老婆らは「水の信心」にどのような効能を求め、信仰をするのか。

「体毒が溜って外も内もぶすぶす腐る毒だらけになって呻きもて生きるのと、水のように澄んで透き通って、解脱して、雨にも風にも空気にも生れ変れる身になって死ぬのとどっちがええというの。万物を信じるしかないやないの。一滴の水がそうやって生れ変った万物の魂なんよ。水が命の中心なんよ。砂漠の草かて辛うじて水があるから生えとる」

（二〇七・八頁）

（略）（徹は：論者注）病気や老ボケで死にかかった老婆らに取り囲まれ、一たたきすれば一日長生きする、一つ毒が浄められると、草の茎や竹の枝で叩かれ、ものさしでぶたれ続けている。絶えず水を飲み、痛みと疲労で失禁すると、体毒が出たと老婆らは歯の抜けた口をあけて笑い、喜んでいる。体毒が臭いと神様がバケツの水をぶっかける。素裸にされて土間によこたわり、老婆らはどこもかしこも茎や枝でたたきつづける。老婆らは一日でも長生きしょうと数をかぞえ叩きつづけ（以下略）

（二〇八頁）

この二つの引用箇所から、病苦から逃れ一日でも長生きするため、さらには美しく死ぬために、老婆らが「水の信心」の行に励む様子が窺える。行、とりわけ「老婆らが単純に老いという体毒を取る為に水を飲む行為」について教祖は、「乾いた砂漠の民、科学物質文明に毒された民らの願ってやまない事」だと説く。水道水を飲むと体内に「科学物質」、つまり体毒がたまるため、「科学物質」が何も含まれていない日を浴びた山の下にわき出る水を飲むことで、身体の穢れ＝体毒を薄め、浄化する必要が生じるということだ。

ところで清水によって浄化されるのは人間だけではない。「路地」の消滅によって新宮を去った者たちが再び戻ってきたことを知ったモンが、彼らについて「地表に流れ出た清水や水の信心のせいで幾分は浄められた土地にまた舞い戻って住みはじめた」と思ったように、清水は身体だけではなく、土地までも浄化させる効果を持つと受け取られている。

二、秋幸と龍造にとっての「水」を飲む行為

信者ではない秋幸と龍造は、「水」を飲む行為をどのように見ているのだろうか。

美恵は水道の蛇口をひねり、水でグラスをすすぐ。水をグラスにうける。そして飲む。それは古市が安男に刺殺されて気がふれて以来の癖だった。直接訊きはしなかったが秋幸には、美恵のその行為は察しがついた。また一杯美恵はグラスに水を受けて一気に飲み干す。水で浄め、水によって体の中の昂ぶりを鎮めるのだった。

（3、二九七頁）

この『枯木灘』の一節は、秀雄が五郎に怪我を負わせた件で謝罪に来るはずの龍造を美恵が待っている場面である。「秋幸には」とあるように、この場面の描写の視点は秋幸であり、したがって「水で浄め、水によって体の中の昂ぶりを鎮める」と「水」の浄化作用を認めているのは秋幸である。ここでは美恵が飲んでいる水が清水ではなく、水道水であることから、秋幸は水道水も浄化作用を持つと考えていることがわかる。

一方、龍造は「水」を飲む行為を『覇王の七日』の中で以下のように考えている。

孫一は思いついたように脚を引き摺り、便所のドアをあける。白い便器の前に身を屈め、両手を突き顔を突き出して水に口をつけ、ゴクゴク飲む。水は甘かった。ひからびた皮膚がその水によって、樹木がそうであるように命を取り戻す。孫一は不死の者だった。

（3、「種子」四九九・五〇〇頁）

この一連の経緯を見ていた龍造は、一度死んだ人間のひからびた皮膚＝命が「水」によって蘇ったのを目撃する。この時、孫一が飲んでいる「水」は便器の水である。よって、龍造は決して清らかとは言えない便器の「水」でも蘇りが可能と認識しているのだ。この二

つの「水」を飲む行為から、秋幸と龍造は「水」の質には関係なく、「水」を飲む行為自体に浄化や蘇りの作用があると考えていると言えよう。

三、新宮における清水

「水の信心」で飲む水について、信者の一人であるモンは水道水を飲みながら秋幸に次のように話す。

「（略）山の清水を汲んで飲めと教えられたけど、清水など汲みになど行かれへんから、我流やけど水道の水を汲み置きしてるんやと言うて」

（七四頁）

本来、山の清水を飲まなくてはならないのだが、モンを含めた老婆たちは、「高い所に行くと息切れがするんで無理」なため水道水を飲まざるを得ない。そのような折、「路地」の山跡に清水がわき出ているのを信者らが見つけた。この「路地跡」にわき出る清水が老婆らにとっての聖なる水となる。

この清水は、老婆たちが期待する浄化作用を持つにふさわしい清らかな水と言えるのだろうか。その「水」の性格を確認しておこう。

元々どこを掘っても地表一メートルもすれば丸く角の取れた石が現われた。それはこの土地に人が住みついた頃に、海に広がった熊野川の大きな中洲が流れの変化によって陸になった証拠だと言った。確かにその土地の到るところに清水のわき出るところがあった。水道網が完備すると清水は無用の長物となり、その場所は必ず排水溝の中に入るように道路の線引きをしたほどで、水の信心が蔓延するのは土地の改造がはじまり壊した排水溝のいたるところから水が流れ出したのを眼にする事が多くなっている今、当り前の事だった。建物が壊され道路が壊される事で排水溝の中に閉じ籠めていた水はふたたび頭をもちあげてふつふつとわき出、

乾いた土を濡らし、それがどこよりも早く一面の草むらに路地を変えた理由だろうと秋幸は思い、そのうち行き場のない水は自然に草の根をひたし、根を腐らせ、またどこよりも早く池のように変るだろうと想像した。

（七四頁）

水道網の完備は、新宮の豊富な清水を無用の長物とした。だが、土地改造により新宮の街の至る所で赤土がむき出しになっている中、一度は無用の長物とされた清水は「路地跡」という「乾いた土を濡らし」「一面の草むら」に変えた。一見、清水は更地となった土地を潤し、蘇らせる効能を持っているように捉えられる。しかし、この清水は過剰にわき出ているため、その後、草を根腐れさせ「路地」に再び死を招くと秋幸が予想するように、この清水は土地を再生させる力ではなく、逆に生き物を腐らせ死に至らせる負の力を持っているのだ。このように新宮の「水」は負の力を宿しているのだが、「水の信心」の信者の一人であるモンは、その水を「霊水」と呼ぶ。「霊水」の言葉が意味する通り、病苦を和らげ、死から遠ざける効果を持つ霊験あらたかな「水」と思っていると理解されよう。だが、秋幸や龍造にとって浄化するための「水」は水道水や便器の水でよく、さらに「路地跡」の清水が土地を腐らせる可能性を持っていることに鑑みると、この清水が真の「霊水」であるとは考えにくい。このような「水」を信仰の対象とする「水の信心」は邪教と言うしかあるまい。

四、死者の蘇りを待つ空間

まだどこもかしこも山さえも寝入っている静まり返った中に一人大きな体の男が歩いているのをまるで影の自分を見るように想像し、車に乗る。有馬からその土地へ。水の底から人の生きるその土地へ。

（三〇四頁）

モンには、秋幸が有馬の小屋にもどり、体を洗って服を着替えてから、浜村龍造の家に行くまでの気持ちの変化を刻々と手に取

るように分る気がした。それは神話に登場するイザナミのいる黄泉の国から現し世の土地へ帰還するに要する時間だった。水の底のまだ光も射さない有馬から日が空に満ちる陸の上のこの土地に秋幸は戻ろうとした。

（四一四頁）

この二つは、秋幸が有馬から新宮へ向かう様子を描いている。有馬にはイザナミの墓とされる花の窟や龍造が建てた孫一の碑があり、死を象徴する土地と言えよう。「水の底」から現し世へ蘇るためには時間を要する。そこでは、死者が蘇りを果たす「水の底」のような異空間が必要だ。この異空間と相似した空間として造り出された部屋が作中に二つ描かれる。

一つは、「水の信心」の行で死んだ老婆（教祖・斎藤の母）が腐乱しミイラ化した姿で放置されている部屋だ。その部屋は、「クーラーかけて」「襖をすきまなく目張りし」「黒いカーテンを張りめぐらして外光を遮断」している。その上、さと子がユキにこの部屋を見せる際、「死んだらこんなとこ通って、また地面に出てくる。」と言っていることからも、この異空間は死者の蘇りを待つ場と捉えられるだろう。

もう一つは龍造の書斎である。龍造の書斎は、「入口も壁も防音にして」「外からの物音が遮断され」ており、窓の上には可動式の板をはめ、扉にはカンヌキまで付けた「密閉した人工の暗闇」という空間だ。[3] この書斎は、秀雄の部屋だったのを秀雄の荷物はそのままにし、机と製図板を新たに入れただけだ。このしつらえから、龍造が秀雄に執着し、彼の蘇りのために用意した部屋と考えられよう。その部屋で龍造は次のように「つぶやく」。

（略）浜村龍造の部屋の扉がかすかに開いているのを見た。立ちあがって秋幸は扉に手をかけ、中をのぞいた。中は暗闇そのものだった。秋幸は躊躇したが、素早く扉を開けて中に入った。電燈をつけようと手さぐりで壁をさぐったが見つからず、秋幸は思いついてズボンのポケットをさぐり、モーテルのマッチを出して火をつけた。

部屋の中で動く音がし、あわててマッチを消すと、「秀雄が来たんか？」という浜村龍造の声がする。秋幸が黙って息を殺していると起き上がる音がし、「よう寝てしもた、秀雄じゃったら父やんとこへ来い」とつぶやく。

（一九二頁）

そのような部屋だからこそ、龍造は秋幸の気配を秀雄の訪れと誤解したのだろう。『覇王の七日』にはこの部屋を舞台とした次のような場面もある。

その男（龍造：論者注）は部屋に閉じ籠ったまま眠っては呻き起きては呻いた。（中略）男は、秀雄が黄泉からここへまっすぐ歩いて来るのを待った。時々、孫一が話しかけた。孫一は片脚を引き摺りながら男の足元に坐り、無精髭を撫ぜ、「南無六文字じゃわいよ」と言った。

（3、「水」四九四・五頁）

その部屋の闇は血と同じ濃さの塩だった。（中略）孫一はその黄泉と同じ濃さの闇にいて、深く息をする。

（3、「水」四九五頁）

この『覇王の七日』の描写は、龍造の書斎が蘇りの空間であることを印象付ける。死を象徴する土地である有馬が「水の底」であり、現し世へ蘇えるための時間を要する場所と言うならば、黄泉と同じ濃さの闇を持つ龍造の書斎もまた、現し世への蘇りが期待される異空間である。したがって、「水の信心」の老婆が安置されている部屋と龍造の書斎はどちらも、あの世とこの世が交差する死者の蘇りの空間として造られたと捉えられる。

五、老婆の腐乱死体が示す〝父殺し〟の成功

「水の信心」の老婆が一人亡くなり、死体が腐乱するに任せて放置されているという噂が新宮に広まった際、龍造は老婆の死を嘘だ

と言い張った。

病苦と老いとそれに行の苦痛に立つ事も出来ず呻きながら死んだ者が、腐乱し、病苦に蝕ばまれ老いに襲われて自然に日輪の有難さをとなえ水をのみはじめ、水の信心をはじめた母親のその臭気は四方に散るのに、周りが水の信心をつづけ、母親も死んでなお行をつづけたお陰でよみがえる。死にすでに腐乱さえしていた母親が、水をたっぷり吸った花のようによみがえり、歩き廻り、話している。浜村龍造は悪知恵のたけた斎藤らしい演出だと言った。

（二七三頁）

斎藤が鮮やかな「復活劇」を演出しようとしていると龍造は考えている。それだけでなく、秋幸が斎藤から老婆が死んでいると聞いたと告げても、以下のような態度を取る。

「（略）さと子も巻き込まれとる水の信心も、そこらのドブで死んどる猫か犬の死骸の臭いかいで、死にかけの年寄りらが道場に集っとるという事に結びつけて言うたんじゃ」

「ところが直接、俺は斎藤から聴いた。母親が死んで腐らんようにクーラーをかけとると言う」

浜村龍造はわらう。「それもそのうち母親が生き返ったと言うて出て来る」浜村龍造はそう言ってから話を変えるがと前置きして、もし秋幸の心配ごとが竹原建設の文昭に関してなら（以下略）

（二七〇頁）

ここで龍造は、「話を変えるが」と「水の信心」から話題を逸らしてしまう。なぜ、龍造は頑なに老婆の死を認めず、その話題から逃れようとするのだろうか。また「社教の審議会の神主や医者ら」が「警察に真相を糾明させよ」うとした際に、警察の捜査を阻んだのだろうか。それは、自らも秀雄の死体を現在の龍造の書斎に安置していたことを話し、斎藤の行為を「面白い」と言うように、龍造は邪

教でしかない「水の信心」を信仰してなどいないが、信者ら同様、死者の蘇りを信じ、望んでいたからであろう。そこで老婆の死を認めることは、龍造が願う死者の蘇りが不可能だと認めることになってしまう。しかし、復活するという日、披露された老婆は、「腐乱してミイラになっ」ていた。死者の蘇りが不可能であることが露わに示され、同時に龍造の望む死者の蘇りも不可能であると明らかにされたのである。

秋幸に秀雄を殺され、ジジを奪われ、さらに遠つ祖とした孫一までも奪われた龍造は、死者の蘇生という最後の期待を裏切られて失意の底に落とされたに違いない。当然、龍造の書斎も黄泉の国と繋がってなどおらず、秀雄が黄泉から帰還することもあり得ない。その、もはや無意味となった書斎で、龍造は首を吊る。これは龍造の永遠の死を意味し、同時に、秋幸に対する敗北も表していると言えよう。このように「水の信心」に関わる叙述を読解することで、龍造の拠り所を次々と奪い、自死へと追い詰める秋幸の〝父殺し〟が成功したことが明らかとなったのである。

おわりに

新宮では土地改造と並行して、「水の信心」という新興宗教が老婆らの間に蔓延していた。老婆らが飲む清水は、「路地跡」を一旦草むらに蘇らせるが、過剰にあふれ出してその草を根腐れさせ、最後には死に至らしめており、そのような水を「霊水」として飲む行をする「水の信心」はいかがわしい。一方、秋幸と龍造も「水」の浄化力を認めており、さらに龍造は「水の信心」の信者たち同様、死者の蘇りを信じている。それは遠つ祖とした孫一、秋幸に奪われたジジや秀雄の蘇りを望んでいたからであろう。そして蘇りの期待が、黄泉の国と繋がる空間としての書斎を龍造に造らせた。しかし、同様の異空間に安置された「水の信心」の老婆の遺体は腐乱し、蘇りが不可能だという証しを龍造に突きつけた。それは同時に、秋幸に奪われた秀雄らの奪還が不可能であることを示す。龍造は追い詰められ、蘇りを叶える場ではないことが明らかになった書斎において秋幸の目の前で自死する。「水の信心」の腐乱した老婆同様、龍造が蘇ることもない。これは龍造が秋幸に対する敗北を認めたこと、つまり秋幸の〝父殺し〟の成功を意味するのだ。以上のように「水の信心」に焦点を当てて本作を読解しても、秋幸の〝父殺し〟が成功していると言えるのだ。

注

（1）「水の信心」は、一九七五（昭和五十）年八月に新宮市で起こった、大量の水を飲んで荒行を続ける一家四人が長女を死に至らしめた事件をモデルにしている。

柴田勝二は「〈天皇〉のいない世界―『地の果て　至上の時』の象徴界」（「総合文化研究」二〇〇八（平成二十）年三月）の中で、「水の信心」は「路地」の消滅と因果性があると指摘した。熊野地方のもつ歴史性・風土性と結びつきつつ、実態としては古来の熊野信仰とは、まったく無縁の、あくまでも現在の社会に特有の現象として「水の信心」を位置づけ、信心の主宰者の斎藤自身が「砂漠では乾き、熊野では腐る。腐り続けて水に溶ける」と自嘲的に語ったことを挙げ、「路地」の消滅が喚起する〈天皇―日本〉の幻想が空無化するポストモダン的状況の進行と呼応するものとした。

（2）中上健次『覇王の七日』（河出書房新社、一九七七（昭和五十二）年十月、書き下ろし）

（3）石川義正は「『地の果て　至上の時』論　あるいは「路地」の残りの者たち」（「悍」二〇〇八（平成二十）年十月）の中で、「水の信心」の老婆が安置された部屋と龍造の書斎について、

もし斎藤が母親の蘇りを祈ったというなら、龍造もまた秋幸に殺害された秀雄の蘇りを願い、なかば信じていたといっていい。斎藤が母親の死骸を放置した「マスキングテープで目張りし光が一条もささぬように黒い布を張りめぐらした部屋」は、あきらかに龍造の「核戦争用の避難壕のように見えた」書斎に酷似している。

と述べている。そしてこの龍造の部屋について、以下のように論じている。西村伊作が建てた「居間式住宅」の居間が「家族が集い、主と交わる家庭礼拝の場」と言う「精神的な「家の核」」であり、それに付随して「個人の祈りの場としてプライバシーが守れる部屋、つまり各人の部屋、個室が必要となる」という設計思想を参照して、龍造の書斎が「応接間と書斎とが直接つながった平面構成は、一見すると伝統的な日本家屋の様式、すなわち接客空間を主体とする「おもて」と日常生活空間を主体とする「うち」

に分離された接客重視の格式的な空間構成と解釈できるだろう。しかしどこか異様な印象を与えるのは、龍造が書斎を秋幸以外の家族をけっして踏み込ませない禁忌の場所としているからである。」とし、浜村孫一を象徴する武具を祀っている応接間は宗教的空間であり、「龍造にとって浜村孫一と向き合う公的な「礼拝の場」」と言え、一方で「書斎は龍造自身の「個人の祈りの場」」であると指摘した。この石川の指摘は本論を担保するものである。

また石川は、龍造が「路地」を空き地のまま放置することと、「水の信心」の斎藤が老婆の死体を放置することは、どこか通底しているとも述べている。

第四章―二節　『地の果て　至上の時』論―「路地」の真の姿と秋幸の業火―

はじめに

『地の果て　至上の時』では、初めて「路地」の外部からの視点を踏まえて「路地」のメカニズムが描かれる。その点で本作は「路地」を考える上で非常に重要な作品と言えよう。「路地」とは中上健次が生まれ育った被差別部落を指し、そこは彼にとっての重要なトポスである。その「路地」が本作では跡形もなく消え去っている。この「路地跡」と「水の信心」の二つのテーマが〝父殺し〟という中心テーマに絡み付く形で本作は構成されている。「路地跡」について、先行研究では資本主義システムの侵入との関わりと結びつけられ論じられてきた。たしかに、新宮の土地改造によって流入した資本主義システムの影響も本作から見て取れるが、この「路地跡」を資本主義経済に関わる問題系のみで読解してしまってよいのだろうか。この作品で読み落としてはならないのは、「路地」が持つ差別構造だと考える。本作において、秋幸は悪の権化・「蠅の糞」と呼ばれ噂されていた龍造と、目の当たりにした龍造との相違に気づく。それは、「路地」が龍造に偏見の眼差しを向け、差別していたからだ。これらを前提として本節では、「路地跡」に着目して「路地」のメカニズムを明らかにしながら、〝父殺し〟を果たした秋幸が「路地跡」に放った火の意味を考える。

一、先行研究における「路地」の消滅

まず、「路地」の消滅に関して述べた先行論を確認していく。

菅野昭正は、新宮において土地改造・地域開発が進行し、「路地跡」開発の工事によって、義父や姉の家族のような土建業者は潤っているとし、

> 父親殺しの力線の上を走りつづけるとはいえ、「路地」の消滅、崩壊のあとの物語である分だけ、『地の果て　至上の時』のほうが、現代の鼓動をつよくひびかせているとはたしかに言えるだろう。都市化、大衆消費社会化という近代化症候群が荒々しい威力をふるうその大波のなかに、人々が濃密に共生しあっていた古い小さな生活空間が、まことに呆気なく呑みこまれてしまう災厄。

『地の果て　至上の時』を支える動機の紐の一端は、まことに現代的なその災厄の様態に向けられた視線に結ばれている。[1]

と論じる。この論は、「現代の鼓動をつよくひびかせている」という一文から明らかなように、実世界の動き、つまりテクスト外の情報を、〈秋幸サーガ〉の時空間に持ってきてしまっている。これでは〈秋幸サーガ〉の構造を読み取ることは不可能だ。なぜなら、本作で読み取るべきは、資本主義システムがもたらした「災厄」ではなく、ようやく露呈した〈差別―被差別〉の問題であるからだ。

また、テクスト内に描かれる差別と資本主義の関係について実世界の動きに目配りし言及している櫻井進は、「路地の固定的・差別的な秩序を解体し、無化しようとする浜村龍造の資本主義的運動」を「日本列島改造論に典型的にあらわれた建設業界を中心とした開発」に関連付けている。そして、差異によって差異を解消するため、資本主義とは「つねに新たな差異、新たな利潤の源泉としての差異を探し求める」「永久運動」として存在しうるとし、

このような資本主義の規定にしたがうならば、路地の共同体から差別され、蔑視され、「蠅の糞の王」と呼ばれる浜村龍造が差別を再生産する固定的な路地の共同体を地上げの資本主義によって解体し、「秋幸の出所をあかす路地を消しゴムで消」すようにして消去していった行為は、まさに資本主義的な行為として解釈されなければならない。浜村龍造の熱病としての資本主義は差別を再生産する路地の共同性を解体し、つねに新たな差異を生み出そうとする運動にほかならない。[2]

と、「差別を再生産する路地」に言及しながらも、土地改造と資本主義の関係へと論を進める。確かに、土地改造と利潤の獲得は秋幸と母系一族との決別をもたらした要因の一つである。しかし、全編を通して秋幸と龍造の物語が描かれているように、本作において重要なのは、母系との決別ではなく秋幸と龍造の関係である。これを念頭において櫻井の論を見てみたい。櫻井は、「路地」が元々差別を再生産する場であったと述べてはいるが、「路地」の者から龍造が再差別されたとしか言及しておらず、差別される側である「路地」がなぜ再差別を生み出すまでに至ったのかまでは追究していないのだ。確認しておけば、この指摘には秋幸に対しての言及は見られな

い。ここで言う、差別の再生産とは、差別される側である「路地」が、つけ火の犯人を龍造とし、「路地」に危険をもたらす人物だと噂することにより、「路地」から排除したことである。秋幸もその噂を聞き、「路地」が再差別の構造を持っている事実に気づかぬまま、他の人々と同様に龍造を憎悪し続けたのだ。そして本作において、龍造と接近したことで秋幸は、この事実を知ったのだが、それは同時に、秋幸に彼自身が「路地」に欺かれ続けていたと気づかせることにもなり、彼の「路地」に対する認識を変化させたのである。[3]

二、「路地」内部の差別構造

元々、秋幸が気づいていた「路地」の差別構造は、

（母の再婚により：論者注）他所に住んで眺める路地は不思議なところだった。昼日中から若い衆は仕事にも行かず遊んでいたし、外に出れば身をすぼめている者が路地では大手を振り、肩で風切って歩いていた。何を誇る事があるのか、三十坪、四十坪ほどの土地を所有している、久しい前からそこに住みついていると事ある毎に鼻にかけ、路地に新しく住みついた者らを何となく疎んじた。疎んじられた方は憤慨し、先祖が何様やと思とるんじゃと嘲り笑った。

（三五一頁）

という外部からの差別と、内部における序列と言えるだろう。「新しく住みついた者」は疎んじられはしても、「路地」から排除されるわけではなく、互いに嘲り笑う関係であると秋幸は認識していた。しかし、龍造の元へ行った（「路地」の外部に出た）ことにより、これまで見えなかった「路地」の差別構造が明らかとなる。

（略）秋幸は町の動きからはじき出された者らの分泌する人肌のようなぬくもりの中で育った。他所から流れて来た者には、危害

を加える怖れがなく自分より無能なら、あたうる限り優しく親切だったが、知恵があり元気がある者に対しては排除し、閉め出し、あらん限りの噂の種にした。

（三一三頁）

「路地」の真の姿を、ここで秋幸は捉えた。この「排除」され、「噂の種」にされた者が龍造であった。このように、「路地」が作り出した判断基準によって排除することに対して、自らも差別を受けている「路地」の者には罪悪感が芽生えたと考えられる。そこで、龍造のような「危害を加える怖れが」ある者を悪に仕立て、「路地」を守るためという大義を立てて、自分たちを脅かす者は悪く噂されても仕方がないという口実を作り、自らを正当化したのだろう。こうして「路地」は全ての憎悪を龍造に向けた。それは全ての悪を龍造と関係付けることにより、「路地」の者の間においての仲間割れを防ぎ、「路地」内部の均衡を保つ効果を期待したからだと考えられる。

ところで、秋幸は「路地」が「町の者の悪意の集積」であり、「町の者は山の背後に出来た路地に古くからある町によどんだそれぞれの体毒のような澱のようなものを閉じ籠め、出口を塞」いでいたと感じている。ここに言う「澱」とは、町の者の差別心[4]を含んだ「悪意」を指す。だが「路地」の中にある再差別が明らかとなった今、「澱」には町の者から差別される「路地」の者の屈辱や、「路地」の空気に染まらない者を排除する再差別を正当化し続けてきた「路地」の者のうしろめたさも含まれていると言えよう。よって「町の動きからはじき出された者らの分泌する人肌のようなぬくもり」とも同義となり、「澱」とは町の者の「悪意」に加え、「路地」の者の差別されている痛みと、また自らの不当な差別を正当化しなければいけないというアンビヴァレントな感情をも含んだ存在であるのだ。

三、秩序から抜け出せない人々

「路地」は内部の均衡を保つために、秩序を掲げ、それに染まらない者は排除するという仕組みで成り立っていた。このような共同

体は「路地」に限ったことではない。本作において描かれる「水の信心」を信仰する老婆らの共同体もまた同様の構造を持つ。(5)

「路地」の解体のため一旦は方々へと新宮を去り、再び戻ってきた者たちにおいても不当な差別を正当化してきた罪悪感は消えてはいないだろう。だが、「路地」なき今、たとえ「路地」のような共同体を形成し始めても、かつての共同体は崩れかけてきているため、龍造について調べていた秋幸は元「路地」の住人から龍造に対して悪意どころか好意を持っていたと聞いた。つまり、「路地」の外に出てしまえば、龍造を悪としなくてはならない「路地」の秩序から逃れられ、自由に語ることが許されるようになるのだ。

では、「路地跡」と「水の信心」はどのように関わるのか。信者の老婆らが、「水の信心」の道場の中で何が行われているかを言わないのは、信者の仲間から排除されたくない思いが強かったからだろう。「水の信心」を辞めれば「誰も相手にしてくれ」ず、「病院の待合室に行っても、老人会へ行っても、見向きもされ」なくなる怖れがあるからだ。つまりここには、「路地」で生きていくために虚構の噂を話さなくてはならなかった秩序と似通った秩序が機能しているのだ。

「路地」ではその秩序を守るために虚構の噂を流し、悪（浜村龍造）を仕立てたが、「水の信心」では信仰共同体らの中で生きて行くために水を飲む行を続けなくてはならない。そのため、行を行っていた老婆が死んでいると聞いた際も疑念を口にする者はいなかった。蘇った老婆を披露する日、蘇りという奇跡的瞬間に立ち会うのを断ったモンは、「なんや、信心が足らんのやな」という非難を浴びせられる。不信心とはつまり、組織の秩序に従わないということだ。さと子やユキ以外の信者とモンが関わらないことから、「水の信心」を信じる者は、必ずしもその組織内に入る必要はない。これが「路地」と「水の信心」の差であり、その共同体から離れられぬ場と、必ずしもそこに留まらなくてもよい組織の違いなのである。したがって、その場から容易に抜け出せられない「路地」は、その閉鎖性を強めていった。「水の信心」の信者らから成る共同体と比較することで、「路地」が秩序を厳しく守らなくてはならない空間であることがより明瞭となるのである。

四、龍造像の相違

「路地」の者らによって、秋幸は龍造は悪というイメージを植え付けられていた。よって、秋幸の抱く龍造に対するイメージは、実際の龍造と異なる。以下、その相違を確認していく。

四―i、これまで秋幸が抱いていた龍造像

秋幸はフサや「路地」の者らが語る龍造の悪事を聞き、それらに基づいて浜村龍造の人物像を作り上げていた。それを端的に示したのが次の叙述である。

浜村龍造は最初、町の人間にも路地の者にもどこの馬の骨か分からない、どんな育ちか分からないという名前のない男だった。その名前のない男が自分たちの生活を脅かすのだ。子供の頃の秋幸にもそう見えた。

（八一頁）

（略）昔、浜村龍造を憎悪し疎ましいと思ったのは、フサの言う悪口のせいではなく耳があれば入ってくる噂が原因だったと気づいた。秋幸は生れてから小学二年の年まで路地にいたが、路地は何度もつけ火に遭っていた。その度に壁板をこがす程度のボヤで済んだ。秋幸も含めて路地の者は大火にならなくて済んだと胸をなでおろし、同時に、いつまたつけ火に遭い焼け出されるめに遭うかもしれないと不安になったが、浜村龍造を憎悪したのは、つけ火のたびに犯人は体の大きな乱暴者だと浜村龍造の名が上ったからだった。

（一七五頁）

右の二つの引用からわかるように、子供の頃の秋幸は龍造が「自分たちの生活を脅かす」者だと何の疑いもなく信じ込んでいた。龍造

を憎悪する要因となったのは、フサや「路地」の者らによって無意識のうちに刷り込まれていた噂であったと秋幸は龍造に接近したことで気がついたのだ。

四―ii、実際に目の当たりにした龍造

秋幸はこれまで知らなかった事実を目にすることとなった。その一例が、次の龍造が持っている秋幸の写真である。

浜村龍造は並んで腰かけた秋幸を見てポケットから手帖を取り出した。手帖を開け、中にはさんだ二葉の写真を一人で見てから黙ったまま手帖ごと秋幸に渡した。

一つは秋幸だけがセーターを着て写した五歳の頃のもので、秋幸にもその写真には見覚えがあった。後の一葉は色あせたどこを見ても見覚えのないものだったし、さらに見れば見るほど、人が言い、秋幸が記憶した事実と違っている事に気づいた。真中に腕を組んで立ったのは秋幸らしかったし、左横に立ってかすかに笑を浮かべてるのは紛れもなくまだ充分に若いフサだった。秋幸の背に手を当て右横に立ったのは人を射ぬくような昏い眼をした若い浜村龍造だった。秋幸が三つの時だという。

（九四・五頁）

この後者の写真は、龍造と秋幸とフサの三人によって親和的空間が築かれていた事実を明らかにした。だが、前者の写真に秋幸が一人で写っていることと、龍造がこれを所持していることを秋幸が知らないことから、その後、龍造と秋幸の間に存在していた親和的空間は消滅したと言える。

ここで、後者の写真と出所した龍造が新宮へ戻って来たときの「秋幸が記憶し」ている「路地」の噂との相違を確認する。まず、フサを主人公とする『鳳仙花』には、フサが不在の間に龍造が秋幸を連れに来る場面が描かれる。

（略）龍造が「父やんと一緒に行くか？」と訊き、「父やん、やっともどってきて、秋幸に会えた」（中略）「秋幸、父やんと行て、男同士で暮らそう」と言うと、秋幸は龍造に臆する事もなく、「養のてくれもせんのに、父やんと違うわ」と言った。

（4、二七四頁）

右の引用に見られるような龍造が出所後、秋幸を迎えに来たエピソードは他の作品にも描かれる。[6] ここでは、『枯木灘』を見てみたい。

（龍造は：論者注）フサに「子供をくれ」と申し出、怒ったフサに薪で殴りかかられた。共同井戸で遊んでいた三歳の秋幸に、自分の顔とうり二つの大きな男は「父やんと行こうか」と言う。「父やん、むかえに来た」秋幸は、「やしのてもろてない、父やんとちがう」と言う。この路地に住む者のうち、それを知らない者は誰一人としていないほどだった。

（3、二九〇頁）

これはフサが、否「路地」が、龍造を排除した証拠だと言えないだろうか。よって、先の三人で撮られた写真が「路地」の嘘を示す象徴的な姿を突きつける一葉と言えよう。フサは秋幸に、龍造と三人の親和的空間を一時でも持てたことを隠蔽している。これは、秋幸の目の前で実父が否定されることにフサが配慮し、敢えて事実を隠した一面もあるだろう。だが、それ以上に「路地」の秩序に従わないと、自分たちまで龍造同様に排除される怖れがあると考え、保身のために龍造は悪だと秋幸に語り続けたのではないだろうか。

五、真の秋幸の誕生

龍造が秋幸を「タネ」と呼ぶ場面が描かれる。「タネ」とは、「路地」で語られる龍造の噂を疑うことなく信じていた秋幸を指す。す

なわち、「路地」の秩序に染まらない者を排除していた事実を知らない秋幸のことだ。

前の二葉の写真から「路地」の秩序によって真実がねじ曲げられていたことが明らかになった。この真実とは関係なく、秋幸は龍造を落とし入れようと、龍造であると暗示しながら体の大きな男が「路地」につけ火する夢を見たと話す。しかし、「孫一殿はまだ昔のタネの時代の事を言うてくれる」と「路地」の秩序から抜け出せていないと龍造は返した。「路地」の秩序とは関係なく、秋幸は夢の内容を龍造に伝えることで、彼を追い詰めることが目的だった。だが、夢で見たつけ火の犯人はお前だと言わんとする言葉尻を逆に龍造に捕られ、体の大きな男はお前もだと言い返されてしまう。龍造が意図的に自分の言葉を曲解していると思った秋幸は次のように言う。

「わしは刑務所から戻ってこの足で路地の土の上歩き廻っての、泣いたんじゃ」と（秋幸は：論者注）言った。「わしはその時、何にでもなれると思たんじゃ。歩き廻って泣きもての、穢多じゃ、四つじゃとののしられて、それでも蓮池の水で革なめししとった者にも、新年の松の内に舟町の材木屋の前で材木屋が速玉神社の参詣者にふる舞う餅一つまぎれてもろたというだけで袋叩きにおうて片端になった男にもなれる。その材木屋、誰じゃと思う？友永じゃ。わしは浜村孫一にもなれると思たんじゃ」

（一七六頁）

この「何にでもなれる」とは、差別される「路地」の者はもちろん、真実が明らかとなった今、「路地」の内部から再差別をする者にも、また「路地」から再差別をされる者にもなれるということだ。そしてさらには、蔑まれる龍造が拠り所とする孫一だと名乗ることで、彼から孫一を奪うこともできるということだろう。

ここで「路地」の真の姿を知った秋幸の「路地」に対する想いを見てみたい。

秋幸は美恵の話を耳にして、美恵はかつて住んだ家がなくなったのを悲しんでいるが、路地が消えた事を当り前だと思っていると

気づいた。（中略）自分一人が生きているのだ、と独りごちた。秋幸は二十四歳で縊死した兄の郁男を思い出し、郁男とて、今生きているなら秋幸のように考えただろうと思い（以下略）

（一五四頁）

秋幸のみ「路地」が解体される様子を見ておらず、「路地」の消滅を当然と思えない。そのため、ただ一人、「路地」が消えたことを悲しみ、「自分一人が生きている」と、「路地」に対する他者との想いの違いに気づくのだ。ところで、この感情を郁男なら理解してくれるはずだと秋幸は思う。母から捨てられたも同然の扱いを受けた郁男は、その時、「路地」の温もりを救いとして生きていたのではないだろうか。そのため、自らを「路地の私生児」とかつて思った秋幸は、「路地」の消滅を見ることなく死んだ郁男も自分と同じ想いを持つと思ったのだろう。

ふと、誰（文昭：論者注）が乱脈経営をしようとヤクザに狙われようと路地の者には関係なかった事だと思い、美恵が呉服店の中に入っていくのを見て、路地が消えたのなら血のつながりも消えるべきだと独りごちた。

（一五八頁）

このように「路地が消えたのなら血のつながりも消えるべき」と秋幸は思う。自らを「路地の私生児」とした彼は、「路地」を介して美恵らとの血の繋がりを感じていたと考えられる。よって、「路地」無き今、彼女らとの繋がりを証明するものは消えてしまったのだ。その上、彼女たちは彼の大切な拠り所であった「路地」を金に換えた。この事実は、母系で繋がる者らと秋幸が縁を切る要因の一つとなったに違いない。次の秋幸の言葉では、母系と繋がる秋幸の死が語られる。

「（略）龍さんが自分の血じゃと母親のかげにかくれて見とった秋幸は路地が消えたのと共に死んだという事じゃ。わしは生きと

るし、わしは確かに浜村孫一の血を受けつぐ浜村龍造の子じゃが、獣同然の四つじゃ、ユダヤ（ジュー）人より一つ落ちる十一（ジュウイチ）じゃという事の方がおうとるという事じゃ」

（一七七頁）

「母親のかげにかくれて見とった秋幸」とは前述した差別構造に基づく虚構の噂で龍造を悪の権化・「蠅の王」と信じていた秋幸を指す。その構造を知った時、「路地」を優しい温もりのみに包まれている場と思っていた「路地の秋幸」は死んだのだ。だが、龍造の子として差別されるよりも、差別され続ける「路地」の血を受け継ぐ者として生きる方が自分にはふさわしいと話している。この真意は、「路地」の本質を知り、それと向き合える真の「路地の秋幸」が誕生したことの表明であると言えよう。

六、龍造の「路地」に対する憎しみ

龍造の「路地」に対する憎しみを、彼と接近したことによって秋幸は知った。龍造は秋幸に、

「タネ殿は分ってくれんのじゃ。負けたら負けた状態でとまっとったら一統が亡びるじゃのに。路地を見た事あるかい？路地を歩き廻った事あるかい？」

（一七六頁）

と質問しているが、「路地」に住んでいた秋幸が「路地」を見ていないはずがない。「路地を見た事あるかい？」とは、龍造のような「路地」の秩序を守らない者を排除していた「路地」のメカニズムを知っているか秋幸に問うているのである。この時、秋幸はこれに気づいている。だが、それは龍造の元に身を寄せて始めて気づいたのであって、「路地」があった頃、秋幸はそのメカニズム（＝再差別の

構造）を微塵も感じていなかった。

自らを閉め出し、秋幸に虚構の噂のみを吹き込み、真実を隠蔽したこのような「路地」の実体は、自身を嘲った「路地」に対する龍造の怒りを生み出し、「路地」への復讐へと向かわせた。こうした龍造の行動は、彼と祖父を蔑んだ有馬に対しても同様だ。

乞食同然の暮らしや有馬の里の者へのジジの怒りが、ペテンをやり手形パクリをやり、有馬の土地を買い占めて空地にし、路地を払って更地にする血も涙もない浜村龍造をつくったのだと気づいた。浜村龍造は地表から何もかも消し去る。蜜柑の木を一本残らず抜き去る。

（三七五頁）

ここから龍造の復讐方法は、自分を排除した者の土地を更地にし、それをその者らに見せつけることだと分かる。さらに「路地」に対する復讐はこれだけでは終わらない。次に見られるように、龍造はフサの親族を騙し「路地」を更地化するのに利用した。

甘い汁をあてにして率先して協力した文昭や実弘を丸めて交渉の矢面に立たせ、安い金で立ちのかせ、家を潰し、山を取って更地にする。浜村龍造は意味があってそうしたのでない。蟻が巣を作るようにただそうしたかったのだ。意味はむしろ秋幸だった。意味の亡霊のように秋幸は路地跡を誰の所有でもなくし、そこに小屋をつくって住む者らの共有にしようと思っている。秋幸はそれをさと子にむかって浜村龍造を殺す理由として言いたかった（以下略）

（三七五頁）

龍造にとって「路地」を更地にする行為は、虚構の噂を流し続け、一時でもフサと秋幸と親和関係を築けた事実を隠蔽した「路地」に対し、「蟻が巣を作るように」本能のまま彼らに恨みや怒りをぶつけることであり、それが龍造の復讐と言えるだろう。つまり、龍造

は特別な「意味があって」「路地」を更地にしたのではないのだ。

対して「意味はむしろ秋幸だった」とあるように、「路地」の更地化は、秋幸にとっては重大な出来事である。なぜなら今や、「路地」の温かさは差別の痛みを分かる者同士が身を寄せ合うことによってだけではなく、「路地」が持つ再差別の構造による閉じた仲間意識からも生み出されていたことに気づいているからだ。よって、このように二重に自らを欺いた悪しき「路地」を消し去ること＝浄化に秋幸は意味を見いだしたのだ。

「路地」の浄化を成功させるために、秋幸は今以上の邪悪な力を持たなければならない。秋幸は近親相姦や異母弟殺害などで徐々に悪の力を手に入れ、自身の内に潜む悪の存在を自覚した。今や秋幸が、悪しき「路地」を上回る邪悪な存在になる方法は、〝父殺し〟しか残されていない。逆に言えば、〝父殺し〟を果たさなければ、秋幸は「路地」を浄化出来ないのである。

七、真の「覇王」・秋幸による「路地」の浄化

『枯木灘』での秀雄殺害に始まり、本作では、龍造が幼い頃暮らしたジジの小屋で寝泊まりすることでジジを、孫一と名乗ることで孫一をと、秋幸は龍造の拠り所を次々と奪い、龍造を心理的に追い詰めていく。そして、秋幸に抗う力を失った龍造は、「水の信心」によって証明された死者の蘇りが不可能な自室で、秋幸を目の前にして首を吊る。この行為は、龍造の敗北であり、したがって秋幸の勝利を意味する。つまり、〝父殺し〟は達成されるのだ。こうして秋幸は、龍造が僭称していた「覇王」の座を奪い、真の「覇王」となったのだ。この真の「覇王」・秋幸が最後に果たさなければならない使命は、悪しき「路地」の浄化である。

七―i、元「路地」の住人の帰還

「路地」の消滅により方々へ散った元「路地」の住人が、次々と新宮へ舞い戻ってきた。彼らは、昔「路地」が造られたときのよう

に、小屋を建て、再び共同体を造り始めた。これは、偽「路地」の誕生を意味する。

そして、元「路地」の住人が新宮に帰還し始めたことを契機に、異母妹・さと子と共に秋幸は龍造の過去を調べ始める。このとき、元「路地」の住人の女は、自身も浜村衆だと口にする。実際は龍造と同じ有馬出身というだけで、これは秋幸をからかうための嘘であったが、「路地」があった頃ならば、「路地」から排除されることを恐れて、浜村衆であるなどとは言わなかったであろう。元「路地」の住人と関わることにより、秋幸の前に悪しき「路地」が姿を現したのだ。

秋幸が真の「路地」を知った頃、モンは次のような感覚にとらわれる。

歩いているモンの体を包み込むように音が立つのに気づき、驚いて振り返ると、乾き、身を起した路地跡の雑草の茂みが、青空に照らされてそうなったように、ことごとく枯れて黄金色に変わり、静かに波立っていた。音はその黄金の茂みの方から日の泡立ちの音のように聴えた。モンは何かが起るのかもしれないと眼を放せなかった。膝を折ってかがみ手さぐりで壊れた泉の石をどけた。路地跡に何の変化も起らなかった。モンは石をどける手を止める。そこだけ日が強く当っているように輝く黄金の枯れた茂みに何の変化もないから、一層大きな力が働いているように感じ、ふと、路地そのものが宙にせり上る気がする。

（三七七・八頁）

モンはこれまで「路地跡」と認識していた場所に「路地」が現れ出た錯覚を抱いている。この「路地そのものが宙にせり上がる」という表現は、「路地の秋幸」が「路地」の本質を理解したことにより、「路地」がその真の姿を現したことを示唆していると捉えられないだろうか。そして、これまで彼を騙してきた邪悪な「路地」に対して秋幸が何らかの行動を起こすとモンを介して予告していると考えられる。そして、秋幸は次に見るような行動を起こすのだ。

七―ii、「路地跡」放火から見える新たな「覇王」としての秋幸

龍造の朋輩・ヨシ兄が息子に撃たれ危篤になったことで「路地跡」を守る者がいなくなった。これは、龍造の「路地」を更地のまま放置する企みの失敗を意味する。ヨシ兄が不在の今、「路地跡」に残るのは他所から流れて来た浮浪者だけだ。ここで、秋幸と浮浪者との会話を確認する。

「阿呆らが何人も来とった」と（浮浪者が：論者注）言う。

「阿呆が、かい？」と（秋幸が：論者注）合の手を入れると、浮浪者は内緒話をするように身を近づけて小声で言う。

「阿呆としか言えんわだ。地滑りするとこに小屋立てて。ここに住まして欲しなら、俺らみたいに鮪箱で作ったらええのに、わざわざこだわって、ここの親分に追い出されたんじゃ。あれら阿呆じゃ。屋根なかったらあかん、畳なかったらあかんと言うて、何をぜいたく言い腐ると追い出されたんじゃの。ジンギスカンじゃと言うとったら、駅にも町にも近い一等地で住んでおれるのに」

（四三六頁）

浮浪者らは「路地跡」を元「路地」の住人から奪った上に、彼らを阿呆呼ばわりする。そのような彼らは、「ジンギスカン」と言ってさえいれば「乞食と同じ」だが、市から補助をもらえる粗末な家に住んでいる者とも「同じ事」であり、さらに「わしらの方がおまけがついて、自由」と豪語している。だが、「自由」でいられるのは「路地跡」を守るヨシ兄がいてのことで、ヨシ兄が危篤の今、この「自由」が守られなくなるのは自明のことだ。

そして、ヨシ兄の臨終と時を同じくして、「路地跡」が燃え上がる。モンはヨシ兄の病室から「路地跡」へ駆け付けたときに次のような情景を見る。

燃えているのは路地だった。生えだした一面の枯草が炎を上げているが、見つめているとそこにかつてあった路地の家々が現われ

る。

（四五二頁）

モンが見たのは燃えている「路地跡」ではなく、燃えている「路地」だ。前述したように、真の「路地の秋幸」が誕生した際、モンは「路地」が「宙にせり上がる」ような感覚を抱いていた。秋幸が「夕方にはモンにもどっていろ」と「謎のような言葉を言っ」て姿を消したことも相まって、火を放ったのが真の「路地の秋幸」だと思い、「路地の家々」の幻影を火の中に見たのだろう。

差別され、同時に差別する二つの顔を持つ「路地」の真の姿を秋幸は知った。この本質を見極めたとき、そのような邪悪な「路地」に対する敵意が秋幸の中に芽生えたはずだ。そして〝父殺し〟を果たし、より邪悪な存在へと昇り詰めたことで、秋幸は浄化、つまり悪の力を以て悪を征するために業火を放ち、邪悪な「路地」を焼き滅ぼしたのだ。[7]

そして、〈秋幸サーガ〉は次のように幕を閉じる。

モンはなお眼で秋幸をさがし、立っている自分の背後から、射すような眼で誰か男が見つめている気がして、何度も振り返った。そこに若い、生きている事そのものが苦痛のような、馬のような張りのある男はいなかった。消えかかったところから炎が上ると、それを煽るように声が立つ。一瞬、上半身裸になってぬらぬら光る汗にまみれて大鋸屑（おがくず）をつめていた若い男らがヤジ馬の中にひそみ、煽っている気がする。炎は立ちあがる。風に乗ってななめに走る。男らが昏い眼に炎を映し、いま歩いて山を越えてきてこの土地にたどりついたように用心深く立っている姿を思い描く。

（四五四頁）

この場面は〈秋幸サーガ〉の集約と言っても過言ではない。モンの幻視によって、母や姉に呪縛され、また兄や実父にとらわれ続け「生きている事そのものが苦痛」であった秋幸、「汗にまみれて大鋸屑をつめていた」若き日の龍造が描かれる。さらに、織田軍から敗走

し「山を越えてき」た孫一一行が山から降りてくる原初の姿までを幻として見ることで、この終局において〈秋幸サーガ〉が物語の始原の姿を現したとも考えられる。言わば、円環構造によって〈秋幸サーガ〉は成立していたのである。

おわりに

本節で読み解いてきた「路地」の解体による「路地」の発見とは、秋幸が龍造に接近したことで「路地」の差別構造を認識したことだ。「路地」の住人らは、「路地」の秩序を守るため、その秩序に染まらない者を排除し、虚構の噂を立てて自らの罪を隠蔽した。龍造に接近するまで秋幸は、弱者を救う温かい「路地」のみ見ていたが、この構造に気づいたとき、「路地」はその温もりの下に邪悪な一面を潜めたアンビヴァレントな姿を秋幸に見せた。このような存在として「路地」を認識した秋幸こそが、真の「路地の秋幸」なのである。

本作で秋幸は龍造をがらんどうな存在に追い詰め、自殺を強いることで〝父殺し〟を果たし、龍造が僭称していた「覇王」の地位を奪った。真の「覇王」となった秋幸は、龍造が果たせなかった「路地」の焼き尽くしをやり遂げた。しかし、龍造が放とうとした火と秋幸が放った火の重さ（＝意味）は異なる。異母弟殺害によって自らの内に目覚めた秋幸の悪は、さらに〝父殺し〟を果たしてより強大な力を得た。そのような秋幸の火は、邪悪な「路地」を焼き尽くし、浄化する力を持つ。対して、自らを排除した場に対する報復としての龍造の火にはそのような力はなかった。龍造を越えた真の「覇王」の火によって、秋幸は「路地」を浄化したのである。ヒルコとスサノオという負の神を生み出したイザナミを火の神・カグツチノミコトが焼き殺したように、秋幸も虚構の噂が渦巻いている母系のトポスである「路地」を自らの放った火で焼き滅ぼし、新宮から去ったのだろう。かくして、〈秋幸サーガ〉は終局を迎えたのである。

注

（1）菅野昭正「地の果ての向こうには……――中上健次『地の果て　至上の時』を中心に」（「群像」一九九一（平成三）年十二月）

（2）櫻井進「路地論――中上健次あるいは資本主義と共同体」（「アカデミア、文学・語学編」一九九七（平成九）年九月）

（3）「路地」と資本主義の関わりについて違う視点から論じているものもある。木股知史は「『地の果て　至上の時』――空洞の物語――」（「国文学　解釈と観賞」一九九三（平成五）年九月）において、龍造は愛憎の対象である「路地」の消失により、「路地」への憎悪が宙吊り状態になったとし、自ら手に入れた「路地跡」を再生し得ない無力感から、彼は内部に空洞を抱き衰弱し、自死したと述べている。つまり、龍造は秋幸の力によるものではなく、資本主義経済が背景にある土地改造によって殺されたということだ。よって、秋幸の〝父殺し〟は失敗に終わったことになり、その点でも本論とは立場を事にする。

（4）「路地」の者に対する町の者の差別意識は『枯木灘』において、浜村龍造が材木屋を倒産させた挿話に描かれている。龍造は元お大尽で乞食のキイやんを持ち出し、「キイやんみたいにうろうろしとったらええがの」と材木屋を嘲う。それに対し、材木屋は「キイやんの方が芸者の下駄の鼻緒すげるよりましじゃ」と返した。『枯木灘』の初出には「マスターは路地の入口に一軒昔からあった靴屋の次男だった」という叙述があることから、下駄の鼻緒をすげる者とは「路地」の者を指していると言えよう。よってこの挿話には、「路地」の者よりも乞食のほうがましであるという町の者の「路地」の者に対する差別の意識が含まれていたのだ。

（5）「水の信心」は、秋幸の〝父殺し〟の成功を読み解く助けとなる要素を担う。第四章――一節補説を参照されたい。

（6）『火宅』、『荒くれ』、『枯木灘』、『覇王の七日』、『鳳仙花』など作品の垣根を越えて、刑期を終えた実父が我が子を連れに来るエピソードが描かれる。

（7）秋幸は『岬』での近親相姦や『枯木灘』での異母弟殺害などの通過儀礼とも呼ぶべき試練を乗り越えて、邪悪な存在へと成長し、龍造のもとへと身を寄せた。そこで龍造が拠り所とする孫一やジジなどを次々と奪うことで自死へと追い詰めて、より強大な悪の力を獲得したのだ。この秋幸の成長はまるでスサノオの成長のようだ。スサノオが根の国を治めるように言われたり、高天原から追放されたりするのはスサノオにとっての試練である。スサノオは、泣きつづけることで国民を殺し、木々を枯らしており、高天原では御殿を穢すなど悪行の限りを尽くした。高天原を追放されたスサノオが八岐大蛇を退治できたのも、試練を乗り越えて行く

過程で八岐大蛇以上の悪を手に入れたからだ。悪はそれ以上の悪によって征することができるため、秋幸もこのように「路地」の邪悪さ以上の悪の力を獲得し、「路地」を浄化したのだ。

第五章―一節　『鳳仙花』論―父の欠落から見る天皇制批判―

はじめに

『鳳仙花』は昭和五十四年四月十五日から十月十六日にわたり全一八一回、「東京新聞」に連載された中上健次初の新聞小説である。本作は中上の母をモデルとしたフサの十五歳から三十四歳までの十九年間を描く。

従来、本作における研究は主に〈女〉としてのフサや〈母〉としてのフサに焦点が当てられてきた。勿論、本作の主人公が女性であることから、このような傾向となるのは致し方ない。だが、論者は兄や夫、息子などのフサの周囲にいた男達がフサに与えた影響と、中上が男達に持たせた意味を看過してはいけないと考える。

フサは奉公のために来た新宮で初潮を迎え少女から女へと成長し、そこで出会った兄の朋輩・勝一郎と結婚し母となる。少女から母へと成長していくフサのそばにいた勝一郎は彼女にとって特別な存在であるはずだ。しかし本作を読むと、勝一郎のイメージ、特に子供が産まれてからのイメージは薄く、対して、勝一郎の死後、フサと関係を持った龍造には鮮明なイメージが与えられる。だが、書き分けられている男達は共通して父というイメージを持たない。父の描写を少なくすることによって、中上は何を表現しようとしたのだろうか。そこで、フサの周囲に存在する男たちだけではなく、「路地」に脅威を与える存在として登場する佐倉も含めて、本作における男の意味を検討した上で、本作のモチーフを考えたい。

一、先行研究の確認

管見の限りでは、『鳳仙花』の先行研究は七本と少ない。主な中上健次作品について論じてきた柄谷行人なども本作については論じてはいない。先行研究では主に、勝一郎の子を産むことによって「路地」の人間となったフサが、勝一郎の死後、父親のいない秋幸を産むことによって母の物語を反復をしているという神話的な物語に、フサの兄・吉広と勝一郎の相似と彼らと龍造の差異をフサを介して関連づけて論じたものである。

主な論として以下が挙げられる。中根隆行は古座も「路地」であるとした上で、本作を「路地」の構築という観点から論じる。そこ

では、フサが勝一郎の子を身籠もることによって夏芙蓉のにおいを感じられるようなったことは、彼女が「〈路地〉の住人として登録された」ことだとし、この「〈路地〉という場の設定を、確固たるものに描き込めたのは、フサの兄吉広と西村勝一郎を相似する人物として造型したから」だとしている。また母の物語の反復の観点からも、「フサから秋幸へと私生児の系統を紡いでゆく」とし、私生児を産んでしまう「母の物語を継承することによって「女系の親和力」をより強固なものとして構築した」と論じた。[1] 対して、栗坪良樹は、フサには男がいる家というものが必要であるとしたため、女二代にわたって女手一つで支えた生活を自分流に作り直し、二代の運命に逆らい、母の反復を脱却したと指摘している。[2]

先行研究で論じられる男の位置づけについては、フサを「路地」の人間とする機能として中根などに指摘されている。その他に八木直也は、子が親を暴く物語とし、母の物語を反復するだけではなく、それを乗り越え生きることを吉広や龍造の存在から論じる中で、吉広はフサの庇護者や「代父」としての機能を備えた存在であり、また勝一郎が吉広の代替であると指摘する。[3] しかし、フサの周辺に描かれる男たちの役割はフサを「路地」の人間としたり、彼女を庇護したりするだけであろうか。「路地」という場と、本作で語られる佐倉の存在などから、男たちの存在はもっと大きな役割や意味を持つのではないだろうか。そこで本節では、男たちの描かれ方を見ることによって、男の役割と彼らが本作に描かれた意図を確認する。

二、中上健次の天皇に対する認識

そのために、まず中上の天皇に関する認識を確認したい。中上が最初に天皇に関して述べたのは、『紀州　木の国・根の国物語』の『松阪』の章である。次の引用は、影の部分を見ることのできない市長（治者）が被差別部落調査を主導したことに対する発言である。

日本的自然において古代の天皇とは、日と影、光と闇を同時に視る神人だったように思う。賤民であり同時に天皇であるとは、謡曲「蝉丸」を待たずとも、光と闇を同時に視る人間の眼でない眼を持つ神人のドラマツルギーであるが、「これはあきまへん、と

こちらからサジを投げてかかる」という治者は、光と闇を同時に視る不可能な視力を強要されていることに苦悩がある。治者が、差別者であり同時に被差別者である神人でない故に、治者のやる事はことごとく玩物喪志であり、改良主義であり、せいぜい善意でしかない。ということは、被差別は差別するということである。被差別こそが差別しなければならぬ宿命と言い直そうか。この日本では文化、芸能、信仰等において、被差別者は差別するというのが一種のテーゼとしてあったはずである。[4]

（14、五九九頁）

日本における文化を見た時、天皇も被差別部落も共に人間の領域の外に生きる神人として生きている。このような関係を中上は「紙一重で接している」[5]と述べた。

私も父も被差別部落民である。私たちは有形無形の差別を被り、目撃し、人権を侵害する事や醜い差別事象に生涯闘い続けるしか生きられないという宿命を刻印されている者らであるが、父に自然の涙を流させる天皇は、また自然のようにこの社会に存在する差別の最初の発信地でもあるからである。

ただ、この発想は日本社会を天皇を頂点とする樹木状に描いての事で、樹木状の物を横に倒す発想に基づけば違って来る。両横に位置し、社会をブックバインドのようにはさみ込む天皇と被差別部落は、さながら、日本社会の二つの外部のような形を取る。

ここでは、天皇が差別の最初の発信地どころか、天皇もまた自然のように存在する差別を被る場所だという事になる。（中略）天皇の崩御を知り、故郷の熊野の山河を見て、私は自分を逆立ちした天皇主義者だと思ったのだった。逆立ちという言葉が適切でないなら、ねじまがった、と言い換える。ねじまがった天皇主義とは、天皇を徹底的に文化の文脈に置いて読み込む事であり、一つの外部に従属し、融合し、軋むもう一つの外部として自分をはっきり自覚する事である。

天皇は言葉である。しかし文化の文脈においては天皇は自然ではない。草を草と名づけるのは天皇であるが、草は天皇ではない。父の自然の涙を美しいと感動しながら物足りなく思うのは、文化の文脈では天皇の崩御には、言葉をもって答えるしかないと思うからである。[6]

（15、五八四・五頁）

文化の文脈では天皇と被差別部落は共に日本社会の外部に位置し差別を被る。しかし、「天皇は言葉である」と考えるように、神人である天皇にのみ名づけの行為が許された。この行為について神宮文庫を訪れた際、中上は次のように述べている。

私がここで見たのは神宮あるいは「天皇」の言葉、詞に対する自信である。天地の分かれる創世記の時代からコトノハを持っている。光を光と、闇を闇とコトノハを与えた自信である。天皇がコトノハ、文字という言葉によってこの国を治めている、と思ったのだった。（中略）言葉を統治するとは「天皇」という、神人の働きであるなら、草を草と名づけるまま呼び書き記すことは、「天皇」による統括（シンタクス）、統治の下にある事でもある。では「天皇」のシンタクスを離れて、草とは何なのだろう。[7]

（14、六〇六・六〇九頁）

この国の言葉は天皇の統治の下でのみ成立する。「「天皇」の言葉による統治を拒むなら」「別の、異貌の言葉を持ってこなければならず、「日本語を使っている限り、天皇制から逸脱できない」[8]のだ。そのため中上は「天皇を逸脱しては何も書けない」と繰り返し語り、自身を「天皇主義者」と呼んだ。しかし、この時注意しなくてはならないのが、この感覚が「立憲君主論としての天皇というのは一切、と」っていない、すなわち、政治に関わる言説ではなかということだ。[9]

文化の面から見た際、同じ位相に置かれている天皇と被差別民ではあるが、両者の間にはコトノハや文字を所有しているか否かという差異が存在する。そしてこれらの所有の有無が、差別者か被差別者かを分けていると中上は言及し続けた。よって、中上作品を読むに当たって、コトノハや文字が作中でどのように扱われているかに注意する必要がある。

三、章立てと男達の登場回数の確認

フサの周囲に描かれる男達の登場頻度を新聞連載時の連載回数（連載日数と同じ）から確認する。

章	櫛	川	町	水	血	男	兄	花	光	風	日	子	熱	雨	松の雨	血の熱	水の日	計
連載回数	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8	6	10	28	28	24	181
吉広	3（2）	6（1）	7	5	4（1）	（4）	2（4）	⑦【死】	②	④	②	①	①	④	④	③	⑥	27（12）㉞
勝一郎						4（1）	2（3）	4	6	6（1）結婚	6	7（1）	5【死】	⑧	⑪	⑦	③	40（6）㉙
龍造															17	（17）逮捕	6（7）	23（29）
繁蔵																13（3）	6（2）	19（5）
郁男											1	7	3（1）	7	11（5）	6（3）	12（2）	47（11）
秋幸																22（1）	20（2）	42（3）

※（　）内は男が生きている間にフサが男を思ったり、会話に登場した回数。　※〇内は男の死後にフサが想像した回数。

表から勝一郎と龍造の生前の登場回数を比較すると、勝一郎は八章（四十六回）にわたって描かれ、龍造は三章（五十二回）というように、勝一郎より龍造の方が多く描かれている。その上、龍造が登場する三章は、龍造登場以前と比較すると一章ごとの回数が多いことから、章を分けられないほど緊密なまとまりを持っていると言えるだろう。また描かれた年数を見ると、勝一郎は昭和六年から昭和十六年までの十年間であるのに対し、龍造は昭和二十年から昭和二十五年までの五年間であることから、勝一郎とフサが共に過ごした時間は龍造との時間の二倍の年月である。にも関わらず、勝一郎と比べ龍造の登場回数が多い理由は、フサの母からフサへと反復される母系一族の神話を描こうと目論見を立てていたが、自身の分身とも言える秋幸にまつわる龍造と母の物語にこだわりが生じ、それが作品に影響した結果であろう。それは、フサの内面描写からも見て取れる。龍造と出会うまでのフサの心理状態は一本調子に貫かれていた。一方で、龍造と出会ってからのそれは、龍造に対する肯定と否定、つまり家族として迎え入れるか否か、秋幸を殺すか否かで揺れ動くアンビヴァレンツな心理状態が続き、その葛藤がそのまま一章の長さとなって現れたと言える。

そこで、それぞれの男がフサに与えた影響と彼らが彼女にとってどのような存在であったのか、またそこに含蓄されている意味を確認していく。

四、吉広と勝一郎の役割

吉広と勝一郎は朋輩であるにも関わらず、フサの前に二人そろって姿を現すことはない。これには勝一郎が吉広の代理という役割を持っているからであり、このように、吉広と勝一郎はそれぞれ兄や夫という関係性を越えた役割を担っていると言えよう。

吉広が生きた作中時間は、昭和六年三月から七月までの間であり、他の男と比較すると非常に短い。だがこの期間はフサの人生が目まぐるしく変化する期間であり、吉広の存在はフサのそれに影響を与える。フサの異父姉や幼友達はフサの年齢の時には既に奉公に出ていた。フサも彼女らのように遠方の紡績へ行きたかったが、「母の強引な引きとめ」によって近所で子守りをせざるを得ず、「紡績に行き遅れているのがしゃく」であった。吉広はそのようなフサに奉公先を見つけてくることによって、母の庇護下からフサを抜け出させる役目を担っている。古座から新宮へ奉公に行ったフサは、そこで初潮を迎え、少女から娘へと成長した。吉広の生前、勝一郎との

性行為を拒んだように、吉広の生きている時間、フサは少女や娘であり続けた。そして吉広が物語から退場すると同時に、フサは勝一郎を受け入れ女へと成長していく。

勝一郎が描かれた時間は昭和六年、七年そして十一年、十二年、十六年のみであり、新聞連載に換算すると五十六回分である。この時間の内訳は、昭和七年の夏に第一子・郁男が産まれるまでフサと二人で過ごした時間が四十一回、父として過ごした時間が十五回である。よって、フサと二人で過ごした時間が、圧倒的に多く描かれているということになる。

勝一郎の役割は何か。先行研究では栗坪良樹や八木直也によって、勝一郎は吉広の代替物であると指摘されている。[10] 指摘されるように、吉広の死後、勝一郎とフサとの交流は密になっていくため、勝一郎は吉広の延長線上に存在すると言ってよい。しかし、それだけではない。勝一郎はフサの処女を奪って女とさせ、結婚によって「路地」の内部へとフサを誘った。「路地」の正統な者として彼らの子を作った上での夭逝は、同時に「路地」の異分子である龍造と秋幸を「路地」へと参入させる役割をも担っていたのである。

五、父となることを拒絶された龍造

龍造はフサと知り合って間もなく、行商の品を分けたり、子供たちに罐詰や食べきれない程の鮨を持って来たりとフサの気を惹くことを目的としながらも、同時にフサたちの生活を助けている。このような龍造の気前のよさは、子供たちを徐々に懐かせていく。

龍造はフサが手を引いていた君子を抱きあげ、フサの不満を察したように、「ようし、肩車したる」と肩に乗せて君子に「誰が一番ベッピンさんになるんじゃろか。君子か、美恵か？」と訊いた。「君子」と肩の上で答えると、郁男は「なんでもええ事は自分やから」と言い、龍造の姿を見て急に勢いがついたのか、龍造の顔をふりあおぎながら、「おいさん、牛をいつ買うてくれる？」と訊く。「牛か、あと十日もしたら、有馬の方へ行くさかついでにもろて来たるわい」

「仔牛の方がええ」

（「松の雨」二一八・九頁）

郁男が龍造を慕う様は、不在の父の代理として龍造を受け入れている証拠である。しかし、家族のような温かさが垣間見える平穏な暮らしは長続きしなかった。フサが妊娠六ヶ月目に龍造は逮捕される。他の女にも龍造が子を身籠もらせていたことを知ったフサは、「別れるさか。わし、嘘をつかれてまでよう一緒にはなれん。一人で産むさか。さっきまで腹の子と一緒に死んでしまおと思てたんやさか、今日以降、親でも子でもない」と腹の子と共に縁を切ると龍造に告げた。このように宣言したにも関わらず、「実際父親がいなくとも無事に子は育つのだと知りながら、秋幸はフサとは違って父親のいる子供にしようと考え」るように、龍造を秋幸の父として認めるか認めないかフサの気持ちは揺れ続ける。

龍造は出所したその足で「路地」に来、「秋幸、父やんと行て、男同士で暮らそう」と言うが、「養のてくれもせんのに、父やんと違うわ」と秋幸は龍造が父親であることを認めない。また、フサもたびたび復縁を迫る龍造を相手にしない。だが龍造はフサから拒絶されても、佐倉が「路地」で餅撒きをする際に、美恵と君子に大量の餅を渡したり、フサに内緒で秋幸に鉄砲の玩具をやったりもしている。龍造はフサから拒まれ続けても自身の子である秋幸を始め、フサと勝一郎の子供たちまでも気に掛けていたのだ。しかし、龍造の子であるため、秋幸は「路地」において差別を受ける。

フサは、秋幸が路地の子供よりも終戦の後に路地にやって来て家を建てて住む朝鮮人の子らとまぎれて遊んでいる事が多いのに気づいた。路地の子らは麦畑の方ではなく山の方、三叉路の方で遊んでいる。

秋幸は子供なりに、路地で自分がどう思われているのか感じ取っているようだった。

（「水の日」二八三頁）

秋幸は「路地」の子供たちとではなく、終戦後、「路地」に来た朝鮮人の子供たちにまぎれて遊んでいる。戦時中、「路地」の者は「自警団と称して」「町の誰よりも率先して、徴用されて来て板屋の鉱山に行かされる朝鮮人たちを酷い目にあわせた」と書かれるように、朝鮮人を差別した。「路地」において差別されている朝鮮人の子と遊ぶしかない秋幸もまた「路地」の人間関係に入れず、差別されてい

るということだ。秋幸が朝鮮人の子と「路地」の山にある石塔を倒した時、見とがめた「路地」の大人から「親がどこの馬の骨かわからん者じゃったら、子もこんなバチあたりの事するんじゃね」と手をぶたれ、龍造の子である秋幸は「路地」の人間ではないという烙印を押されてしまった。フサは秋幸をこのような状態に置いてしまう要因を作った龍造を許せず、「秋幸は龍造とは生まれおちてから関わりはない」と、龍造を秋幸の父とすることを拒んだのである。フサと龍造の最後の会話となった龍造がフサに復縁を求めた場面において、「フサは龍造に断りもせぬまま中に入り、戸を閉めてかんぬきをかけ」た。つまり、秋幸を自身の庇護下に囲い込んだ上で、フサは龍造との交渉の扉を閉ざしたのである。

六、物語から欠落した父

フサ自身が私生児であることをはじめとして、本作には父という存在が欠落している。本作では子と暮らすことが出来たのは勝一郎のみだ。子を風呂に入れるなど父としての勝一郎は描かれてはいるが、描写の焦点がフサと子にあるため彼の描写は少なく、前に確認したように、勝一郎が父であった時間はごくわずかしか描かれない。それは、勝一郎が担っている役割がフサを女にすることであったからだ。フサを女にした男と捉えると、父という立場はたまたま派生した結果に過ぎず、父・勝一郎の印象は相対的に薄くなっている。その上、フサは子供たちに秋幸のみ父親が異なることをほのめかさないように強いたため、子らから父親は勝一郎だという認識を潜在的に奪ったと言えよう。

龍造も秋幸の生物学上の父ではあるが、前述したようにフサによって秋幸の父ではないと言われ、秋幸自身からも「父やんと違う」と父であることを否定されており、父とは言い難い。では、フサが龍造の次に関係を持つ繁蔵が父と呼べる人物か考えてみる。フサが繁蔵の子を孕んだことを伝えた際、繁蔵は「子供つくろと思てないんじゃ」、「何人も子供おって、もうこれ以上増やす事が出来んじゃろが」と子供を堕ろすように言った。さらに折衷案として、繁蔵の子供と、秋幸以外の「子供を棄て、まだ小さい手のかかる盛りの秋幸一人だけ連れて、自分と一緒に、新宮から出て他の土地で住」み、「腹の子を産んで育てる事」を繁蔵はフサに提案する。繁蔵のこれらの発言は、父としての責務の放棄だと言えよう。

最後に兄・吉広を確認する。フサの奉公先を探し、新宮まで連れて行く吉広は保護者のようだ。しかし、フサと共に奉公をしていたマツに吉広が声を掛けた際、彼女の顔が赤くなった様子を見たフサは「ふくれっ面にな」っており、吉広が他の女性に声を掛けたことに対して嫉妬している。つまり、フサにとって吉広は父ではなく一人の男として認識されている面が確かにある。関礼子が、勝一郎を含め吉広も父の「代補」のような男であり、父よりも優しく、官能的な眼差しでフサを包む「兄」だと指摘しているように、吉広は父と捉えるよりも恋愛対象の異性として捉えるべきであろう。[11] ちなみに、マツは吉広の子を妊娠していたが、吉広の死に触れて堕胎した。仮に、産み育てれば、吉広は死んでいても子に語り継がれることによって吉広は父として存在できたであろう。したがって、母や子に父として認識されるか、または父となる男自身が子の生を認めるかが父となる条件となる。だが、そうすると秋幸にこだわり、フサとの復縁を迫った龍造は秋幸の父になれてしまう。しかし、フサに復縁を断られた後に他の女に産ませた子に友一と名付けたことによって、龍造は自ら秋幸の父の立場から退いたのである。かくして本作において、父という存在は勝一郎の死と秋幸の誕生をもって欠落することとなったのだ。

近代天皇制の確立によって天皇は国家の父となった。その赤子である国民、その中でも被差別民に焦点を当てると、中上が本作で父の存在を否定した意図は明らかであろう。勝一郎が父であった時間を作中にほとんど描かず、さらに秋幸に父としての龍造を否定させることによって、父を欠落させた。近代天皇制が寄って立つ家族国家において、父とは天皇に他ならない。つまり、父を欠落させることによって、中上は本作で天皇制を批判したと言えよう。

七、佐倉と天皇

七―i、〝路地の天皇〟・佐倉

フサの奉公先だった佐倉は、新宮に古くからある地主で材木業を営んでいる。佐倉についてフサは「天子様に盾つことしたエラい人の血筋」だと女中から聞かされるのみで、佐倉の全貌は窺い知れない。フサは「路地」に住む吉広のいとこから次の話を聞かされる。

年松は、それが自分一人が口にするのではなく、山の際にあるこの路地の者全部が噂している事だと言った。その路地の者なら誰もが関わる事だった。いつごろか路地の山と土地を、少しばかりの借金のかたに取り上げてしまった。

年松は「なにもかも全部、あの佐倉のものにされてしもたんやだ」と言った。

佐倉が路地と関わりあるのは、明治の終りに新宮の主だった人間が天子様暗殺をはかって検挙されたり家宅捜索された事件からだった。路地の人間らは検挙された一人である坊主の浄泉寺の檀家だったし、よくその事件の首謀者の医者にも金も払わずに診てもらいに行った。合図は診察室の硝子窓をコン、コン、コンと三つたたく。山仕事や木馬引き、それから下駄なおしが多かったので医者にかかる余分な金がないのを知っていたので、そのコン、コン、コンと三つの合図を送ると無料(ただ)になった。その医者の兄が、佐倉に養子に入り、その子が今の佐倉だった。

（「水」五四・五頁）

「佐倉が普通の材木業を営む家だけでなく理解し難い謎があるのを」フサは感じる。その上、「佐倉にいると佐倉の噂ははっきりと耳に届か」ず、その上、佐倉本人すら見たことがなかったのだ。だが、佐倉での奉公を辞めたことでフサは佐倉の噂を耳にし始める。

佐倉はこの新宮を一挙に恥のどん底に引き入れた、天子様殺害の計画グループの首領の医者にはオイにあたるが、そのグループに近づいていた木馬引きや筏夫らの荒くれを使い、人の山をわが物に取り込み、製材工や材木かつぎらが集まって作った組合をつぶしてまわる人間だった。

（「光」一一一頁）

このような悪い噂しか聞こえて来ない佐倉ではあるが、「佐倉は曲がった事が嫌いだし、天子様を殺めようとした伯父の血を受けて弱い者の味方」だと勝一郎はフサに言う。確かに、この天子様暗殺計画のグループの一人である浄泉寺の檀家に「路地」の者らがおり、医療費を払えない彼らを、無料で診察した医者がこのグループの首謀者であったことから、「路地」の人々の生活を改善させるために天子

様暗殺計画を企てたと言ってもいいだろう。

とはいえ、勝一郎に言わせると弱い者の見方であったはずの佐倉は、「字を知らんと、ただハンだけ押したんやろが、どんなにえらい人や言うても、よう返さんとわかっとって金も貸すかいな。土地を取り上げると書き込まれたんや」と「路地」の者から言われているように、「路地」の人間を助ける素振りをして書類を操作し、彼らの土地を奪った。つまり、文字の力によって佐倉は「路地」を支配したのだ。そして昭和二十一年の地震で発生した火災に乗じ、佐倉は彼の土地に建つ家々につけ火をし、その土地から人々を焼き出した。これにより佐倉が「路地」に脅威を与える存在であったことが現実となった。

そもそもなぜ佐倉は「路地」にこだわるのか。それは伯父を「新宮を一挙に恥のどん底に引き入れた」天子様暗殺計画の首謀者にさせてしまった「路地」に対する恨みがあるからだろう。その一方で、伯父が守ろうとした「路地」から佐倉は「どもない奴」と言われている。つまり、佐倉は「路地」と同様に差別される人間であったのだ。共に差別される者ではあるが、「路地」にはなくて佐倉にはあるもの、それは文字だ。つまり、これは中上の考える天皇と被差別部落との関係に一致している。このように文字によって「路地」の土地を奪い「路地」に脅威を与え支配しようとしていることから、佐倉は〝路地の天皇〟に見立てられている。現人神である天皇の御真影すら見ることを許さなかった戦前・戦中、そして戦後、全国巡幸を行い国民の前に姿を現した天皇のように、フサが初めて佐倉を目にした時が、佐倉での奉公を辞めてから十年以上経った戦後だったのだろう。

ちなみに、作中において不自然な挿話となっている佐倉に関する以下の叙述がある。

> 新宮と勝浦の間に鉄道が敷かれたのは昭和元年の事だが、その時、新宮の隣町三輪崎の人間らが反対した。（中略）人夫らはただ公民館に芝居があるからと集められ、演説をきき、それで鉄道が新宮と勝浦の間に敷かれると仕事がなくなると思い、手に手にチョンナや棒を持ち、鉄道創設をすすめていた新宮の吉田長四郎の家を襲った。家に乱入した車夫らに気づき、吉田長四郎ら家族の者は竹藪に逃げ込んだが、腹いせに丁度居合わせたあんまを殴り殺した。車夫らを煽り立てたのは佐倉だと勝一郎は言った。
>
> （「光」一一七頁）

これはフサが初めて勝一郎の家に行った場面と、フサが勝一郎の子を孕み、結婚を決意する場面との間に何の脈略もなく挿入されており、読者に違和感を抱かせる。〝路地の天皇〟である佐倉を、このような不自然な挿話によって作中に強く根付かせようとしたのだろう。

七―ii、天皇制を批判する

ここで問題となるのが、「路地」＝被差別部落と明記されていないことだ。その上、中上が被差別部落出身と告白したのが、昭和五十六年一月六日付の「朝日新聞」和歌山版であることから、昭和五十四年の新聞連載で本作を読んだ読者が「路地」＝被差別部落と気づく可能性は低い。つまり、これは読者へのメッセージではなく、天皇制を批判する上での中上の方法的実験だったのではないだろうか。

フサの母が十五の時、政令の変動が起こり、それが母が住む田ノ井まで届いて万歳三唱したとある。フサが大正五（一九一六）年三月七日生まれのため、四十歳でフサを産んだ母は明治八（一八七五）年生まれである。そうすると、母が十五歳の時の政令の変動とは明治二十三（一八九〇）年に施行された大日本帝国憲法であろう。このとき「バンザイ」と一斉に言ったのだが、「バンザイ」を言えない母が言った「バンバイ」という響きにフサは恐怖を抱く。この感情は「バンバイ」という音（コトノハ）の波、そしてその音（コトノハ）の向かう先におり、臣民の権利を文字として記すことで国民の感情を動かしてしまう天皇の力に対する恐れの表れと捉えられる。このように本作では、天皇や天皇のような位相にいる者のコトノハの描写を他の人物のそれと差異化しているのだ。

例えば、終戦時の描写は、新宮出身の航空兵が自決したエピソードのみ採用しており、周知である玉音放送には全く触れられていない。終戦を「路地」で知ったならば、ラジオが家にないため玉音放送は聞けない。だがこの時、フサは行商中であった。旅館や町屋が立ち並ぶ町で行商をしていることから、この日も同じように町で行商をしていたに違いない。そうすると玉音放送を聞いたり、それを聞いている人々を目撃したりした可能性は高いが、その描写はない。玉音放送の描写を省くことで中上は天皇のコトノハを黙殺した。これは、佐倉が「路地」で演説を行った際、「路地」の住民の罵声によって佐倉の声がかき消された様と同義だと考える。「路地」の住人が〝路地の天皇〟のコトノハを妨げることによって、「天皇」のコトノハを拒絶する姿勢を前面に押し出したのである。

日本の文化・芸術を担った賤民は、その語りを天皇の作った書き言葉から離れたところで確立させたが、天皇によって作られたコトノハと文字を使い、「「天皇」の書き言葉による統括」の中で小説を書かざるを得ない作者は、その文字によって父の存在を否定し、周知の事柄を敢えて書かないことで国家の父である天皇を否定した。そして、玉音放送を聞く人々の様子を描かないことによって天皇のコトノハとその存在、天皇のコトノハに従う人々の存在を否定し、近代以降における部落差別の発生の根源となった天皇制の存在に抗ったのである。かくして、フサの半生を隠れ蓑とし、その深層に天皇制への批判を内在させることによって、中上作品における反天皇制という強いモチーフを描いたと言えよう。

おわりに

本作が三月三日から始められたのは、中上がとらわれ続けた兄の命日であるからとも考えられるが、このように天皇制と部落差別に関して書かれている本作では全国水平社の設立の日としての三月三日から始めたと考えるのが妥当であろう。作品を全国水平社の設立の日から始めることで、本作が被差別部落と関わりの深い作品であることを暗示したのである。

フサの周囲に描かれる男たちは、少女から娘へ、娘から女へと成長していくフサのそばに寄り添い続ける。この男たちは父としての役割を拒絶されたり、自ら父の役割を放棄したりしており、本作には父の存在が欠如している。天皇＝父であった明治憲法体制の下、父の存在を否定することで、フサの半生を描いた物語に天皇制に対する批判を内包させた。さらに、「路地」の者から文字で土地を奪った佐倉を描くことによって、文字が露わにする〈支配―被支配〉の構図を提示した。この二者は、文字を持てない「路地」の人間と文字を持てる人間という対極に位置するが、差別される「路地」と、「路地」から「どもならん奴」と言われてしまう佐倉は「紙一重」な存在である。この文字の所有の有無が中上が言及した天皇と被差別民の違いであることから、佐倉を〝路地の天皇〟と言っても誤りにはならないだろう。「路地」で演説する佐倉のコトノハを罵声などで打ち消したのは、終戦時の描写において玉音放送つまり、天皇のコトノハを黙殺したことと同工と捉えられる。したがって、『鳳仙花』はフサの半生を隠れ蓑とした天皇制の存在に抗う作品であったのだ。

注

（1）中根隆行「中上健次『鳳仙花』論―〈路地〉の風景と鳳仙花」（「文学研究論集」一九九七（平成九）年）

（2）栗坪良樹「「鳳仙花」の世界―続中上健次論」（「早稲田文学」一九八〇（昭和五十五）年）

（3）八木直也「素材としての母、存在としての母―中上健次『鳳仙花』論」（「言語と文芸」一九九八（平成十）年）

（4）中上健次『松阪』（『紀州　木の国・根の国物語』、「朝日ジャーナル」一九七七（昭和五十二）年十月十四日号）

（5）中上健次・野間宏・安岡章太郎『市民にひそむ差別心理』（「朝日ジャーナル」一九七七（昭和五十二）年三月十八日号・二十五日号）

（6）中上健次『日本の二つの外部』（「琉球新報」一九八九（平成元）年一月十四日）

（7）中上健次『伊勢』（『紀州　木の国・根の国物語』、「朝日ジャーナル」一九七七（昭和五十二）年十月二十一日号）

（8）中上は三浦雅士との対談（『世界の中の日本文学』、「文学界」一九九二（平成四）年二月）の中で、日本語を借りているとの認識を持っていることを述べている。

（9）中上健次・吉本隆明・三上治『20時間完全討論　解体される場所』（集英社、一九九〇（平成二）年九月）本書の一部は「天皇および家族をめぐって」（「すばる」一九八九（平成元）年十一・十二月）に収録されている。

（10）栗坪良樹は、「「鳳仙花」の世界―続中上健次論」（前掲（2）同論文）の中で、吉広の事故死の痛みを勝一郎を通して感じていることから、吉広と勝一郎は完全に重なりあっていると指摘する。また、八木直也は「素材としての母、存在としての母―中上健次『鳳仙花』論」（前掲（3）同論文）において、勝一郎が吉広にどことなく似ている点から、「勝一郎が吉広の代替にすぎないことを表していると言ってよい」と論じる。

（11）関礼子「「母性表象」におけるジェンダー――『たけくらべ』・『鳳仙花』をめぐって」（「日本近代文学」一九九六（平成八）年）

第五章―二節　『鳳仙花』論―史実の歪みから見える天皇制批判―

はじめに

『鳳仙花』は、中上の母をモデルとし、彼女の半生を描いた作品である。本作の特徴は歴史的事実を踏まえて描いている点だ。現地取材の際に、「当時の新宮市の様子をそのまま描いており、違和感はない」との証言を得た。このように言われている本作ではあるが、全ての叙述が歴史的事実に即して描かれているわけではない。にも関わらず、先行研究は、史実に準えられていると論じるに留まり、本作の叙述と史実とのずれについて論じたものはない。史実を歪め、事実と虚構を織り交ぜて叙述する意図とはいかなるものであろうか。それを考えるために、作中時間である昭和六年から昭和二十五年に和歌山県下で刊行された新聞の記事や『新宮市史』などと本作の叙述を比較した。例えば、昭和二十一年の地震の場面と新聞記事や市史を比較すると、細部にわたって再現されていることが確認できるため、本作の具体的なエピソードは事実を反映していると言える。しかし、熊野大橋渡り初め式の日の描写は、当時の様子を踏まえてはいるが、昭和十年から昭和十一年に本作では年立てがずらされている。このように年立てをずらすことによって、その年の象徴的な出来事やその年自体を削除したと考えられないだろうか。

本作はこれまで、主人公・フサの半生を描いた作品であると言われてきたが、前節で確認したように本作が部落差別を生み出した近代天皇制に対する批判を込めた作品であると考える。その観点を踏まえ、本節では歪められた史実に着目し、本作のモチーフを読み解いていく。

一、先行研究の確認

歴史的事実の描写について論じた先行研究を確認する。本作をフサの半生が血統の因果であるとした上で、女主人公を中心とする世界の周囲に子供が存在し、その背後に男が存在したと論じた栗坪良樹は、

この小説は、ある種の成長小説の形をとっており、女の年齢と子どもの頭数とが、背後に流れる歴史や社会的変動よりも確実な時

間の流れとしてすべてを計っていることにもなっている。そう言えば、ここには〈戦争〉というものが、せり出すようには書かれていない。決して〈戦争〉と無縁であるはずがない女の半生であるのだが、歴史年表は作者の手から放り出されたままに次のような描写となって表現されている。（傍点、原著）

とし、満州事変の勃発、新型爆弾の投下、終戦などの〈戦争〉の描写が淡々としている分だけ、「女主人公の生活者としての位置の在処がうかがわれる」と述べる。そのため、歴史には忠実であるが、作者がフサの生涯の苦闘に関心を持っており、その半生を描いたため詳細な〈戦争〉描写を省いたと論じる。[1] 続いて、古座も「路地」であるという「路地」の構築の面からフサについて論じた中根隆行は、「昭和という時代の激動期を描いたものとしても、もっともオーソドックスな小説形態をとっている」とした上で、

「満州事変」、「盧溝橋事件」、「真珠湾攻撃」といった、昭和史にそのまま準えられるような世相が散りばめられている。

と指摘している。[2] さらに、加賀乙彦、磯田光一、黒井千次は読書鼎談で、戦後世代が描いた作品という観点から、昭和元年に鉄道が開通したことが描かれる反面、明治節や祝祭日、二・二六事件や玉音放送が描かれていないと述べた。そして、その理由を、底辺で生活しているフサのような者にとってそれらは生活と具体的な関係を持たず、津波もアメリカ軍も、フサにふりかかる災いも全て「平面」であるからだとした。[3]

たしかに先行研究で指摘されるように、本作は世界規模の大きな歴史と共に、フサの生活を描いている。しかし、なぜ先行研究ではフサの身近で起こった新宮の歴史に注目していないのだろうか。また、「昭和史にそのまま準えられる」と論じるに留まり、史実の歪みに着目しなかったのだろうか。そこで盲点となっている書き換えられた史実に着目し、天皇制との関連からその意図を考察する。

二、本作における史実描写

昭和二十一年の南海道地震とフサが奉公した旅館油屋の描写を例に本作における史実描写を確認する。まず、南海道地震の発生時を見てみたい。

秋幸が生れて四月目の十二月二十一日、朝、まだ闇がたちこめている時、何もかもを打ち壊してしまうほどの地震は起こった。

そろそろ起き出す頃だと思いながらうつらうつらしている時、突然、爆弾が路地のフサの家を直撃でもしたように下から轟音と共に突き上げられた。寝入っていた子供らが悲鳴をあげるのと土地そのもののどよめきが響くのと同時だった。戸がはずれて紙のように外に落ちるのに気づいて、秋幸を抱えたまま振り返ると、一瞬、外は真昼のように明るかった。

（「地の熱」二四三頁）

と、地震発生時に外が明るくなったとある。そこで昭和二十一年十二月二十二日付『和歌山新聞』を確認すると「電光は付物」という見出しで次の記事が載っている。

二十一日午前四時すぎ本■（県カ？：論者注、以下同様）一■（帯カ？）に安政以來九十數年振りの大地震が勃發、■（曙カ？）の夢を破つたが、發生當時■（随カ？）所にバツバツという發光を生じブルブルふるえる市民をいやが上にも無氣味にさしたが、文献によると地震には「發光」を伴うもの也、而しこれは稀なりとあり、別に不可思議なものでもなく今回の地震はその■であつたという譚

※■は判読不能の文字を示す（以下同様）

この地震発生時に発光があったということだ。続いて、火災の火元と類焼地を確認する。

大橋通りの薬局から出た火は三方にむかって燃えひろがっている。まだ朝の七時だった。（中略）地震の後の火事はダイナマイト消火もさしたる効き目をみせず、夕方になっても衰えないで夜の八時まで、戦争でアメリカの空襲にも焼け残っていた昔ながらの建物の残った新宮の町家のほとんどを焼いた。町家の他に火事になったのは駅裏の新地だった。速玉神社のそばの御幸町、舟町、千穂ガ峰、その山際地、大王地から鍛冶町、別当屋敷、馬町、雑賀町、昔ながらの名前のついた町並みのことごとくが燃え上がり炎が四方に吹き上がったのだった。

（「地の熱」二四五頁）

当時の様子を『新宮市史』から確認すると、

当時の元町、いまの大橋通三丁目に、古いのれんの切目屋薬局があり、その裏手に、うなぎ料理店江戸川があった。地震が発生してまもなく、両家の境目付近から火の手があがった。（中略）火勢は、はじめ南へ延び、まもなく他の三方にも燃えひろがって、新宮の中心街のほとんどを焼きつくす大火となった。[4]

とあり、大橋通りの薬局から出火したことが一致している。また、類焼地は昭和二十一年十二月二十五日付「紀南新聞」「號外（一）」に次のように記されている。

新宮市では倒かい家屋多きなかに元町から火を發し水不足と地震におびえた人々の周章ろうばいはついに元町、仲ノ町、本町、舟町、元鍛治町（ママ）、別當屋敷、雑賀町、馬町、山際地を火の海と化し延焼■（をカ？）防ぐ■（家カ？）屋倒かいのハツパ■（はカ？）ぶ氣味な轟音をつづけ■■に駐在する進駐軍強（ママ）力應援必死の消火につとめたが及ばず市内の■（中カ？）樞街を總なめにして午後

九時過ぎ鎮火した

類焼地が本作の叙述とほぼ一致していることがわかる。さらに、復興の様子は「地震後一週間もすれば新宮の町家のあちこちにバラック建ての家が建ちはじめた」とあり、昭和二十一年十二月二十七日付「紀南新聞」に「復興みなぎる新宮市」との見出しで、

おそろしい震火から早くも五日、燒野原となつた新宮市では毎日市會を開いて復興對策をねつているが、市民もこの□（大カ？）きな打げきに屈せずたくましい緊張ぶりであとを整理し、すでにバラツクも多數出來あがりこの分では年内に相当ふつ興を見よう

※□は文字の脱落を示す（以下同様）

と、震災五日後にはバラックが建ち始めたと記事にある。以上から、この地震の描写を新聞記事や『新宮市史』と比較すると、佐倉という虚構の人物による駅裏の新地へのつけ火以外は史実に基づき詳細に描かれていると言える。

次に、フサが奉公していた旅館油屋について確認する。旅館油屋は「速玉神社の天皇陛下さんがお泊まりになる旅館」と言われている。そこで当時の新聞を確認すると、昭和十年一月二十五日付「熊野毎日新聞」に、

師團長の宮さま／新宮市御成り／沿道を埋めた奉迎者の大群／感極まつた今日歡喜の市民／先づ速玉神社御参拜

と「師團長の宮さま」つまり、東久邇宮殿下が速玉神社を参拝したとある。昭和十年一月二十六日付「熊野毎日新聞」には、

きのふ新宮中學校に於て學生、青訓、郷軍の教練を御観閲あらせられ、紀南の御旅第三夜を油屋旅館に御泊りあらせられた

と、この時殿下が旅館油屋に宿泊したと記されている。皇族が利用していることから、広義に捉えると旅館油屋は天皇が利用する宿と言ってよいだろう。[5]

したがって、南海道地震の描写と旅館油屋に皇族が宿泊した点では、本作は史実を踏まえて描いていると言えよう。

三、歪められた史実

確認してきたように一見史実に忠実と見えるのだが、実は微妙な所で歪められている。例えば旅館油屋の所在地だ。

（略）フサが神社のそばの古くからある舟町の旅館に奉公したのは勝一郎の口ききだった。フサは勝一郎の顔の広さをつくづく知らされる思いだったが、後で佐倉とその旅館油屋は縁つづきだと耳にし、佐倉が勝一郎に教えたのだとわかり、勝一郎の得意げな顔をわらった。（中略）その舟町の旅館の裏手からすぐが丁度祭りの御舟漕ぎの舟の出発点あたりだった（以下略）

（「光」一一〇頁）

このように本作では、速玉神社そばの舟町に旅館油屋は建っている。だが所在地を調べると、確認した全ての資料において、実際の旅館油屋は馬町にあるのだ。[6]そこで、旅館油屋を馬町から舟町に移した作者の意図を考えたい。昭和九年頃の新宮市を描いた新宮市立図書館蔵『新宮市街地図』（171頁参照）を見ると、舟町は熊野川のそばにある。この辺りは、当時、市内で最も栄えていたことから、天皇の宿泊にふさわしい旅館を新宮市内で最も栄えている場所に設定したと言えよう。（※一部公開を控えるべき情報が含まれるため、空白とする対応をしている）

よって、「路地」つまり被差別部落と、それができる起源となった天皇が宿泊する場を差異化したとも考えられよう。

また、旅館油屋を速玉神社のそばに移したことにも意味があるはずだ。速玉神社に祀られている熊野速玉大神は、『日本書紀』におい

て黄泉国で伊弉冉尊と決別するため伊弉諾尊が吐いた唾から産まれた速玉之男である。[7] さらに、熊野速玉大神と熊野夫須美大神は伊弉諾尊と伊弉冉尊の神名ともされる。[8] つまり、皇祖の祖先が速玉神社に祀られているのだ。さらには、院政期には上皇が頻繁に参拝に訪れ、作中で描かれた期間にも皇族が九回参拝に訪れており、速玉神社と皇族の繋がりは強固である。このような天皇と縁のある速玉神社のそばの舟町に天皇が泊まったとすることで、舟町に神聖なイメージを与えた。その舟町と、天皇の存在によって生じた被差別民が暮らす「路地」からは聖と賤という構図が成り立つ。したがって、旅館油屋が速玉神社のそばの舟町にあるとすることは、「路地」との差異を際立たせ、神聖という印象を持たせる意図があったのだ。

四、作中に描かれなかった史実

続いて、本作に叙述のない年と出来事を確認する。まず、熊野大橋に関する出来事を見たい。

> 昭和十一年はフサが三人目の子を腹にもった年だった。その年は山仕事終えてもどってきた勝一郎と二人の子供連れてたまに仲之町の方へ出かけると、あそこでもここでも工事がすすめられている大橋に関して不穏な噂を耳にした。
>
> （「子」一四一頁）

と、昭和十一年に熊野大橋の工事をしているように描かれている。続いて、熊野大橋渡り初め式の日の様子を見る。

> 四月になってフサが二人の子らが遊びに出かけているうちに掃除をやり洗濯をやろうと井戸で水を汲んでいると、空の方に爆弾がたてつづけに破裂するような音がした。気を取られて春の細かい光をまいたような空を見あげているとうしろから弦が来て「姐さん、水を汲むんかい」と声をかけた。弦は四月の今日、新宮と成川の大橋が出来た祝砲じゃと言い、その出来上がった橋が路地

が背にした臥龍山の天っ辺あたりから一望出来ると教えた。

（「子」一四二・三頁）

大橋の様子を見に行った裏山でフサは転倒し、「流産してしまう」と思ったことから、これは昭和十一年の出来事である。しかし、昭和十年四月六日付「熊野毎日新聞」に次の記事があるように、熊野大橋は昭和十年に開通しているのだ。

橋と空、この岸、あの岸／熊野大橋渡初式／富田三重縣知事がテープ切斷／花漫爛けふの佳き日

月は■（芳カ？）春花の四月、朝來有情の雨はミス大橋の色にも似た密雲の空から歡びの銀箭を投げた午時六時濃雲もくだけよと空に轟く號砲三發は、盛装せる市の上空で炸裂して。（中略）オヽ空はカツキリ霽れた！眞に浄雨の潔齋を■（経カ？）た熊野大橋の偉容は一入輝かし□定刻午前十時號砲一發空を破れば朶雲は綿を千切つたやうな雲の中に融け込む。

この記事と比較すると、祝砲の様子から本作の描写が虚構ではないことを窺わせる。したがって、昭和十年の出来事を昭和十一年にずらすことによって、中上はあえて昭和十年を描かなかったと考えられる。昭和十年は国体明徴声明が出された年であるが、この年は一月に東久邇宮殿下が、八月に澄宮崇仁親王殿下が新宮を来訪した年でもあり、これらの史実を意図的に描かなかったと言えよう。ちなみに芳子が生まれた昭和八年に李王垠殿下が新宮を訪れており、この年は芳子の誕生の叙述で次のように描写される。

フサが郁男の次に年子で産んだ芳子は郁男よりも勝一郎に似ていたが、生れたばかりの頃については、新宮町が隣の三輪崎を合併させて新宮市になって、ちょうちん行列をしたという他に、これと言って郁男のようにはっきりした記憶はない。

（「子」一四一頁）

新宮市誕生のちょうちん行列をしたという他に「はっきりした記憶はない」とあるが、李王垠殿下は汽車を使い新宮を訪ねている。（※一部公開を控えるべき情報が含まれるため、空白とする対応をしている）[9]にも関わらず、芳子の誕生年についての描写が新宮市の誕生のみなのは、ここでも皇族の来訪を意図的に描かなかったからだと言えよう。[10]

次に、君子の誕生年を確認する。本作にはフサの六人の子供のうち芳子と君子と泰造の妊娠時と出産時の描写がない。芳子の誕生は前に確認したように、郁男と「年子」と記し、新宮市誕生の史実と共に描いている。対して君子と泰造が初めて描かれる場面は、

昭和十六年八月に勝一郎に召集があり、元気な勝一郎がその日のうちに帰されてくるという事があるまで、フサは戦争が自分のすぐそばまで来ている事を知らなかった。その時フサは二十五歳だった。美恵の後に君子と名づけた女の子を産み、そのすぐ後に泰造と名づけた男の子を産んだばかりだった。

（「熱」一五三頁）

と、君子のみ、何年もしくは何があった年に産まれたか描かれていない。昭和十六年に産まれたばかりの泰造と「年子」と後に記されていることから、君子は昭和十五年生まれと推測できる。ではこの年を印象づける大きな出来事はなかったのだろうか。昭和十五年は紀元二六〇〇年にあたっており、奉祝行事が開催されたことが、昭和十五年十一月十三日付「熊野毎日新聞」から確認できる。

聖紀の感激に胸躍らす／新宮市の二日に亘る奉祝會／流石に時局下で事件も皆無／催しものに盛り上げた非常時調

皇紀二千六百年を祝■（賀カ？）する新宮市の催は十日をキツカケに速玉神社の奉祝祭に引續いて公會■の祝賀会から歡喜の巷と化して新宮全■（體カ？）は奉祝景氣が最高潮に達して旗行列やら千鳥町、馬町の造りもの御白石曳行山車などで大賑ひを呈した

が、市の旗行列は参加數千人の日の丸の大氾濫に巷々に描き出し夜に入つては全町から繰り出した提灯行列で至る所紅芒燦々たる賑やかさと化した

またこれだけではなく、紀元二六〇〇年奉祝・紀勢線全通記念の駅伝も開催されている。昭和十五年八月六日付「熊野毎日新聞」を確認すると、

和歌山新宮間驛傳競走けふ出發／八日午前十時四十分新宮驛前に到着豫定／新宮市選手顔觸れ

大朝主催紀元二千六百年奉祝紀勢線全通記念和歌山市新宮間驛傳マラソン大會は今五日午前九時和歌山市驛のスタートラインを各郡市参加青年團各一名が出發（中略）新宮區裁判所前から元町に入り大橋通りを霜田傘店前から右折して警察署前を通過丹鶴町を新宮驛前のゴールに入る事となつてゐるが、沿道の歡呼と當日開通祝賀の大群衆の波に迎へられて大体午前十一時四十分頃に第一選手は到着の豫定である

新宮駅が駅伝のゴールとある。（※一部公開を控えるべき情報が含まれるため、空白とする対応をしている）

君子の誕生をこれらの出来事と共に回想することも可能であったため、本作では意図的に紀元二六〇〇年にあたる昭和十五年を描かなかったと言える。ちなみに、この年は七月に李王妃が、十一月に閑院宮・同妃が新宮を訪れている。昭和十年と同様、フサの近くに皇族が二度訪れた事実も描かなかったことになるのだ。

続いて、終戦時の様子を確認したい。

八月十五日、終戦になったと耳にした。行商の途中だったので何か起こるかもしれないと、まだ荷を売り切らないうちに路地の家へもどると、郁男がフサの顔を見るなり駈け寄り、嬉しげな顔で、「母さん、戦争に敗けたんやと。終ったんやと」と言う。（中略）

その日のうちにフサも見た飛行機の噂は新宮の町家にも路地にも伝わった。

新宮の上空を飛ぶ飛行機の音におどろき、咄嗟に戦争に敗けたというのが嘘かもしれないと思って子供らを呼びよせたが、爆弾を投下するふうもなくぐるぐると新宮の上空を旋回して、そのうち海の方へ消えた。だが敵機などではなかった。敵から故郷を守ろうと戦についていた新宮出身の飛行機乗りが戦争に負け、自決する前に見納めにと上空を飛び、訣れを言うようにまだ昔ながらの面影の残った愛しい町並みを見てから、飛行機ごと海にとび込んで死んだ。その噂は誰彼なしに涙を誘った。

（「松の雨」一九八・九頁）

ここには玉音放送の描写がない。フサの家にラジオはないが行商中であったことから、玉音放送を耳にしたり、それを聴く人々を目にしたはずだ。その描写がないということは新宮では玉音放送が聴けなかったのだろうか。終戦時の様子を『新宮市史』から確認する。

あの日正午の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」の「玉音放送」の印象は、今日もなお多くの市民の心に深く刻まれているはずだ。そして、新宮出身の航空兵が、郷土の上空を低く飛んだあと大浜海岸に自爆したり、熊野川に突っこんで最期をとげたりする悲劇もあって、戦争の幕は閉じられた。[11]

このように、玉音放送と航空兵の自決という二つのエピソードが記載されている。したがって、本作では航空兵のエピソードのみ採用し、臣民に強い印象を与えた玉音放送を意図的に描かなかったと考えられる。

以上から、国体明徴声明が出された昭和十年、紀元二六〇〇年が盛大に祝われた昭和十五年、そして、敗戦つまり、大日本帝国の崩壊を示す玉音放送という天皇制にとって重要な年や出来事が本作に描かれていないことが確認できた。国体明徴声明は、天皇が主権者であることを臣民に改めて周知させた。この声明がフサの生活に直接影響を与えなかったため、作中に描写がないことは不自然ではない。しかし、その声明が出された昭和十年自体を描かないことは、天皇主権を認めないという中上の想いの表れと言えよう。また、天

皇の存在により聖と賤の関係が発生し、被差別民が生まれたことに鑑みると、この二六〇〇年という期間に天皇と被差別民という聖と賤の関係が作られた期間でもある。したがって、この期間にこの関係が作られたことへの批判の意味を込めて、フサの目の前で行われた奉祝行事を含め、紀元二六〇〇年である昭和十五年を描かなかったと考えられる。そして昭和十年・昭和十五年と皇族が年に二度新宮を訪れた年を作品には描かず、また年に一度、訪れた年はその事実を描写していないように、フサの周囲に起きた皇族に関わる出来事を描かないことで、その存在を認めない立場を取ったのだろう。さらに、玉音放送に関しては、文字とコトノハによって天皇が国を統治していると中上が考えている[12]ことから、天皇のコトノハを聞かないフサを描くことで、天皇の存在を否定する姿勢を示したと言えよう。すなわち、天皇制にとって重要な年や出来事を叙述しない手法を用いて、中上は天皇制に抗ったのである。

おわりに

本作は先行研究では「昭和史にそのまま準えられる」とされ、さらに作品の舞台となった新宮の市民からも違和感がないと言われている。しかし本作には、大きな歴史から確認すると、国体明徴声明が出された昭和十年、紀元二六〇〇年であった昭和十五年、そして玉音放送という天皇制にとって重要な年や出来事の描写がなく、また、新宮という小さな歴史から見ても、皇族が新宮を訪れた出来事を描いていないことが明らかとなった。

天皇が主権を持っていることを改めて臣民に知らしめた昭和十年を描かないことは、天皇が主権を握った近代天皇制に対する中上の抵抗と言え、紀元二六〇〇年である昭和十五年を描かないことも神武天皇より続く万世一系の天皇家に対して、被差別民と天皇という賤と聖の関係がこの二六〇〇年の間に作られたことへの批判の意味を込めたと考えられる。そして、玉音放送を描かない、つまり天皇のコトノハを黙殺するフサの姿を描くことによって、天皇の存在を否定したのである。したがって本作は、天皇に関わる史実を描かない、もしくは歪めることで、天皇が統括している文字とコトノハを使いつつも天皇制に抗うという意図が込められていたのだ。[13]

本作は近代天皇制にとって重要な年や出来事を黙殺することで天皇制批判を達成した。これは第四章で述べてきたように『地の果て

至上の時』において、秋幸が龍造を自殺へと追い詰め〝父殺し〟を成し遂げたように、描きたい内容を直接明示するのではなく、作中にその要素を散りばめて間接的に描き込んだ手法と同様である。従来の論では、〈秋幸三部作〉にのみ注目してきたため、龍造の自殺により秋幸の〝父殺し〟は失敗したと論じられてきたが、『地の果て　至上の時』以前に本作が執筆されたことに着目すると、佐倉から〝路地の天皇〟の座を奪い、それを僭称した龍造を自殺に追い込んだことは〝父殺し〟の達成と言える。よって、中上作品のモチーフである天皇制批判を「黙殺」によって達成した本作は、中上作品をより正確に読み直す契機としても重要な作品であったのだ。

注

（1）栗坪良樹「「鳳仙花」の世界―続中上健次論」（「早稲田文学」一九八〇（昭和五十五）年三月）

（2）中根隆行「中上健次『鳳仙花』論―〈路地〉の風景と鳳仙花」（「文学研究論集」一九九七（平成九）年）

（3）加賀乙彦、磯田光一、黒井千次「読書鼎談」（「文藝」一九八〇（昭和五十五）年五月）

（4）新宮市史編さん委員会編集『新宮市史』（新宮市役所、一九七二（昭和四十七）年）

（5）『新宮市史』（新宮市、一九三七（昭和十二）年）によると、昭和十年の東久邇宮殿下の他に、朝香宮鳩彦王殿下（大正四年）、北白河宮成久王殿下（大正八年）、山階宮茂麿王殿下（昭和四年）などが旅館油屋を利用しているとある。

（6）確認した資料は、池本楠吉『牟婁商工家案内　東郡ノ分』（山崎石版印刷部、一九一四（大正三）年）、全国同盟旅館協会『全国旅館名簿』（神田屋商店出版部、一九二六（大正十五）年）、紀南エコノミスト社『紀南経済要覧』（紀南エコノミスト社、一九三五（昭和十）年）、旅館研究会　調査・編纂『全国旅館名簿』（旅館研究会、一九四一（昭和十六）年）である。旅館油屋と油屋旅館との表記の揺れはあるが、電話番号が同一であるため、同じ旅館であることは間違いない。

（7）「官幣大社熊野速玉神社御由緒調査書」（瀧川政次郎、村田正志、佐藤虎雄『熊野速玉大社古文書古記録』清文堂、一九七一（昭和四十六）年）

（8）上野元『熊野大権現　熊野速玉大社の後由緒』（熊野速玉大社、一九九六（平成八）年）

（9）前掲（5）同書

（10）『鳳仙花』では、皇族が新宮を訪れた年を必ず描いていないわけではない。例えば、勝一郎が死んだ昭和十六年には梨本宮・同妃が新宮を訪れており、秋幸が生まれた後の昭和二十二年には竹田宮が、昭和二十三年には皇太子が来新している。これら勝一郎の死や秋幸の誕生後のエピソードは本作において欠かせない内容であることから、これらの年を描かざるを得なかったのだろう。

（11）前掲（4）同書

（12）『伊勢』（『紀州　木の国・根の国物語』、「朝日ジャーナル」一九七七（昭和五十二）年十月二十一日）をはじめとして、天皇が文字とコトノハによって国を統括していると中上は度々発言している。天皇が作った文字とコトノハを使わざるを得ない自身をねじ曲がった天皇主義者と呼び、天皇に対して矛盾した感情を抱いていた。

（13）本作では、天皇に関わる史実を描かなかったり、歪めたりしているが、これは〝路地の天皇〟である佐倉に関する叙述でも言える。例えば、佐倉が鉄道創設を進めていた吉田長四郎の家を襲ったという挿話がある。吉田長四郎とは新宮鉄道の創設者・津田長四郎のことだと思われる。作中では昭和元年に新宮と勝浦の間に鉄道が敷かれたと描写されているが、新宮鉄道の新宮勝浦間の開通時期を確認すると、大正元年十二月十日付「官報」に、

輕便鐵道運輸開始／本月二日新宮鐵道株式會社三輪崎勝浦間運輸開始ヲ許可セシニ同四日ヨリ運輸營業開始ノ旨届出タリ

とあり、大正二年三月七日付「官報」には、

輕便鐵道運輸開始／去月二十七日新宮鐵道株式會社新宮三輪崎間運輸開始ヲ許可セシニ本月一日ヨリ運輸營業開始ノ旨届出タリ

とある。よって、新宮勝浦間の鉄道開通が大正二年から昭和元年へとずらされているのである。

中上は天皇が作った文字とコトノハを使わざるを得ない自身をねじ曲がった天皇主義者と呼んだように、天皇に対して矛盾した感情を抱いていた。この感情を抱いているからこそ、国家元首と象徴という二つの憲法を生きた昭和天皇の立場と自らが重なり、鉄道開通の時期を「昭和元年」としたのだろう。

（※公開を控えるべき情報が含まれるため、「新宮市街地図　抜粋」は削除する対応をしている。）

むすび

自死した兄にとらわれ続ける母系一族を描いた『岬』、母系の西村家、義父の竹原一族や実父の浜村家のどの家にも属し切れない宙づり状態の秋幸を描いた『枯木灘』、そして母系一族のもとを離れ浜村龍造と闘うため、浜村家に身を寄せた『地の果て　至上の時』へと物語が展開していくように、母系から父系へと物語の空間は拡大していく。このように母系から父系へと作品の空間が広がる構造は、『岬』を描くまでの初期作品群と同様の構造を採っている。

初期作品群では主に兄の自死を問い続ける様を描いていたが、公刊された詩作では二作目に当たる『履歴書』において、実父の姿を詠んだように、中上が初期の段階から兄の自死だけではなく、実父の存在も問題意識として持っていたことがわかる。二つの問題は避けることができないテーマであったが、中上はなかなか兄の自死を書くことができず、兄の自死を言語化できるまで繰り返し描き続ける一方、実父を描くまでには九年の歳月を要した。兄の自死の原因の一端が自らにあることに気付いていた中上にとって、その死の謎を語ることは自らを断罪することであり、困難であったに違いない。それが言語化できたとき、自身に生を授けた、つまり兄の自死を招いた根源である実父との葛藤を描けたのだ。そしてその姿は竹原秋幸と浜村龍造に造形された。兄を初めとする母系一族と実父について幾度となく描いてきた中上にとって、〈秋幸サーガ〉はその集大成と言える物語群であり、そこに描かれた中上の分身とも言うべき竹原秋幸の成長によって兄と実父に対して抱いた葛藤に決着を付け、創作活動を次のステージへと進めることができた。

秋幸の成長をまとめておく。〝父殺し〟を果たすために秋幸は龍造と対峙可能な人物へと成長しなくてはならない。〈秋幸サーガ〉では異母妹との近親相姦や異母弟殺害などの通過儀礼とも呼ぶべき事件を通し、不安定な存在であった秋幸は確たる存在へと成長を遂げる。『岬』では姉や母の呪言の内でしか生きられず、その上、兄と重ねて見られることによって秋幸は自己を確立できず息苦しさを憶えた。過去にとらわれ続ける母系を否定するために、秋幸は近親相姦を行い、自分の意志を持ちにおい（＝自己）を獲得した。母たちが禁じた浜村龍造を実父と認めることを破り、自らの意志で実父と認めたことによって秋幸は彼女たちの領分から逃れられた。だがその代償として、『枯木灘』では母と母の子らからなる「西村」にも、義父の一族の「竹原」、そして実父の「浜村」の家のどこにも属し切れず、宙づり状態に置かれていることに秋幸は気づいてしまった。そして浜村家を意識するにつれ、内面を鎮め、浄化する土方作業に従事しても、それに集中できず心は乱れたままとなり、秋幸の内に隠れていた暴力性が姿を現す。仮に近親相姦を行わなければ、秋幸は母たちの領分に居続け、兄と重ねて見られ続けはするが、どの家にも属し切れない不安定な想いは抱かなかったであろう。秋幸は自

ら新たな試練を選び取ってしまっていたのだ。そして宙づり状態の秋幸は、これまで存在すら考えていなかった浜村家の親和を見せつけた異母弟・秀雄を撲殺してしまう。異母弟殺害は兄・郁男の反復であるが、それは同時に、兄が成し遂げられなかった弟殺害を完遂し、兄を越える行為でもあった。兄を越え、自身の帰属先を「路地」と定めた秋幸であったが、その血を流すことによって、「路地の秋幸」は死に、浜村龍造と対峙可能な邪悪な人間として生まれ変わり、浜村龍造へ挑んでいくことになる。ここに『地の果て　至上の時』の世界が開かれるわけだ。

ところで近親相姦と異母弟殺害に至らしめた要因は、複雑な血縁関係の中に置かれたことから生じる不安である。それは母系と父系双方に由来しているのだが、秋幸が向かった相手は浜村龍造の血が流れる者であり母系一族ではない。つまり、秋幸は近親相姦によって自己を確立すると共に、対峙すべき相手として浜村龍造を選択していたのだ。兄を殺し、弟をも殺した秋幸が最後に挑む相手は父・浜村龍造である。刑期終了後、母系一族を捨て浜村龍造のもとに身を寄せた秋幸は、彼の拠り所を次々と奪い、がらんどうとさせることで自殺へと追い詰め、その死によって彼が僭称した「覇王」の座を奪い、より強大な悪の力を得た。その力によって、秋幸は「路地跡」に業火を放ち自らを欺き続けた悪しき「路地」を浄化したのだ。

では、これらの秋幸の成長譚に『鳳仙花』はどのように関係するのか。『鳳仙花』は登場人物を除くと、内容に共通項がないように思われ、〈秋幸サーガ〉という物語群で読み解く必要はないと考えられそうだ。そしてこの認識こそ、これまで〈秋幸三部作〉の括りで読み継がれてきた所以だろう。だが本論文で確認したように、『鳳仙花』から父の欠如と天皇制批判のモチーフが読み取れることを考慮すると、〈秋幸サーガ〉に『鳳仙花』を含める必要性は明らかだろう。天皇と被差別部落との〈支配―被支配〉の構図は、佐倉と「路地」の関係に照らし合わせられることから、佐倉は〝路地の天皇〟と呼ぶべき存在と言える。『地の果て　至上の時』においてその佐倉から土地の権利を奪取したことが明らかとなった浜村龍造は、佐倉から土地の権利と共に〝路地の天皇〟の座も奪い取ったのだ。つまり、浜村龍造に〝天皇〟の意味を含蓄させており、それを殺す行為には〝天皇殺し〟の意味も持たせていると考えられる。そのため〈秋幸サーガ〉は単なる父子の相剋を描いた物語群ではなく、部落差別を生んでしまった近代天皇制を批判するという窮極のテーマを深層に籠めていたのである。

この物語群の特徴は第三章―三節「『枯木灘』論―〈秋幸サーガ〉と神話」で確認したように、神話的構造のもと物語が編まれている

ことだ。物語群の舞台となる「路地」は『鳳仙花』において国生みとも呼べるフサと勝一郎の性交によって誕生した。さらに、フサの子の中で主要な存在である秋幸、兄・郁男、姉・美恵の三人はそれぞれスサノオ、ツクヨミ、アマテラスの三貴神の性質を備えている。したがって秋幸の成長はスサノオが試練を乗り越え、本来持っていた能力を開花させた構造と一致しており、秋幸の成長は神話英雄の成長譚を彷彿とさせるのだ。秋幸と神話の類似はこれだけではない。この物語群には神話と関係の深い有馬という地が描かれる。有馬は浜村龍造が幼い頃にジジと暮らした地であり、『地の果て　至上の時』において秋幸が暮らす地でもある。この地には『日本書紀』においてイザナミの墓とされる花の窟がある。それは〈秋幸サーガ〉の主要舞台である新宮にあるゴトビキ岩と対をなし、それぞれ女性器と男性器を象徴しているのだが、〈秋幸サーガ〉では花の窟と対を成すものは、浜村龍造が有馬に建立した「永久に勃起し続ける性器」のような浜村孫一の石碑である。この石碑を秋幸は浜村龍造の血が廻っているようだと捉えていることから、その血を受け継ぐ秋幸の血が廻っていると置き換えてもよいだろう。神と対を成す性器をもった秋幸の交際相手が、これもまた『日本書紀』と紀州の意味を担う紀子であるように、秋幸を含め彼の周囲には神話のイメージを内在した者たちが多数存在するのである。

さらに構造面だけでなく、『地の果て　至上の時』で描かれた死者の蘇りを願う姿も神話世界を反映していると言っていいだろう。浜村龍造は秋幸に殺された秀雄の復活を願っていた。このような死者の蘇りについて記紀神話では、熊野を常世、つまり妣の国としており、死者が復活する場として捉えていた。[1] 神話に描かれた蘇りの地であることも関係し、浜村龍造は秀雄の復活を信じていたのだろう。『地の果て　至上の時』では彼だけではなく、新興宗教「水の信心」の信者らも死者の復活を信じていた。しかし、「水の信心」の教祖は死んだ老婆が蘇生したと称し、信者らに腐乱死体を見せつけることしかできない。これは死者の蘇りが不可能であることを示し、秀雄の蘇りを望む浜村龍造にその蘇生が不可能であることを教え、秀雄を秋幸に奪い取られたことを見せつけたのだ。このような外的要因も加え、秋幸によって拠り所を奪われ、がらんどうとなった浜村龍造は自死に追い詰められており、秋幸の〝父殺し〟は成し遂げられたと言えるのだ。

先行研究で論じられてきた〝父殺し〟では、浜村龍造に〝父〟以外の意味を与えていなかった。しかし、「路地の私生児」である秋幸にとって真の〝父〟は浜村龍造ではなく、四民平等と謳いながらも新平民（「路地」）を作り出した近代天皇制において国家の父とされた天皇と言っても過言ではないだろう。近代天皇制に対する問題意識の根底には、新宮が大逆事件の重要な舞台になってしまったこと

も関係しているはずだ。大逆事件で新宮から検挙された者に浄泉寺の住職・高木顕明や医師の大石誠之助がいた。浄泉寺の檀家の大半が「路地」の者たちであり、また大石は他の医師が避けた「路地」の者など貧しい人々を無償で診療したことから、「路地」と緊密な関係にあった。そのような彼らは、廃娼運動や部落解放運動に関わりを持っていた。[2] 特に後者は近代天皇制によって確立した身分制度に起因している。したがって処刑された大石誠之助や、獄死した高木顕明は社会主義弾圧の犠牲者ではあるが、近代天皇制の犠牲になったとも言えよう。中上が大逆事件を正面から描くことはなかったが、『鳳仙花』と『地の果て　至上の時』には大石誠之助の甥である佐倉を登場させ、間接的に大逆事件に触れている。第五章『鳳仙花』論で確認したように、佐倉が〝路地の天皇〟[3] と呼ぶべき存在であることから、彼を〈秋幸サーガ〉で描いたことにはとても大きな意味がある。したがって従来、一つの物語群として読み続けられてきた『岬』『枯木灘』『地の果て　至上の時』から成る〈秋幸三部作〉に『鳳仙花』を加えることで、中上がこの物語群の深層に込めた近代天皇制に対する批判が明瞭となり、〝父殺し〟も単に実父を殺害するだけでなく、近代天皇制における父なる天皇を無化する意味が内包されていると言えるのである。

以上のように本論文では、疑義を呈することなく支持され続けてきた〝父殺し〟失敗説を覆し、また中上の近代天皇制への批判が明瞭に示された物語群として〈秋幸サーガ〉の存在を主張して、〈秋幸三部作〉という既定の物語群の解釈の枠組の解体を行った。中上健次とテクストの研究にわずかでも資する成果となっていることを念じて結びとする。

注

（1）谷川健一『日本の神々―神社と聖地　第六巻　伊勢・志摩・伊賀・紀伊』（白水社、二〇〇〇（平成十二）年）

（2）辻本雄一『熊野・新宮の「大逆事件」前後　大石誠之助の言論とその周辺』（論創社、二〇一四（平成二十六）年）

（3）中上は天皇を差別の最初の発信地でもあるが、同時に賤民であると捉えていた。佐倉は「路地」を支配する一方で、大逆事件の首謀者の甥として差別されもした。

既発表論文発表誌一覧

博士論文としてまとめるにあたり、タイトルの変更及び加筆・修正を行った。

第一章「中上健次初期作品論―〈秋幸サーガ〉の生成過程―」（『解釈』第六十七巻第一・二号、二〇二一（令和三）年二月）

第二章「中上健次『岬』―秋幸が自己を確立するまで―」（『中京大学文学会論叢』第一号、二〇一五（平成二十七）年三月）

第三章―一節「中上健次『枯木灘』―秋幸の存在不安―」（『中京大学文学会論叢』第二号、二〇一六（平成二十八）年三月）

第三章―三節「中上健次『枯木灘』―「紀子」という名から見る〈秋幸サーガ〉の構造」（『牛王』第十号、二〇一六（平成二十八）年八月）

第四章―一節「中上健次『地の果て　至上の時』論―真の秋幸の物語の始動―」（『中京大学文学部紀要』第五十二巻第一号、二〇一七（平成二十九）年十一月）

第四章―一節補説「中上健次『地の果て　至上の時』論―作中における「水の信心」の意義」（『日本文学風土学会紀事』四十一号、二〇一七（平成二十九）年三月）

第五章―二節「中上健次『鳳仙花』論―史実の歪みから見える天皇批判―」（『解釈』第六十六巻第一・二号、二〇二〇（令和二）年二月）